をしないで宜い、個人の意思と云ふものは、社會全體を動かすに足りないと云ふ結論をする人がある。予は彼の英雄崇拜論には絶對的反對であると同時に宿命説にも又大反對である。予は因果説即ち源因結果の聯結に依て社會は進退すると云ふ方の説である。然らば社會の事は種々雜多の源因が總合して出來て來る結果とすれば、偉人の如きは無論社會の狀態が生じた結果でもあるが又此狀態を生ずる源因とも成て働くに相違ない此偉人の動作を原因の中に入れないと云ふ事は出來ぬ、決して英雄のなす事が社會一般の運動を支配すべき諸他の勢力を壓倒して仕舞つて獨力を振ふ譯には行かぬが、諸勢力中の一大勢力となることは慥かに爭ふべからざる事實と思ふ。英雄は時勢を造るものであると云つた人もあるが、或る度合迄は英雄が時勢を造るかも知れぬが、英雄のみが時勢の全體を造る事が出來るものでない。日本の近世に就て云へば、德川家康とか三代家光とか天海僧正とか或は松平伊豆守と云ふ大政治家が輩出して、三百年太平の基を立てた。

併し國民全體が戰亂に疲れ平和を望むこと、大旱の雲霓を望むが如き氣運に乘じたからでもある。又家康等の欲望を察すれば必ず天下を郡縣にして全權を握りたい封建は大嫌らいであつたに違いない。しかし大勢上已むを得ずして諸侯を置き、只其配合を考へて權力の集中に務めたのである。その證據には最初に作つた武家加除錄と云ふものに據れば、幾歲月の後には大名は消滅に了る勘定である。しかし此等の英傑の後世に及ぼしたる結果は偉大なものと云ふ事は明らかである。又降つて德川中興の君と稱せらるゝ八代將軍吉宗も隨分豪い事をした。あの人が起らなかつたならば、この日本社會の進歩が非常に後れたかも知れぬ。吉宗が第一に蘭學の禁を解いたと云ふ事は中々の英斷で、隨て醫學其他の科學の進歩を促がし植物の研究抔云ふ事が起つて來て御藥種畑抔(今の小石川の植物園)、の設けも出來、諸藩にも自然之に倣ふものもあれば、又天文臺を建てゝ天文を研究せしめ、太陽曆の正確を悅んで之を採用したいとまで云つたが世論を憚つて之を止

めた。經濟上に於ても惡貨幣を改造して享保小判を造つた、その利害は兎に角として經濟上に大革新を施した。又諸侯の參勤交代に道中の村々に賦役を課する、其賃錢は當時の勞銀の割合に合はぬ爲めに生する弊を嘆じて其賃銀を改めた、又司法上では、大岡忠相を登用して公平なる裁判を行つた、此は吉宗が少年の頃勢州の殺生禁斷の場所に網を入れた、三家の子弟であるにも拘らず遠慮なく之を捕へて詰問したのが山田奉行の大岡忠相、其時既に其の人物を見拔くだけの眼識があつたので、將軍職に上つた時に此人を江戸町奉行に登用した、此大岡越前守の裁判上の効は實に偉大なるものであると思ふのは、所謂大岡裁判の御蔭に依て大にエクイティー即ち衡平裁判と云ふ觀念を裁判上に廣めたに違ひない、幕府の政治も年數が立つに隨て先例古格の一偏に拘泥し、杓子定規の甚しきに至つて居つた。凡庸の奉行抔の裁判は、只天下の掟とか法度(ローブ)とか云つて百年も前に極めた粗漏な條目や間違つた先例を楯に取つて裁判をするが爲めに、寃罪に陷るも

の不公平な判決を受けても訴ふる所のない者が多かつた。此專制の積弊を刷新せんとの覺悟を以て、越前守は大にエクイティイの思想を交へて公平なる裁判を行つて名奉行の名を轟かしたものと見へる。乃ち成文法習慣法のみによらずして、大に情狀酌量の裁判法を開始した、英國の裁判の正しいと云ふのも、畢竟此思想を法律から離さないからである。これがなくなると今日の杓子定規の裁判に陷るのである。素より幼稚なる法律思想の世の中であつたが、しかしエクイティイの萠芽は慥に發出したに違ひない、所が近年西洋直譯流の法律で之を打切たと云ふものだ、要するに吉宗と云ふ英傑が出たが爲めに、社會に大刺激を與へたと云ふ事は慥かな話である。偉人の功績を否認する事の出來ないのは明かであるが、しかし社會全體の事情が矢張之を要求して居たには相違ない。

降つて王政維新の事になるが、此維新と云ふ事は中々の大事業であつて、よく老人連中はおれ達が奮發したので維新の大業が出來たのであると云つ

て、名々に自慢話や手柄話をするが、夫は全くないとは云はぬ、しかし詰りは西洋學が這入て來て、此の國に外國の風を吹かした爲に、日本の舊い制度が打ち倒れたので在て誰がやつた事でも無い。今に至て見ると八代將軍吉宗のやつた事抔は大に國運の開發を刺激したのである。言換ゆれば德川滅亡の一源因で、所謂德川家の爲めには中興の君では無くて中廢の君かも知れぬ。何故と云ふに彼の蘭學の禁を解いたと云ふ事、勿論醫學、兵學位の事で、政治學は許さなかつたが、其結果は政事に及んだのである、否直接の政治論よりは其根底か深く這入るものである。例へば蘭法の醫術に依て人體の解剖をすると、將軍大名も穢多非人も身體の構造に何の相違はない、故に天然に貴賤上下の區別はない筈だと云ふ思想が起る。又西洋の兵學に依て銃隊を組み戰術を學ぶ上は、弓馬鎗劍の術は廢たれる、即ち武士の立場を失ふ事になる。取も直さず醫學兵學の爲めに封建的德川政府は倒れたのである、廢藩置縣の萠芽は發したのである。漢學の方で云へば山

陽の日本外史も新井白石の讀史餘論も違つた事はないが、讀史餘論は世の中に歡迎されずして、日本外史が歡迎されたと云ふ事は唯社會の境遇風潮時勢が大に關係を以て居る、日本外史は新井白石の讀史餘論に基いた所もあらう、又讀史餘論も何れ太平記抔から出て居るであらうが、時勢と云ふ條件が添はねば働を爲さぬ。凡て社會と偉人の活動と相呼應しなければ其効果を收むる事が出來ぬ。佛蘭西ブルボン朝の末にルーソーが起つて民約論を書き、モンテスキユーが起つて萬法精理を說き、又ボルテヤが出た。是は佛蘭西の君主專制の極端に達した後で其社會の境遇と是等偉人の議論が相呼應して遂に佛蘭西の革命を生じたのである。日本の維新も同樣の譯で人物が起らねば出來ない事であるが、社會の進運が其所に至らぬと矢張駄目である。そこで實體に現はれたる此維新の大事業と云ふ者は何でありかと云へば、云ふ迄もなく封建制度を打ち破つて三百の諸侯を廢した廢藩置縣の大英斷である。併し之も時勢に人物の働が投合した爲めで、三百の

大名が忽ち土地人民を奉還して只の華族となり又中には平民になると云ふものさへあつた。士族が平民になる抔は多かつたそこで外國人抔は是を見て非常に驚いた。凡て人は己れの特權を得る事に務め、又特權を得れば是を維持するとに汲々とするものであるのに、自分が現に持つて居る所の地位や特權を拋棄すると云ふのは何たる事か、始ど想像も付かんと云つて居つた。歐羅巴では封建制度は三百年の歴史談に屬して仕舞つて實物を見た者はない、日本に來て見ると、其封建が嚴然と存在して居た。この嚴然として土地人民を私有する貴族が、維新の一擧で譯もなく之を奉還する。帶刀の武士が脱刀すると云ふ事は實に驚いた。之は歐羅巴でも今日迄一大疑問に成て居る。維新政府には彼の木戸西郷大久保等の人傑があり、又よく大義名分のある所を天下に知らせたからであると云ふ工合に、近世史とか云ふ類の本には書いて在が、素より日本人獨得の公明正大の氣風大義名分忠君愛國その他の犧牲的精神が大に助けて居るは勿論である。無論此當時

の人傑の功勞もあるには相違ないが、外國交際の壓迫と云ふものが無かつたならば、又各自の内情と矛盾して居つたならば、あれ程早く又容易に大事業が行れなかつたのであらう。然し其内情に於ても強て之を妨ぐる程の者はなかつた。然り維新の政事家は英雄であつたには違い無が、斯う云ふ事情が在たから其事業が意外に早く完成したのである。素より世界開明の風は封建制度を吹き倒すに亦極つて居る。又大義名分の思想も大に之を助けて居る。各藩の經濟上の利害も亦よく投合し無かつたならば、明治四年に行はるゝ事は明治八年になり、八年に行はるゝ事は十年になると云ふやうに後れたには違いない、之に由て見れば偉人の働きは有力なものであるが、併し其働は社會全體の流潮と相結び付かなければ何等の効を奏する事は出來ないのであると云ふ事が明白に分る。之に依て英雄萬能論の誤謬を悟ると同時に偉人無能論の正鵠に當らざるを知る事が出來る。

一七　聖人と英雄

通常此偉人の中に於て英雄豪傑と稱せらるるものと、聖人賢人と呼ばるゝものとの二種類がある。卽ちゼ、グレートの稱號を附せらるゝ者と、セーントの稱號を附せらるゝものゝ二種がある。例へば魯帝ペートル、ゼ、グレート基督の使徒セーント。ペートルと云ふが如く、兎に角俗界の偉人を英雄豪傑とし、教界の偉人を聖賢とした。其兩者の性質に於て、一面は全然反對し、他の一面は一致する。先づ其聖人君子と英雄豪傑との通有性と云ふは、意思の强固と云ふ點である。不撓不屈の精神を有つと云ふ點である。所謂英雄にせよ聖人にせよ、大人物たらんと欲すれば、强固なる意思を備へなければならぬと云ふことは疑ひもない。先づ孔子を見るに、己れの道を擴むる爲に艱難辛苦を忍び、如何なる障害に逢うても決して屈したことがない。失敗をすればする程益々志を固うするの趣は、其の一生を通觀す

れば分る。彼れが最も弱音を吹いたと思はれるのは、彼陳蔡の間に苦められた時、已みなん已みなん我道容れられずと云つた。是が孔子の弱音の極度であらう。其時傍に居た顏回は、夫子の道は至大なり、容れられざることと何ぞ憂へんと言ふて漸く慰めた。然し天我を以て木鐸となす、天が己れに道を擴めよとのミッションを帶びさしたと云ふ深い信念を以て終始働いた。釋迦の如きも彼のカスト卽ち階級制の强き印度に、平等無差別の說を立てたのは、實に驚くべき一義である。印度には古來カストの制があつて、其間の區劃の嚴重なる事は、中々昔日の日本の士農工商位な話でない。尊卑の別が甚しく、一の階級に生れた者は、他の階級に移ることは決して出來ぬ。其最上階級はブラーミンと稱する僧族で、此の僧族が非常な權力を握り、他の人民を虐待した。その所へ釋迦が起つて、平等無差別を說いて衆生濟度を計り又大に彼等の腐敗を攻擊した。寺院の門側に二王と云ふ二大像が立て居る。卽ち婆羅門宗の神を佛敎で門番に追下げたとの話である。

釋迦は婆羅門教より出でゝ婆羅門を打破したるが如く、耶蘇も又猶太教より出でゝ猶太教を打破したのである。而して此三大聖人を始め凡て聖賢と稱せらるゝ人には、功名心と云ふものは一毫もない。自分の利慾名聞は一切捨てゝ了ひ、その理想その信念に向つて全力を注ぐので有から、世人は自ら其德に感ぜざるを得ぬ。無論非凡の智と、非凡の德を備へて居つて、公平無私、只己れの理想に向つて前進するのであるから、假令其中には間違つた事もあるが、天下の人心は其至誠に感動して、次第に之に歸依するに至るから、後世に至るまで其德化を及ぼし、千載の下其遺德を仰ぐのである。是が所謂聖人、君子、セーントの人格の高尚なる所である。

然るに英雄豪傑と云ふものは、大に之と其趣が異つて居る。其英雄の爲す所言ふ所は何であつても、多くは是れ功名心の凝結、利己主義の權化と云ふべきもので、英雄豪傑と聖人君子とを比較すれば、後者は至善と信じ理想と信ずるところに向つて世の中を導かん、導くが爲めには、一個人でも

間違つた所があると思へば、之を敎化して其間違を正さん、社會全體が間違つて居れば又これを正しい方に向けんと云ふことに盡力する。しかし英雄豪傑と云ふ功名の爲に働くところの人間はさうでない。間違つた者があるなら、間違つたなりて其儘利用する。何かの役に立つてあらうと、世の中の邪論迷信と雖も尙之を利用して自己の目的を達する。早く云へば酒を好かば酒を飲ませる、錢を欲すれば錢を與へて取込まん、それが其人の爲に宜からうが惡からうが、己れが利用し得るだけ天下の人を利用すると云ふ事が多い。時には非常に高潔にして立派なる事もするが、所謂英雄人を欺くの類で、政略權謀から出ることが多い。而して古今東西英雄豪傑なるものゝ內、最も時代の新らしく進歩したる社會に現はれた近世的思想の英雄はナポレオンである。彼は實に廣大なる頭腦を有つて居る。彼は佛國革命の亂脉の際に現はれて、自由平等親愛を標榜する革命黨と、十字軍以來名家名族を以て誇る所の門閥の輩を、籠絡して一丸となし、其力を以て歐

洲各國をも征服した。其の事業は戰爭ばかりではなく、政治上、社會上、實業上、學問上、總ての方面に、殆ど考慮の及ばぬとはなく、實に偉大なものである。秀吉が豪いと云ふも、賴朝が豪いと云ふも社會が簡單であつただけ、考へて居たことも單純である。然るにナポレオンに至つては實に用意周到で、如何にも進歩したる豪傑である。諸帝王を自家の膝下に脆つかしめた此英雄は、普通英雄豪傑の思ひ及ばず又夢にも見ぬ所に迄着目して居る。一例を言へば、學問上數學の對數表即ちロガリズム表を改正せねばならぬと云ふので、プリニー博士を總裁として此事業を完成し、又自ら財政整理を斷行して複式簿記を採用した。これが官廳簿記に複記式を用ゐた濫觴である。又法典編纂を企て彼の奈翁法典を作り、隨つて裁判所構成法を案出した。これなどは即ち社會の爲めよりは、自分の權力を維持するが爲めにやつた一例である。彼の複雜なる搆制法を設けたのは、革命家の多數は法律家で一番口八釜しい奴輩で在から、何んとかして彼等の口を塞

がなければならぬ。其には裁判所に買收するのが一番可いとて、成るべく冗員を置き得る構成法を案出したのである。然るに曾て日本の政府はその構成法を盲目的に模倣し、無理に一夜作りの法官を用ひて間に合せたのが即ち今日の裁判所構成法の元である。又商賣の點に至つても、奈翁は英吉利の製造品を歐羅巴各國に買はせぬことにした。之が有名なるコンチネンタル、システムである。しかし夫が爲に亦妙なことが起つて來た。即ち佛蘭西政府が各國の港に番所を置きて、輸入の英國品を調べ、規則に違つたものは入れぬと云ふので、却て之が爲めに一種の密賣買が起つて來た。佛蘭西の役人に賄賂を贈つて密輸入をする。歐洲全體が英國製品の缺乏に苦み、非常な高價で買ふから、賄賂は幾らでも出す。ナポレオンは直ぐに之を嗅付けて自から密輸入の巨魁になつて、もつと取れ々々と言つて上前を取り、遂に自ら禁制品の密輸入を營んで之を第一の財源とした。そこで商賣は全く政府の掌中に握られて、人民に營業の餘地がない。其上學校に於

ても一切兵式教育をなし、政事經濟哲學の書は嚴禁し、卒業生は悉く文武の官吏に採用し、屬國の少年も此方法を以て教育し、只文武の官吏に成より外に途が無く成た。斯の如く一切の事皆官業に歸して、國民に自營の精神、獨立の元氣、創始の氣象を消滅せしむるの端緒を開き、今日に至る迄佛國の制は大體に於て之を踏襲して殆ど變化なく、漸く衰亡の兆を見るに至つた。國家の不幸之に過ぐるものはないが、是がナポレオンの英雄たる證據である。而して其の惡德に至ては殆ど至らざる所なく、あれ程のうそつき、あれ程の背信、あれ程の慘忍はない。それが大きな事計りでなく、頗ぶる些細な事に至る迄、其惡德が顯はれる。某文豪の文章に、奈翁はイホールを覗く位の卑劣な小人なりとある。歐羅巴ては人の室を鍵の穴から覗くほど賤しい所業はないとして居る。すなはち日本室の立聞き以上てある。この位ゐてあるから、先づ嫉妬心の甚しいことは言ふ迄もない。ナポレオンの時代にステール夫人とレカメヤ孃と云ふ二人の女があつた。前

者は學者を以て鳴り後者は美人を以て鳴つた。此二婦人が奈翁の爲めに忌まれ、若められたと云ふのは、當時奈翁の名聲は非常に盛なもので、實に名譽獨占の獨舞臺の處へ、意外にも女性の中に、有名な學者や美人があつては、自已に對する世人の仰望を幾分か削らるゝ勘定になると云ふ所から此二婦人に迫害を加へた。其外に尙嫉妬心の最も著しい例を擧ぐれば、伊太利のベニス市を略取した時に、ナポレオンが入市式を行うた。人民は之を觀んが爲に雲霞の如く集り、彼は萬目の焦點となりて、萬歲聲裡に、意氣揚々として凱旋門を這入つて來た。其際遽かに多數の者が他の方に眼を注いた、何故かと云ふに、或る窓から絶世の二美人が首を出したが爲てある。ナポレオンは之が爲めに頗る不興になり、憤怒の念押へがたく早速彼の二美人等を捕へて禁獄し、竊かに毒殺せしめたと云ふ。ナポレオンは自已一身に萬人の注意を集めるべく腐心し苟も此注意の一部分を奪はんとするものは、其の何物たるに拘はらず妬み惡むのてある。功名心も此如きの

甚きに至ては、之を一種の病氣と云はざるを得ぬ。是れ英雄豪傑の心裡の半面は斯の如く暗黑なることを知るの一例である。乃ち偉人の中にも、英雄と聖人とは各々特性を異にし、一は信仰すべく尊崇すべく、他は驚賞すべく恐怖すべきものである。只意思の强固にして、初一念を押通すの一點は、兩種偉人の通有性にして吾人の大に學ぶべき所であろう。

意思の强固にして不撓不屈の精神を有つて居ると云ふ一事は、大に考へなければならぬ事である。人悉く聖人となり、又悉く英雄となることは出來ぬ。一般の少年は聖人英雄の卵であるが、唯卵の儘で終つて仕舞ふのが多い。其卵が社會の必要の爲めに發育したならば、其内の一人若くは數人は、必ず物になるに極つて居る。只不幸にして、否、幸にして斯る事情の結合する事は極て少ない、凡人と云ひ偉人と云ふも畢竟比較上の話であるから、之を必要とする事情さへあれば、丈の高い人が英雄となり聖人となるに違ひない。英雄も聖人も別に凡人と異なる怪物でもなく、又鬼神でもない。

偉人は總て凡人、凡人は總て偉人である。乃ち世上の青年は皆盡く聖人英雄の卵子であるから、聖人にも英雄にもなり得るのである。唯だ、歴史を讀んで野蠻時代の英雄を今日の文明社會に學んではならぬ。亂世の英雄其儘を氣取られては、隨分厄介なものである。世の中に英雄の成りそこね程厄介なものはない。世の中が進歩して來ると、戰爭が上手なれば不品行は構はぬとか、外交が功者なれば不信義は厭はぬとか云ふ譯には行かぬ。文明の社會は斯の如き不具者を許さぬ。所謂英雄色を好む、英雄人を欺くといふ如き英雄は、時世後れの不具者である。成るべく人格を圓滿に發達させて、自己の缺點自己の短所と思ふ點は、必ず撲滅することに努めなければならぬ。進歩したる英雄は圓滿に發達しなければならぬ。決して濫りに歴史の豪傑、亂世の英雄を氣取るべからず、文明の豪傑になるやうに銘々心懸けなければならぬ。

一八　青年就職談

吾々が炒豆を喰ふときは最後に悪いの許りが殘る。不思議にくず許り殘る。黒焦げ、半かけのみで、決して滿足の粒は殘らぬ。是れは態々はね除けた譯でない、殆ど不意識的のやうであるが、善惡優劣の淘汰作用が最も迅速に行はて居る證據である。一歩進んで蜜柑を喰ふ時になると、その撰擇法が稍々意識的になつて、形のよい大きな色のよい男振りのよい蜜柑が先きに喰はれて、矢張り不器量ものが跡に殘る。尙ほ進んで蜜柑以上の物となると、益々此判斷識別が嚴密になつて來る。卽ち人間を選むことになつては容易の事ではない。青年が學校を卒業したならば、此撰擇に掛らねばならぬ。世間の會社、銀行、諸商店、諸工場から人間を仕入れに來る、どうか私の方へは善い人を三人よこして貰ひたい、私の方へもよいのを二人許り、何でも善い人許り注文が來る、惡い方の注文は一向來ない。其よい人

と云ふのは無論學問、身體、品行と三拍子揃つたのを欲しがる。併し乍ら大體に於て優等な人物が數人あるとすれば、又其中の言語動作、風采容貌等の細目に付て成るべく善い方の人を採る。皮肉に云へば佛頂面の者よりは笑顔のよい方が賣れる、同じ笑顔の中にもいや味のない方が先きにはける。人間も炒豆も同じ樣な理屈である。勿論賣殘りの品にも良いのが無いでもないが、何處かに缺點があるに相違ない。これは必ずしも他人の使用する所とならず、單獨に世の中に出てゝ獨立に仕事するとしても、同じ理窟であつて、其得意先たる社會の必要に適合する方が仕事もよく運んで成功すること確實である。

要するに智德體三拍子揃つたものならば、素より申分の無い譯であるが、實際に於てはそう甘く行くものではない。故に成べく自己天稟の長所を發揮せしむること同時に、他の一方に於ては自己の短所を伸ばし、缺點を補ふの心掛けを怠てはならぬ。殊に今日の學生は往々にして、比較的簡易な

事柄に拙劣な爲めに失敗する。例へば簿記、手紙の文字が拙いとか應接振りが下手だとか、彼等の所謂末技の爲に落第するものが多いのは誠に遺憾千萬な事である。是等は平素の心掛次第で如何樣にもなるもので、高尚な學問は素より大切であるが、常に此小さな事柄を輕蔑せずに勉强する事を忘れてならぬ。

全體學校の紹介に依て總ての卒業生が就職の口を得ようと云ふは六ヶ敷事であるが、今日の場合に於ては勉めて之をそれ〳〵紹介して、使用者と被使用者との爲めに媒介の勞を取るは機宜に適した便法と思はれる。學校を出た計りの青年には社會上の關係もなく手掛りも少いから、學校の先輩が之を紹介するのは無益な事とは云へぬ。只可成比較的人物才能學術の上に優等なものを推薦するのである。左もなくては採用者の方にも安心して使用する譯に行かぬ事は申迄もない。隨て紹介狀の書き方が最も大切なると同時に、最も六ヶ敷いものであるが、之を受けて讀む方の人も亦た中々讀

方が困難である。これに就て倫敦の銀行界にも一種の口傳が行はれて居る。手代就職の紹介狀を讀むの法は、例へば此男は誠に勤勉忠實で、あると書いて、他に何も云はぬ時は此男少々愚圖の方である。又紹介狀に此男頗る機敏にして才機縱横抔書いて、他に云はぬ時は此男油斷のならぬ代物であると云ふ事がある。丁度嫁の世話人が某家に妙齡の令孃あり、誠に順良なる而かも藝にかけては何一つ出來ぬものはない杯と云ふ時に、御器量は如何と問ふと左樣……先づ十人並と云ふ。此十人並と云ふ語は誠に調法な語であるが、實は不器量の代名詞に用ひらるゝ媒介者の術語に過ぎぬ。成程目鼻が付いて居る以上は化け物でない丈の保證は出來る、之を名けて仲人口と云ふのである。併し之は世間一般の話であるが、學校の方では何よりも確實な證據は成績表と云ふものがあるから、各學科に於て本人の得たる點數に依て、長所と短所とを知る事が出來る。又本人の良否は其人の信否に止まらず、其學校出身者一般の優劣をトするの標準とせらるゝ事が多いか

ら、その責任の重大なることは非常なものである。而して今日青年の志す方面は素より多樣であるが、其過半は實業界にある。之は時勢の然らしむる所で、歐米諸國でも同樣の情況である。昔時は大學卒業者など云ふものは醫師、僧侶、辯護士、敎員等に限られたるものであつたのが、近來は商工の實業に學識人格の必要を生じたるが爲めに、其形勢を一變する事に成つた。又中等の實業敎育を受けたものゝ如きは、最初より此方面に向ふ事に定まつて、其技術上の練磨は宜しい方であるが、人格の點に於ても人後に落ちぬよう心掛るのが最も大切なる事と思ふ。畢竟人間も賣品となつて市場に出る以上は、買人の希望に注意して之に適するの心掛が肝心である。而して雇主たる人々の希望を聽くに、其境遇次第で種々に變つて居る。現に或輸入商の話には私共の方では英語、英文の達者なものが欲しい、殊に英語の商用文を上手に書き商用電報を書く人が得たい、さすれば私の事業は幾らでも擴張し得るのである。資本が要るときは銀行へ行けば幾らでも

出來る、銀行は金を貸したがつてゾク〳〵して居るから此の方は何でもないが、唯人がない、どうか此のコレスポンデンスのよく出來る人が欲しい。幾人でも宜しいと言つて居る。又或人の云ふには、それは書面を巧に書くことも必要である、英語や獨語を巧に話すことも必要であるが、それは第二として、どうか身體の達者な人が欲しい、何故かと云ふと學術上の事は店に來た上でも素養さへあれば勉强で出來る、一番困るのは身體の弱い人である、如何にものがよく出來ても病氣で休まれては何にもならぬ、仕事に最も大切なる要件は切れ目なく續いて行くと云ふ事である。上手にやつてとぎれるよりは下手にやつて續く方がよいと云ふて居る。こんな風に十人十色で人々の境遇に依て色々說もあり、希望もあり、又いづれも尤もな事ではあるが、何れ彼等の直接に感ずる必要から起る說である。

而して如何なる場合にも共通して最とも大切なことは正直と云ふことである。此の最大要素が缺けて居ては身體の强壯、學術の優等も何の役にも立

たぬ。却つて大不正直者は其強い身體と其の鋭い智力を害用して、大なる惡事を働いて自他の不幸を來たすことは珍らしからぬことである。何でも正直でなくてはならぬ。卽ち苟も其の人の品性が惡かつたならば、どれ程學問があつても身體が達者であつてもサッパリ役に立たぬ。嘘を吐く人間が一番惡い、どう云ふ商賣でも、どう云ふ仕事でも、どう云ふ境遇にあつても、嘘を吐く人間であつたならば、其人が他の點に於て如何に卓絶し、假令ひ三十二相揃つて居つた所で、一つの嘘吐きと云ふことで何も彼も打毀して仕舞ふ。しかし誰れしも嘘を吐く事を好む人はなからうが、色々自分の不都合不勉强と云ふ所からして、ツイそれを胡魔化さうと思ふて一の嘘を吐く。嘘を一つ吐くと其嘘が段々子を產んで行く、嘘程子を產む物はない。一遍嘘を吐けば次に、本當の事を云ふと矛盾して來る、卽ちもとの嘘が露見して來るから、嘘の爲めに又嘘を吐く、二度目三度目と順々に嘘を重ねて、到頭大變な嘘つきになつて仕舞ふ、嘘つきは泥棒の始めなりと昔

から言つて居るが誠に名言である。銀行會社に雇はれて居る人殊に無敎育の者に往々不正な事をして失策じる者が澤山あるが、それは始め僅かばかりの給金がとれる樣になると、附き合とか交際とか云ふ名を付けて酒を飲み覺え、種々の誘惑に遇ふて之を刎ね返す丈の勇氣もなく、段々金に困る所から無理な事をする樣になる。最も簡單な無勘辨者は銀行の金を持逃げする。それより少く考へるものは相場に手を出し、無論失敗する。穴が明く、それを塡める爲めに一層大きく相場をする。一層大きな穴が明く。露顯する。チャント順序が極て居る。此等の持逃げ抔する人間の心得違いは、銀行抔て金を澤山扱ふからとて金を金と思ふが惡い。銀行に金が積んで在るのは綿屋に綿が積んであると變つた事はない、金ではなくして一種の商品である。是位の事は知らぬともなからうが、所謂人格の到らぬ所から心得違ひをするのは情けない。素より此等は最下等の輩として論ずるに足らぬが、これ程の馬鹿でなくとも性急なる青年の癖として、往々餘り早く立

身せんとして身を過まつものは頗るおほい。エマーソン曰く、青年の身を誤るは餘りに早く富み餘りに早く名を得んとあせるからであると。是れは實に名句である。富貴功名も順序を踐んで勉强して行けば相當の物は得らるゝのであるに、それを無暗に焦つて踐み外すのを歎じたのである。急がば廻れと云ふ諺の如く、不撓不倦地道に行くと云ふ事は案外功を積むもので、一足飛にやらうと思て失敗し、甚しきは不筋な事をして長き將來を棒に振り、世に立つ事が出來ぬような事は實に愚の極である。

併し從來の日本では社會の制裁が不完全であるから、隨分甲所で不都合を働いた者が、乙所に行つて何喰はぬ顏してやつて居る者が澤山ある。世の中が進んで來ると、最早そんなことは出來ぬ。例へば英國の實業社會に居つて一つの不都合を犯したならば、以來は迚も頭を出すことが出來ない。職業を求むるにも、今迄居つた會社銀行の證明書を持つて居なければ、誰も用ゐぬとすれば、一の處で不都合をすれば、何處迄も浮ぶ瀬はないことに

なつて仕舞ふ、そう云ふ制裁があつたならば、誰も惡いことをせぬ樣になる。倫敦の如き實業界の秩序が正しい所では、晝飯をする飲食店にしても支配人以上の人の行く所なぞへ、其以下の使用人が行くような事はない。素より一皿か二皿の辨當、値段が高いと言つた所が知れたものだが決して行かぬ。下役の者はその次の家で晝食をする、小僧、丁稚は又其次の廉い所へ行くと云ふ樣な順序であるから、金を餘計使つてみたくともそれは出來ない。それであるから日本の如く小僧が金を持逃げしたとか、手代が引負をしたとか云ふことは滅多にない。又それをした以上は迚も再度の顏出しは出來ぬ、日本では其邊の極りがまた甚だ漠然として居るのみか、又とられた方でも存外呑氣なもので、若氣の誤りで再びやるまいから許してやれ、暇を出すにも相當の名を付て外へ轉ぜしむると云ふ有樣である。又一には自分の責任を免れ之を荒立てゝは、却て會社の不取締を公表する譯になると云ふので、會社の制裁がゆるいから、ッイ其不埒者が他へ行つて使

はれる事が出來る。併し教育を受けた者が商業上に使はれる樣になつてから、こんな不埒者の割合が段々少くなりつゝある。今後教育ある者を以て實業界が充たされた上は、此の如き不埒者の跡を斷つであらう。それと同時に社會の制裁が强くなり、人格に價値を生ずる樣になる、人物の直段附けが出來るやうに成て來るであらうと思ふ。

元來富には有形無形の二種があつて、人文の進歩と共に無形なる富の區域が廣くなる、經濟法律の思想が段々進んで來るに從つて、無形上の富は益々其種類を增して來る。版權、特許權、商標權、相續權、組合權の如き次第に確實となつて、無形の富を作る事になつて來たと同時に、人間の人格も一つの商品の如くになるであらう。卽人物保險會社と云ふ樣なものが起て來て、人格に保險をつける、銀行會社其他の商店工場等に入るに際しては人物保險を付ける、此人なら一萬圓迄の仕事を任せても宜い、此人は十萬圓までの事を任せて宜い、此人は百萬圓までの事を任せてよいと保證す

る仕組は久しく西洋に行はれて居る。日本にも其の端緒が開かれる樣になつたが、まだ〳〵中々立派なものが出來ないやうである。色々會社が出來るが、一向此邊の事が起つて來ない。矢張身元保證金身元保證人など云ふ馬鹿〳〵しい事を遣て居る。若しも此仕組が立つて人間の價格が極まり、品性に價を付ける事に成ば、大に人格の向上を奬勵するの効も在てあらう。此人物保險の仕組も畢竟文明社會に於ては、無形の品性も價格を備ふるに至つたといふ一例に過ぎないのである。結局正直は最上の政略と云ふ極平凡なことになるが、此平凡を實行する人にして始めて非凡なことが出來る。

一九　青年交際論

凡そ學校は言ふ迄もなく唯勉强して卒業はしたと云ふ丈けでは大して面白いものではない。成程夫れ丈けの藝術は得られるが、未だ學校の利益の全部を獲得したものではない。學校には藝術以外それに附隨した利益が多く

ある。第一は朋友の關係で互に學校を倶にしたと云ふ事である。其緣故を利用して一生の間續けて交際する事は、先づ以て甚だ愉快の事であるのみならず、大なる利益である。人間が此世の中に居つて孤立して居る程詰らなく、面白くないものはない。友達は欲しいものである、交際はしたいものである。しかし無闇に人と交つても必ずしも面白くはない、利益があるかと云ふに必ずしもさうでない。何故かと云へば、世の中は善惡共に進む、色々悧巧なる人が出ると同時に、奸智に長けた人も隨分ある。友を選ばず交際をすると隨分欺かれ惡弄せられ、害はあつても益はない。殊に一時の飲食の友は誠に詰らぬ、徒に金を使つた結果は自己の人格を損ふの外、何も得る處がない。安心して交際し、相互の爲になる友達が欲しいものであると云ふのが人間の最も强き希望である。所謂益友を得んとするのが人生の最大欲望である。素より學校朋輩丈しか附合はない杯事ふ馬鹿な事はいけぬ。人間の交際は成るべく廣くなくてならぬ。そこで同じ學校を出て、

雙方氣心の知れた者が、互に交るのは、安全で愉快で且つ各自の發展上必要な事と思ふ。互に切瑳琢磨して人物を高め、又利益を進めねばならぬ。此世の中は引込んで居れば居る程、人から攻め取られる許りである。進んで此方から攻擊的に出掛けて行かなければならぬが、それには如何に剛堅の人と雖も獨力を以て進んでは中々旨く行かぬ。一般社會の競爭場裡に於ては、人々皆各自の利益を保護することに汲々として、他人に毫も與へざるのみか、益々壓迫を加へんとするから、相當の團結力を以て之を防ぎ、之れに當るの必要はある。そこで愉快の點から云ふも、修養の點から云ふも、利益の點から言ふも、互に親密に交り、相救ひ相助けて、共に社會に向つて進むと云ふ方針を取るのが、經驗に乏しい青年交際の手始めとして、最も大切のことで、是れが卽ち學校に附隨した利益である。此利益は自から進んで取らねばならぬ。打捨てゝ置けばドン〳〵逃げて行つて仕舞ふから、逃さぬ樣に網を張らねばならぬ。其網が卽ち此の交友倶樂部の如きも

のである。此の如き倶樂部を設けて、互に寄り集り、成る可く金を使はぬ樣に、面白く談話して高尚に樂んで居るうちに會員の人格を高め、又自然に共同發展の利益が生じて來るのであるから、是は予の贊成せざるを得ない處である。

抑々近代の特色と云へば、要するに衆力の結合である。昔は戰爭と云ふも面々の一騎打であつた。其一騎打の戰爭が、近世では隊伍を組んで戰ふことになつた。又商賣も、昔は面々に店を出し資本を出して商賣を營んで居つたが、近來は合資會社・株式會社抔云ふ組織が出來て、個々に持て居る少額の資本を集めて大資本となし、大會社を造つて、而して大仕掛の商賣を營むと云ふことに成た。卽ち個々の力を打つて一丸とした團結力を以てするのが、敵を攻め己を守るに最も優れたる者で有と云ふことが、戰爭にまれ實業にまれ、社會の有らゆる方面を支配することゝなつた。それが卽ち社會を開明進步せしめた原因である。英雄豪傑はあへて昔の特產物とかぎらぬ。

今日でも矢張り出る譯ではあるが、今日の社會組織は昔の如く天然的に英雄豪傑の產出を待つべき必要はない。人爲的に何時でも英雄を造ることが出來る。昔は大豪傑でなければ出來なかつた大戰爭も今日は規律と組織とを以てする。昔加藤淸正でなければ敗れなかつた敵も、今日は隊伍組織を以て敗ると云ふことになつて居る。昔は三井、鴻池でなければ出來なかつた商賣も、今日は株式組織を以て其百千倍の事をやる。卽ち現今文明の特色は集合力に依て總ての目的を達すると云ふことに在る。

既に社會が斯くの如き組織である以上は、學校出身者も、啻に學藝修得のみを目的とせずして、幸に其の間に得たところの友誼を持續し、其力を利用するが面々に取つて非常なる利益である。歐羅巴の學校に就いて見ると、獨逸の學生は學問を主として居るとか、佛蘭西の學生は交際を主として居るとか、米國の學生は實用を主とするとか、英國の學生は人格を主として、學校生活の間に得た交誼を生涯持續するとか、學風は國に依つて夫れ〳〵

一長一短あるが、吾々は其一に偏せずして、各國の長所を採つて行きたい。日本が今日迄長足の進歩をした所以は、各國の長所を採つた爲めに外ならぬ。此の如く他の長所を取るのが日本人の長所である。日本人は無闇に外國を眞似る國民であるとは、外國人が云ふのみならず內國人自からもさう思つて居る處である。併し猿が眞似をする如くに眞似をする國民ではない。猿は善惡共に眞似をする所のモンキイズムでなくして、日本人は模倣力に富んで居る內に又創始力もある。善惡正邪利害得失を分別して、善い物は採るが惡い物は採らぬ。何んても食ふが其中の非滋養分を吐き出して、滋養のある部分のみを吸收するのが日本人の豪い所だ。兵式にしても、蘭式、英式、佛式、獨逸式と段々變化する其中に、各式の長所々々を加味し、又昔の甲越流の長所と雖も徒らに棄てぬ。今日でも昔の名將が戰つた跡に就いて調べて見て、其陣取や戰略の良かつたものは採用する。日本が强大國に勝つた所以は分別に富んだる模倣に在る。是は形に於て最も見易い兵式

に於て例をとつたのであるが、敎育に於ても政治に於ても其他百般の事、皆此の模倣の中に善惡正邪を分別して善い所を吸收したのが、今日までの日本進步の原因である。學校の事も同樣な譯で、此方針に依りて勉强をすると同時に有益なる交際法を設けて、其慶に依らんことを望むのである。

二〇　煩悶

近來煩悶と云ふことが一の流行語で、予の處へ來る人でも、どうも是迄の仕事は面白くない、それで變へて見た所がそれも左程の事でない、何か面白い事はあるまいか、此節私も實はどうしたものかと大に煩悶して居ります、と云ふやうな類の事が大變に多い。其人がそれ程煩悶して居るかどうか知らぬが、兎に角世の中に煩悶の事實があるに相違ない。其最も極端に至つた者は意氣銷沈精神異狀を呈して、例の瀧の中へ飛込み、或は火山の穴へ飛込む。文部大臣が訓令を出して、今の學生を戒めるとか、敎育社會

に警戒を加べるとか云ふとは至極良いが、そんなに驚くほどの事はないと思ふ。巖頭の感と云ふ非常にむつかしい文章や、又むつかしい詩歌抔を書いて死ぬ者もあるが、是は唯言葉をかへただけで、昔の情死ならば一生托蓮南無阿彌陀佛と云ふ所であるが、そんな陳腐なことは云はず、もう少しゑらさうな事を云て、人を驚かして死んで見せやうと云ふやうな、とんでもない所へ力瘤を入れたので、昔から飛込む者は珍らしくない。こんな者に構つて居ては仕方がない、只之を褒める者のあるのは怪しからぬ。要するに人間は快樂を望む動物である、所謂厭世家悲觀家と云ふ者は、如何にも快樂を欲しない、幸福を避けんとする樣であるが、其實はもつと快樂が欲しいと云ふとて、世の中はもつと面白く有相な者だに、案外つまらぬものである、社會はもつと快樂を與へさうな者であるに、甚だ之を與へるに吝さかである。又宗教家ならば來世の淨土を樂んで、早く此穢土を去らうと云ふが如く、皆大に快樂を貪らんとする人である。是は人類の天性であ

つて無論獲られ得るだけの快樂を得るが宜い、併し其快樂を餘りに低い所に求むるの有害なると同じく、餘りに高い遠い所に求めないが宜い。抑も人の幸福は如何なる邊に在るかと云ふことは、昔からの問題で印度希臘の哲學者などにも、快樂は人間の目的であると說くものもあり、又是れに反對する者もあつて、要する所、人生觀は苦樂の問題に歸着する。彼のエピキュリヤン哲學の開祖エピキュラスは、人類の不幸は二種の誤謬に基因する。其の一は希望の誤謬、他の一は恐怖の誤謬で、希望の誤謬とは富力、權力、名譽等の慾望餘りに强く、是れを得んが爲には如何なる惡事をも行ふものなれども、此富力、權力、名譽は、實際に之を獲得して見ると、遠方から眺めた程に結構なものではないから皆失望する。然るに人間は此の品物を買被ぶりて躍息するのが幸福を殺ぐのである。第二に、恐怖の誤謬といふのは、恐れなくともよいものを恐れる、卽ち今人の最大苦痛は死を恐るゝ事であるが、死といふ事は無といふ事である。死は苦樂の二者を否

定するのである。此死を恐るゝと云ふ事は、取りも直さず無を恐るゝ事で、畢竟無意味の恐怖といはざるを得ぬ、第三には、神を恐るゝことが人生の不幸を增す、然るに神は超脫的圓滿の境遇に在て恩威を弄するものではない、唯眞理研究の生を爲すものであるが故に決して恐るべきものでない。」此等の哲學論は人生の弱點を指摘して其苦痛を減じ樣と云ふ趣向。又これに反對のストイック學派は、人は苦痛の上に己れを高める、苦痛を苦痛としなければ、人は幸福の域に達するものである。之を爲すの法は心身の修養にあるとして、矢張り人間の苦患を減じやう、痛いのを痛くない樣にしやうと云ふ、卽ち均しく幸福が目的である。此兩學派の所說は正反對と視られ、又修養等に於て大に異なる所あるは勿論であるが、要する所人間の目的は幸福にあると云ふとに歸着する、是は古代希臘に起りし兩哲學にして羅馬時代を支配し感化して中世に及びしものであるが、十九世紀に至て、幸福說を說いたのはベンザム、ヲースチン、ゼームスミル等の人である。

此ゼームスミルの子ジョンスチユワートミルは又十九世紀の一大學者で幸福說の系統を繼承した。予が曾て此人の自傳を讀んだのに、この幸福主義の大學者も、所謂此の煩悶に陷た事がある。非常な煩悶をした事を自分に書て居る。此人は千八百六年に生れ、千八百二十一年の頃卽ち十五歲の時には既に〳〵一個の學者であるが、此頃から彼は著述家を以て世の中を渡らうとした。其前にベンザムの哲學を讀み、又ベンザムの命を受けて其論說を編纂し、ウエストミンスター雜誌の社說を擔當し、自分の主義を鼓吹して社會改良を圖るを以て終身の目的と決定し、卽ち此目的の成否は自己の幸福を左右するものであると覺悟を極め、益々奮發して一心不亂に文業に勉めつゝ五年間やつて居つた。然るに其時分に恰かも夢の覺めたやうに、一種の感覺が起つた。それは丁度千八百二十六年の秋の事で神經が妙に遲緩して氣分が爽快でない、どうも物事に趣味がなくなつて何をしても面白くない。一時の事かと思たが中々直らぬ、唯何となく氣拔がして何もかも

面白くないやうになつた。例へば先づ茲に一の問題を提出するものがあつて、汝は汝の希望の通り、總て社會の制度を改革し、社會の輿論を導いて正鵠を得せしめた、もう世界は是て宜い、注文通りの程度に進んだ、卽ち汝の生涯の目的が此瞬間に達せられたと假定したならば、汝は果して幸福と歡喜の快感を生ずるやとの問を發せられたならば、我心は「否」と確答することを禁じ能はぬ。自から之を思ふて意氣鎖沈し、我生存の礎石は全く崩落した。斯の如く我が終局の目的が既に我心を喜ばさない、況んや之に達する手段たる學問に何の趣味があらうか、自分は何の爲めに之を爲すか自分で自分が分らぬことに成つた。と云ふのが抑も〳〵煩悶の始まりで、これがどうしても頭にくッ付いて仕方がない。書物を讀んでも文章を書いても直に此煩悶が起て來る、散歩してもクラブに行ても此煩悶が起て來る、何處へ行くにも此煩悶がくッついて來る。丸で頭へ霧が掛つたやうに、腦髓へ雲が掛つたやうになる、其雲が暫くたつて晴たかと思ふと又曇る、そ

れが爲め二年程の間苦んだ。併し流石は豪傑てあるから、それが爲に自分の事業は一日も廢したことはない。毎日〳〵自分の書く物は書く、爲す事はなす、苦しくて仕方がなくつても、自分の爲す事はなしたが、是はどうしても親の敎育が餘り嚴重てあつた爲めに起つたのてあろう。三歲の時に希臘語が讀めたと云ふことてあるから、此親父さんがむやみに敎育をして、大變な發達をしたが、どこかに缺點があるに違ひない、しかし是れは已れの父に向て云ふべき事てなし、云た所が直るものてないから、唯自分一人て煩悶して居つた。然るに或時マルモンテルの自傳を讀んて、其述懷の點に至て瞭然として悟つた。それからはッと霧が晴れた。雲が散じた、是迄の煩悶が去てしまつた。我感情は舊に復して頭の荷物が輕くなつた。それ以來は讀書にも、談話にも、日向ぼこにも花見にも又俗用にも、盡く相當の愉快が伴ふやうになつて再び蘇生の想をなしたので、茲に於て一の人世觀を起した。而かも從來と大に異つた人生觀を起したと云ふは、人生の目

的は幸福に在り、故に行爲の標準は幸福に在るとの一義に於ては決して動かないが、此目的を達するには之を直接の目的となさゞるに在ると考へた。稍カーライルの非自覺說と似寄つた樣な考になつて來た。要するに人は自己の幸福以外の事に精神を注いで居ると、却て幸福に暮らす事が出來る。例へば他人の幸福人類の幸福若くは或る技藝又は仕事其ものを終局の目的と信じて之を遂行し、全く自己の幸福以外に目的を定めたらば、案外それが幸福を爲すものであると云ふ事を悟つた。扨こそ此人の其後の著述、人間の快樂はドコに在て存するかとの疑問を解決せる所の幸福論は此主義に叶て居るやうに思はれる。人は成る可く自分の後で、自分と利害を共にし、自分が其人の爲め計て益せんとする所のもの、卽ちインテレストを感ずる者が多ければ多い程愉快である。矢張死ぬ時も愉快に感ずるに違ひないと云ふのは、全く此邊から出た說であらうと思はれる。此人は快樂主義から煩悶を起し、煩悶を遁れて第二の快樂主義を得、之を以て生涯一貫の大主

義を定め、安心立命の地を作つたのである。斯う云ふと大變むつかしいやうであるが、つまり一時神經衰弱に陷つたに違ひない。それは精神過勞の爲に生じた事で、オーゴストコント、ウオタースコットなどと云ふ大學者大詩人も矢張精神に異狀を起して苦んだことがある、と云ふのは矢張同じ原因から起つたものと思はれる。」啻に學者詩人のみならず、彼の那翁の如きもそれは免がれなかつたものと見えて、戰役中其兄ジョセフボナパルトに宛てたる手紙がある。此手紙を托された人夫の乘つて居た船が、地中海に於てネルソンの艦隊に捕はれ、其手紙も遂に沒收されたものと云ふ事で、其手紙は大英圖書館に保存されてある、其文面は斯う云ふのである。

テルミドル月七日（一千七百九十八年七月廿五日に當る）改羅府にて

阿兄よ此回の埃及征服と之を遂ぐる迄の數度の戰鬪との關係は、公報に依て既に御承知の事ならん、此に就ての評論は我軍の名譽の爲に一頁を加ふるに足るべくと存候。此埃及國は麥米野菜肉類に富饒なると世界第

一に候得共、人民は野蠻至極にて貧乏なる事兵卒の給料も拂へざる程に候。余もこゝ二ヶ月の中には郷國へ歸着すべき筈に候。阿兄に對し余の實情を語らんに。忌まはしき余が家内に紛擾の多き事も打明け申候上は、廣き世界に阿兄の外一人の友なく、阿兄の友愛は余の最も貴重する所に候。若しも此友愛消失せて阿兄の余に叛くが如きとあらば、余は全然人類を敵視するの人となるの外無之候。僅か一人の人に一切の心情を繫げるの身の上となりしと、果敢なき境遇に御坐候段偏に、御了察あり度候。余が歸着の上は巴里の附近又はブルゴンヌに一の地所を求め之にて冬を越し度存候。唯々人間は厭き果て孤居獨棲をこそ願はしく、富貴顯榮は誠にうるさく情は荒れ礬は消へ、余の生涯は二十九歳にして一切盡き果て、此上は眞實のエゴイストと相成る外無之、余は獨り余が家を占めて何人にも之を與へざるべく、辛ふじて生計を立つる丈けのものは所有致居候。去らば余が唯一の友よ、余は阿兄に對して曾て不實の所行なし、

阿兄も亦た之を思ふて酬ゆる所あれかし……只々御明察祈上候。

巴里にて　五百人會議衆議院)議員なる市民

ジョセフ　ボナパルト宛

彼の拔山蓋世の英雄の手紙とも思へぬ。しかしこれが英雄も亦凡夫に過ぎぬと云ふ事の證據である。如何にも情けない事を書いて居る。夫から予は何故に此書翰中に、家内の紛擾云々の事を書いてあるかと調べて見た所が、頗る奇妙な事がある。丁度埃及の遠征の留守中其妻ジョセーヒンの内行に就て、種々の讒訴が兄弟友人抔から頻々とやつて來る。又實際火のない所に煙は立たぬ譯で、某歴史家の筆端にも、餘程穩かな言葉で評しても彼女は頗る無分別な注意なき所行をして居たと云ふ外はないと云て居る。之が爲めか那翁が埃及戰役から歸た時は甚しい不興で三日の間と云ふものは、ジョセーヒンを見なかつた。殊に此度は餘り金も取れず懷中が寂しかつたから、一層悲觀的になつたのである。此邊に至ると英雄も凡人も區別はな

い、皆人間の情は同じ様なもので、其境遇に依て色々な心持が起るものである。併し今考へて見ると、若し世の中が面白くないと思つた時に、ミルなり那翁なりが、巖頭の感をやつて居つたならば、迚も彼等の大著述や大事業は世の中に遺らなかつた。尙もつと小さい時には、僅か十五フランかの金がないために、ライン河へ身を投げ樣とした事さへあつた。幸に生延びた爲に、歐羅巴を併呑し、各國の帝王を足下に跪づかせるとになつた。那翁の出現は歐羅巴史上に一大紀元を作り、ミルも政治學史上に一大紀元を畫したのである。今の世の青年に煩悶の起るのも不思議ではないが、よし起つた所が一時の病氣と思へば、飛込むのは餘り大早計ではあるまいか。予は勝手に飛込めと云たが飛び込む前に少し考てもらひたい。一時の煩悶の爲にボカ〳〵飛込んだ人も、もし活きて居つたら、那翁やミルの樣な偉い人物になつたかも知れぬ。さうして見ると、飛込むのはどうも算盤に合はぬ。又僅か哲學書の二冊か三冊も讀んだ者が人生觀と云ふ遠大な問題を

捕らへて、三年や五年に解決しやう抔とは途方もない事で、丁度膝栗毛の彌次郎兵衛が京都で九ッ梯子を買つて困つた樣なもので、とても扱ひ切れぬ。若し人生觀を得んとするならば、ジョンスチユワートミルが人生の幸福は遠き目的にあらずして、近き手段に在りと云ふたが如く、又一休和尙が地獄極樂は面前に在りと云つた樣な流義にやつてもらひたい。それでは餘り淺薄で惡るいと云ふかも知れぬが、淺薄もミルや一休位の淺薄さ加減になれば、餘り耻かしくもあるまいと思ふ。

二　利用厚生

利用厚生と云ふ語は、古來支那人の用ゆる所、其出所を尋ねれば、尙書の大禹謨の篇に一に正德二に利用三に厚生と云ふ事がある。後世の和漢人も之に倣ふて、經濟は利用厚生の道なりとか云うて居るが、其の彼等の用ゆる意味に於ては、今の勤儉貯蓄の語と大同小異のやうに見ゆる。是は頗る

惜むべき事である、曾て小笠原島から歸つた人が、色々な風土氣候等の話しに、此島の蟻は一向物を貯へぬと云ふ。予は一寸珍らしく思つた。普通に蟻と云ふものは、暖い間は切々と働いて、自分の巣へ物を持込み、冬の間それを喰つて籠城するに極つたものと思つて居た。しかしよく考へると、小笠原島ではその必要がない。四時春の如き此島には何時でも食物があるから、夏時に勤儉して冬時の爲に貯蓄する必要がない譯である。由是觀之小笠原島の蟻の字書には、勤儉貯蓄と云ふ文字はないに違ひない。小笠原島其他の南洋諸島の如き皆同じ事と思はれる。蟻蜂の種族は社交性情を有し、群居動物の中でも最も規則立つたる社會生活を營んで居る。然らば人間の社會と、蟻蜂の社會と同一なるかと云ふに、決してさうてない。此の蟲社會は分割すべからざる一大家族である。人間社會の如く多數の家族が集合して出來て居らぬ。又此の蟲の社會は性に依て動くのみて、智に依て働かないから進歩と云ふことなく、古今同一の狀態に居る。蟻の

社會、蜂の社會も秩序整然たる一個の有機體と云ふてよいが、若し之を有機體卽ちオルガニックと云ふならば、人間社會は一層之に超越せる有機體卽ちシユーパーオルガニックと名けたら宜からうとの說もある。此等の說の當否は兎に角、凡そ蟻蜂の類なり又人類なり社會生活を營む者は必ず其生存の爲に社會組織の必要なるが爲めである。先づ第一に敵の侵略に對して自家の生命を保護し、第二には分業と協力とに依て生計を營まんが爲めである。殊に天候の寒暖ある地方に於ては、食物のある時節に貯へて無い時節の用意をするには最も社會組織が必要になる。人類に在ては最も此れが適切て、卽ち遠き慮なければ近き憂ありと云ふ言葉の如くに、唯眼前の慾に耽つて、後の事を考へなかつたならば、其種族は滅亡しなければならぬ。彼の宵越しの金は使はぬと云ふ社會は、到底滅亡する外はない。孟子に、國に三年の貯へなきは、國その國にあらずと云ふ如く、身體の達者な時に於いて、病氣の時の用意をし、豐年の時に貯へて、饑饉の時時働の用

意にしなければならぬと云ふことは、少しく野蠻の境界を脱すれば直ぐに行はるゝ事で是が所謂勤儉貯蓄である。併しこの勤儉貯蓄は、良い言葉であるが、今日行はれて居る勤儉貯蓄の意味は面白くない。非常に消極的の意味を有つて居る。人は朝夕働き詰めて、まづい物を喰つて、穢い物を着て、使はずに溜めろ〳〵と云ふのであるが、是は出來ぬ、國としてそんな事は出來ぬ。一家の事なれば、先づ正月餅を搗くのを廢めて、銀行に預けて置くとか、或は誕生に小豆飯をたくのを廢めて、郵便局へ持て行く、それて何百圓溜つた、それても使はずに益々溜める、これは一個人の經濟談てある。一國として見る時は此資金が必ず生産的資本と化して、衣食住の材料を增殖し、若くは其品質を改良するの道を取らねばならぬ。其影響は社會全體の生活の程度を高めると云ふことになる。彼の勤儉貯蓄論者が田舍へ往くと、農民が以前と異りて白い飯を喰ひ、石碾て頭を洗ひ蝙蝠傘を翳して居るのを見て、是は怪しからぬと云ふて居る。そこて調べて見ると、

必ず田地は抵當に入つて居るのてひどく驚くのてあるが、成程地面を抵當に入れて、借りた金が直ぐ蝙蝠傘になつたのもあらう、併し是は局部の事て全體はさうてない。金融機關も整て不動産も抵當になり、種々雜多な事業も起つて、殖産興業の道も開け、或は着物となり、或は蝙蝠傘となり、或は石碾となり、之を使用して生活の程度を向上せしむるは、是れは當然の事てある。予が過日墓參の爲に歸鄉し、海岸に遊んて少年の時から不潔の所と記憶する一漁村を通行して見ると、全く一變して以前のやうな臭氣もなく、子供達も以前のやうな襤褸を纏ふどころか、誠に新しい綺麗な着物を着て遊て居る。餘り不思議に思つて、今日はお祭りかと聽いて見た位てある。吾輩がもし彼の勤儉貯蓄論者の一人てあつたならば、之を見て大に慷慨したかも知れぬ。

勤儉貯蓄は、斯の如く惡い意味を生じ、消極的の傾向を持て來た。古來東洋の社會に於ては、進歩と云ふ思想がなく、唯在來の有樣を維持すれば宜

いと云ふ考へてあつたが、併し今日では社會の進歩を意味する言葉でなくては成らぬ。そこで勤儉貯蓄の語を廢して、利用厚生と云ふ言葉を使ふ事にしたい。此利用厚生は新思想の人が正解を下さば、頗る進歩的の意味を以て活用せらるゝであらう。用を利する、彼の電燈でも電話でも電氣の力を利して吾人の生を厚くする。汽車汽船は蒸氣の力を利して生活の程度を高くする。紡績機械の利用の爲めに、寒村の子供も新しき綿服を着て厚き生を爲す事が出來る。天然の勢力を人意に從へて之が力を利し、社會多數の生活を厚うするを文明と云ふ。彼の古風なる勤儉貯蓄論者は下等人民の生活程度の向上を見て一概に奢侈の風とし、之を抑へんとするは實に解せぬ事である。尤も個人々々に就て見る時は、或は身代不相應な事をして累代の田畑や家作を失ふ者もある。これは生活の度を下げたので、決して生活程度の向上と云ふべきものでない。斯る事柄と一般人民の衣食住の改良とを混合するは、益々識者の笑を招くのみである。而して必要と云ひ便利

と云ひ贅澤と云ふ、この三つの區別は容易に附かぬ、必要と云へば、是だけなくては活きて居られぬ、便利と云ふのはこれがあると大に都合がよい、又贅澤と云ふのは、是れがあると派手に見へ豪奢に見へて人に羨まれるとか云ふが如き漠然たる區別は付くが、扨て實際に至ると、甲の社會に於て必要品の内に數へらるゝものが、乙の社會に於て便利品と見做され、又丙の社會には贅澤と見做さるとがある。佛蘭西の一經濟學者が、此の區別の困難なるを論じて、先づ誰しも贅澤と見るに異議なき者は面々の私宅へ電話を架けるが如き事であらうと云た。併し是も今日に成ては必ずしも贅澤とも云へない、殊に我東京市中に於ける私家電話の如き贅澤どころではない。或る人には殆ど缺くべからざる必要品である。尤も嚴正な意味に於ける必要品とは往かぬまでも、少くも便利品の範圍に屬し決して贅澤と見ることが出來ないやうになつた。唯昔日なかつたものが今日顯はれて來ると、如何にも贅澤に見へるが、次代の人は贅澤と思はないように成る。之を大

觀すれば、社會の進歩人文の發達と見るべき場合が多い。前には少數なる富貴者の專用に歸して居たものが、後には多數人民の常用になる。これが多くの場合に於て生活程度の向上である。或る英人の露國內地旅行記に、英國では橋は河の兩岸を結び付るものであるが、露國の橋は兩岸を隔離する者である、露國の所謂道路なる者は英國に於ては道路の敷地とも云ふべきであると云て罵た。此評は我々日本人にも隨分耳の痛い方であるが、勤儉貯蓄論者は西洋の如く高價なる木石を以て道路を敷詰めるは不經濟だと云ふかも知れぬ。しかし道路の劣惡なるは如何に富力の發展を妨げ、如何に人民の幸福を賊(そこな)ひつゝあるかと云ふことを考へない。又家屋の如き最も堅牢にして、如何に風雨が激烈であつても、家の中に這入つて居れば晴天も同樣何の音も聞へず、安樂に居ることが出來てこそ文明の生活である。然るに暴風雨の夜には騷々しくして寐られない、隨て翌日の仕事に活氣がないと云ふやうな家屋に住居して平然たるが如きは、餘り誇るべき事ではな

い。又工場なれば硝子てすつかり屋根が出來て、どんな天氣でも內が明かるく仕事がよく出來る。勞力と時間とを空費せずに其效力を生ぜしむるは人類の生活資料を豐富にし安價にして其幸福を致す所以である。要するに利用厚生の大主義は之に外ならぬ。未だ人權の承認されぬ國では、上等の者が下等の者を自分の爲めに使役して居る。一人の爲めに、何十人何百人の人が使はれて居る。一個人若くは數個人の生を厚くするが爲め、多數の人間が薄く生活しなければならぬと云ふのは、是は卽ち開けない社會の狀態である。印度の如き一家に數十人の婢僕を使役する。飯を炊く者は單に飯を炊き、皿を拭く者は單に皿を拭き、團扇で煽ぐ者は、單に團扇で煽ぎ、熱い所で夜間主人の睡眠中バンカを引て風を當てる。此簡單な煽ぎ役でも先祖代々の世襲である。親爺が飯炊なれば、息子も飯炊き孫も飯炊きである。支那や日本も古代の官制などを見ると、少くも王侯貴人に附隨する對する所謂百官有司なるものは唯主君に奉ずる爲めの役人である。例へば主

水と云ふものは君主の水を司る人、其水の司さが多勢あるときは其頭が主水正となる。大炊と云へば飯炊きで其頭役が大炊頭、掃部と云へば掃除番、頭が掃部頭だ。即ち開けぬ社會は皆此の通りである。其上此の如く直接に多數の人を使ふのみならず、間接に多數の人を使役する事にもなる。即ち多くの人工を要すべき物品を以て自己の身邊を飾るが如き、唯一個人若くは數個人が安逸を貪り又は虚威を張る爲に、多數の人間を役するは極めて野蠻なとである。今でも日本人が少しく金持になると、むやみに召使を澤山置くが、是は取りも直さず印度人の亞流を汲むもの、此の如き贅澤は贅澤中最も有害なる種類と云はねばならぬ。人權が進み給料も高くなれば、是ば出來ぬことである。亞米利加は勿論として、人口の多い歐羅巴と雖も、婢僕の事は追々六ケ敷問題となつて來た。主人が婢僕に對しても相當の敬語を用ひねばならぬ事となり、餘り倨傲なる主人は却て無敎育者として、之を輕蔑して其命を聽かぬやうな風が起つて居る。而して一定の時間以外

には如何なる事があつても働かぬ。倫敦の或家に雇ふた下婢は、小說を作るのが道樂で兎角仕事を怠る所から主家を追はれた。其立去つた跡に二三枚の書き物がある。主人が讀んで見ると、一篇の短篇小說である、其趣向は、自分が南ケンシントン街の牢獄(主家の事を云ふ)を辭して看護婦隊に加はり、トランスバールの戰地に到り、某中將の負傷に際して懇切の看護を爲したのが緣の端となりて遂に其將軍と結婚した、其後此中將夫婦が慈善の事に熱心し、一日馬車を驅りて貧民院を參觀した所が、何となく見覺えのある老夫婦の貧民が居る、色々と考へた後ちはたと思ひ出したが、是は先年自分が奉公した家の主人夫婦のなれの果……斯んないたづらを書いて往く下女さへある世の中になつた。決して掃部頭が座敷の掃除して、主水正が水を汲んで、大炊頭が飯を炊いて呉れる時節ではない。功利論者の所謂最大多數の最大幸福、社會主義者の所謂平等均一、個人主義者の所謂自由競爭獨占禁止、共に皆この利用厚生獨立自尊の目的に進まんとするのて

ある。而して肉體の生活と共に精神の生活も進む、即ち精神の生を厚くするは當然の事て、身神の一方を偏廢する事は素より爲さんとするも得べからざる事であるから、全般の智德を進むる普通敎育を普及せしめなければならぬ。精神の生活は身體の生活と共に進むべき筈のもので、曾て英國のブロハム卿と云ふ政治家は、非常な普通敎育奬勵家であつたが、一般の英國人が先づベーコン(大學者)を讀む位まて敎育が進まなければならぬと云つた。又一方にリチャードコブデンと云ふ經濟家(穀物稅廢止論を主張し穀物を廉くして、國民生活の度を上げんと勉めた人)はブロハムに向つて、卿はベーコンを讀み得るまて、國民敎育を進めなければならぬと云ふが、余は一般の英國民はベーコン(豚肉)を喰ひ得るまて生活の程度を高くしなければならぬと云ふた奇談がある。此二大家の如きは、身心兩樣の厚生に貢獻したものと云はねばならぬ。

日本の普通敎育も大に進歩し、此上大に發展の希望を有するものと見へて、

近來義務年限を六ヶ年に延長しやうと云ふ說が盛んになつた。又之に反對の人もあるが、予は年限の延長は必ずしも惡いとは云はぬ。しかし日々の在校時間の多いのは、予の非常に反對する所て、若しも今日の時間數を半減して、便宜朝夕の二回にも分つとも出來るやうにすれば、假令六ヶ年は八ヶ年にしても差支はない。先づ義務年限の延長說に重もなる反對は、子供が十歲以上にもなると、親の手傳をしなければならぬ、義務年限の延長は第一此點に於て差支を生ずると云ふ。これは子女敎育の義務よりも子女勞働を重んずるとになつて、本末顚倒の誹を免れぬ。心身軟弱の少年を苦役して之が爲めに肝心の敎育を廢する理由はないが、假りに一步を讓つて、一般の細民は當分已むを得ずとして之を許すも年限の延長は差支はない。其代り今日の如く五時間六時間を敎へる必要はない、大に日々の時間を減じて二三時間位にするがよい。半日學校と云ふものもあるが、これは一種の特例となつて居る。予の說は一般に半日學校にして仕舞ふと云ふのであ

る。又場合に依ては同じ二三時間の授業も分割して朝二時間、夕一時間にしたらば、親の手助けをも出來るやうになる。これならば六ヶ年が八ヶ年十ヶ年でも仔細はない。朝は仕事の出掛に二時間、夕の歸りがけに又一時間位の事で宜しい。尤も通學の便否の關係があるから、其邊は然るべく應用するとして、此の如き短時間の學校ならば六年八年は愚か、終身でもよろしい。元來國民教育は貧民教育である、細民教育である、これを毎日毎日六七時間も學校に止め置くと云ふは、抑も何たる馬鹿げた事であらうか。じかし教育は大切である、如何なる困難をも排して之を强制しなくてはならぬ、何となれば教ざるの民は磨かざる玉の如く到底仕方がない。農工商何れの業務に就くとも、曾て教育の刺激を受けずに石の如く固まりたる腦髓は、如何ともすることは出來ぬ。此等の頭は唯習慣にのみ支配せられて、些少の變化にも應ずることが出來ぬ。隨て改良進歩を容るゝ餘地が無い。新しき器械新しき肥料さへ之を採用する智慧が出ない。斯の如き變通なき

愚民を以て組織せられたる國には、到底進歩の望はない。是非共義務教育をするの必要はある。しかし子供を終日學校へ遣つて置く必要は何處にあるか、朝から晩まで長時間教育し續けたら效能も多いと思ふのは、丁度田舍ものが、湯治をすると何十回となく溫泉に這入るやうなものである。夫より度數を減じて長く養生するに如かぬ。牛乳がよいと云ふても朝から夕迄飲み續けて滋養になるものでない。

予の理想的普通教育は此の如くやりたい。今の教育家學者政治家の云ふ所を聞くに、未だ此の道理を知らずして、各々半面の議論を以て贊否を表するものとしか見へぬ。予は經濟と教育の兩面に於て、心身の利用厚生を達せん事を目的となすものである。

二二 元の專制は社會衰頽の源

此に云ふ專制は政治上の專制のみではなく、もつと廣い意味に於ける專制、

全體に此社會に或一つの思想、或一つの力が全權を占めて、他の力に活動の餘地なからしめると云ふことが種々の害を生ずる。即ちそれが爲に人心も腐敗すれば社會も衰頽する、と云ふことは、確なことゝ思はれる。例へば宗教が大に勢力を占めると、それが爲に其國の進歩が止まり、其人民が生氣を失つて次第に衰頽し、遂に倒れると云ふのは、古來東西各國の歴史に徴しても明かである。歐羅巴に於て先づ西班牙其の他拉典人種の住んで居る餘り振はぬ國では、羅馬舊教が大勢力を占め、其僧侶が社會に大なる威權を振つて居る。最も可笑しいのは懺悔の法と云ふ事がある、即ち自分の過去一週間内に犯した所の罪を坊主に向つて自白して仕舞へば、それで罪が滅びると云ふ。舊教寺院の懺悔堂に行くと、恰も巡査の交番所の如き箱が列んで居て、それに坊主が一人づゝ坐つて居る。其坊主の耳に口を寄せて婦人共が何か囁くと、坊主が之を聽きつつ頷いて居る。他人には無論話さない秘密の事を此僧侶に向つて皆言つて仕舞ふ。斯の如く人の秘密を

聽取ると云ふこと程えらいことはない、自分の親子に對しても、夫に對しても、兄弟に對しても言はない所のものを、唯此僧侶にのみ白狀するのであるからして、僧侶は殆ど人事に活殺の權を握て居るが故に、此僧侶の一類は政治上社交上家庭上に就て一切の權力を握つて、殊にそれを濫用し害用するので、それが爲に此國は益々衰亡に傾いて來たのである。それは東洋に於てもバラモン僧族の印度に於ける、喇嘛僧の西藏に於ける、佛徒の遅羅に於ける、實に非常な大勢力のものである。彼等は社會の生活と離るべからざる密着の關係を持つて居つた爲めに、此大勢力を馴致したものと思はれる。最初生れて名を付けるのも、大きくなつて元服をするのも、又結婚をするのも、皆お寺の坊さんが其儀式を行ふ。病氣になると加持祈禱をする、死ねば葬式をする、凡そ人生れて死に至るまで、否、死後と雖も悉く坊主の厄介にならぬ事はない。故に自然僧侶が社會に權力を得ることになる。即ち宗教專制の政體であるが故に斯る社會は腐敗するの外はな

い。然るに日本は非常に幸な歴史を持た國であると云ふことを予は感ずる。日本では神儒佛の三教があつて、其内。神様と佛様は領分を分けて分業になつて居た。最初は佛法と神道との間に非常な衝突が起り、又儒教とても隨分これと爭ふたのである、又儒教は神佛二教とは違て宗教的禮拜をもたぬ所の純然たる德教である。そこて神佛の二宗教間には其活動の區域が分かれて各其權域を定めたのである。例へば先づ子供が生れると氏神に向て宮參りをする、其他結婚、元服などの吉事は總て神様に依つたものである。それから死ねばお寺に持つて行つて坊様に葬つて貰らう、死ぬと云ふ此凶事は寺に頼み、僧侶に頼むと云ふことになつて居る、即ち大要は現世の吉凶禍福は神に祈り、死後未來の冥福は佛に祈ることになつて居つて、神佛の間に分業が出來て仕舞つた。そこて神様ひとりが人間を專らにしやうと思つてもどつこいさうは行かない、死んだ後のことはお前さんのお世話にならぬと云ふ。それから佛様の方て大に威張らう、陀彌陀さんが非常に巾

を利かせやうと思つてもどつこいさうは行かない、此目出度い席にお前が來てくれては困る、其代り死んだ後は一切お頼み申すと云ふ工合てある。其外に儒流の教義は、宗教外の人事に就ては大に士人の思想を支配したが、一般平民界には餘り勢力が及ばぬ。即ち社會に生死道俗の分界が付いて、人間の全生活を支配するまでに、何れも權力を握ることが出來なかつた云ふのが誠に日本の幸福になつた。是が爲めに自から其間に自由と云ふものがある、人間の精神上の自由、又社交上の自由が起つて來たと云ふことは日本人の非常な幸てある。近來よく武士道のことを言ふ、武士道とは何であるかと云ふに。予は神儒佛混淆の生産物てあると思て居る。古來日本の上等社會、武士の社會に行はれた所の謠曲の如きも、之を分析すれば唐詩、和歌、佛經の外はない、先づ神儒佛を混淆したものが謠になつて居ると云ふてもよい。此謠が偶然出來る譯はない、必ず其社會の狀態と思想を謠つたものてあるから、これも其一證として見る事が出來る。

故に政治上社會上に於ける所の、權力分合に就いて言ふても同じことて、決して一物一力の專制を許さぬのが肝要と思はれる。門地門閥が勢力を專らにするとしても、又金力富力が政權を專らにするとしても、智慧、學問が勢力を專有しても、皆其弊を生ずるものである。素より智慧も威張らなければならぬ、金力も威張らなければならぬ、又門地門閥も威張つて宜いが、しかし門閥專制、富豪專制、無智多數の專制、智力專制、共に各々弊害を生ずるから決して之を許るせない、此四つのものが各々相當の權力を分有して、始めて其社會が健全なる發達を遂げることが出來る。古人の說にも權を與ふるものには祿を與へず、力を與ふるものには位を與へず、祿位權力を分與して之を兼有せしめざるを以て政治の秘訣とすべしとの議論もある。これは素より專制政治の執權者が、獨自ら大權を擅にせんとする術に外ならぬ事で、德川政府の如き巧みに此術を運用したものと思はれる。しかし此の政策も强ち未開時代の遺　として無視する譯には行ぬ、文

明の今日に於ても之を應用して、大に治世の要を達することを得るかと考へる。乃ち未開幼稚の時代に在ては政府の官吏を無上のものとして、榮典顯爵の如きは皆此一類の專有に歸する事であるが、時世の進歩と共に榮譽權力も廣く分布される風が行はれる次第である。國家を益するは官吏のみではない、各種の業務に從事するもの皆同一である事は云ふ迄もない。彼の日露戰爭の如きも、決して文武官吏のみの働ではなく、國民一致の大發現である事は明てある。

そこて、實業家などが八ヶましく言つて居るのは、役人のみが爵位勳章を專らにして、實業家の如き現に其社會の泰斗と云ふやうな人でも、頗る劣等の勳章位階抔を授かる、あまり官尊民卑で酷いと云ふやうな事を聞くが、之には予も大に同情を表する。併しながら吾輩は、役人最負をするではないが、もと商賣は金を儲けるが爲にするので、公共の爲が直接の目的ではない、口では國家の爲に銀行を建てる、國家の爲に鐵道を敷くとは言ふが

配當率が廉ければせぬのである、必ず一割に廻るとか八分に廻るとか云ふことを考へる。第一人が生きて居るには八百屋か菓子屋か、鐵道屋か銀行屋か、何か商賣をしなければならぬ。所謂紳士紳商はたゞ鐵道、銀行の如き新規にして大なる事をやるからそんな事を言つて居るが、併しながら豆腐屋八百屋と同じことである。鐵道を營むのと、鐵道に乘せる大根を作るのと何も違つたことはない。只大金を取ると云ふ廉を以て我々も勳章を授けらなければならぬ、しかも上等のを授けられたいと云ふのは、少しく蟲が好過ぎはしないかと思ふ。素より實業家の内にも、別にそんな人爵は欲しくない人もあるが、まづ凡俗の情に於て、人間の欲しがる物である。喜ぶ物であるとしたならば、それを以て隨分人を喜ばせ、それを以て人を奬勵すると云ふことも、國家の政策として必ずしも排すべきものでないとした所で、何を標準にしたらば宜いかと云ふと、自己の爲にするものを國家が賞すると云ふ譯はないから、則ち國家公共の爲に功勞あるものなれば少し

も官民の別はない、共に榮典に與かるのが至當である。國家の榮典は、官吏本位の舊風を改めて純然たる社會上の榮譽とすることが必要に成つて來た樣に感ずる。英國有名なる俳優故ヘンリーアービングの如き生前に士爵を授けられ、死後またウエストミンスター寺に葬られた。此の寺は古來國家に功勞あつた所の大政治家、名將軍、大詩人等の國葬せらるゝ所で、近年は彼のグラッドストン及び先皇ビクトリヤ陛下に續て、此のヘンリーアービングである。即ち一個の俳優でも王侯功臣名士と共にこゝに葬らるゝの名譽を與へられたのは、誠に國家の美事である。仍ち演劇も、俳優も、高潔雅馴にしてよく社會を感化することが出來、又演劇も爲に發達し、音樂も爲に向上する。故に商賣人にも相當の資格あり、又社會の儀表となるべき人物には此榮典を附して商界の德義を進め、商人の人格を進めるのは誠に美事であるが、只多くの金を得る計ではいかぬ。其金を如何に使ふか、門構が大きいから何爵に敍し、掛物が多くあるから何々勳章を與へると云

ふことは、少し理屈に合はぬ。故に此金を何か國家公共の爲に出す、例へば金を寄附して學校を維持し、博物館を造ると云ふやうな事になつて、始めて相當の榮典に與かる。其點に於て決して官吏と區別を付けぬことにしたならば如何。又經營の官立私立を區別せぬ事にしては如何實業に依て得たる其金を以て、社會公共の爲に盡した人ならば、やはり國家の爲に斃れた人、軍事の爲に身を捧げた人、政治の爲に功勞あつた所の人と同じやうに扱つて宜い。又音樂美術、演劇の如き事に功勞のあつた人も、それと同樣に名譽勳爵を與へると云ふことも大に宜いと思ふ。尤も卓絶した人は別にさる望もなからうが、先づ此邊を標準とするが必要てある。

日本ては官吏とさへ云へば皆名譽の職と成て居るが、まづ茲に政務官事務官の區別を立てゝ、普通の官吏と云ふのは他の專門家、たゞの事業家と少しも違つたことはない、同じく普通の仕事と見るの習慣を付けねばならぬ。歐羅巴ても國に依つていろ〳〵違ふが、英國と獨逸は昔から違つて居る。

英國ては通常の事務官を名譽職として特に貴ぶ風はない、何時までたつても事務官は事務官、國務大臣は國會から政黨の首領が出ることになる。所が獨逸は下の方から昇級に依て大臣になる所の未開時代の風が殘つて居る。隨つて純然たる官僚政治が出來て、先例古格口傳口碑を以て政治を扱ふ。官僚政治の施政は社會の活生活には少しも適合せぬ、只繁文褥禮に流れ、願、伺、屆、報告、具申、稟議、以て貴重の光陰を消費するのてある。

近來日本ても流行する官業專賣と云ふやうな事も、大なる心得違てあつて、獨逸などては元から何も彼も政府がやつて居る。ごく古い所は偖措いて、先づフレデリキ大王時代の官省の仕組を調べて見ると、今のやうに色々の役所はない。陸軍省と大藏省より外にはない。何となればプロイス國と云ふものは、四隣敵國に狹まつて只戰さの用意より外に政事はない、戰者は爭をするのと軍用金を作るのが唯一の仕事て在から、稅を取り金を儲ける役所が無ければならぬ。其て大臣と云へば軍務大臣と大藏大臣てある。そ

こて大藏大臣も、陸軍大臣も三人も五人もある、中には兩大臣を兼ぬる者もある。それは何をして居るかと云ふに、大藏省の方では鑛山を堀り、煙草を製造し、漁業を營で金を取ると云ふ次第で、詰り戰時の資金を作り出すのが役目である。そこで官業、官營と云ふことになつて來た。素より民權私權と云ふ考は少しもない、此時分は全く政府は國を以て己の莊園と考へて居ることは、丁度封建時代の藩制と同じである。藩政府が炭を燒き黄櫨を植えて蠟を取ると云ふやうな事をして、之を藩の收入に充つる。又此時代の理論では土地は皆政府の所有である。其うち事實に於ても森林の如きものは官有である。官有と云ふ中に、王有と官有の區別も付いて居らぬ。皆國王のものである、國王のものは即ち政府のものであると云ふことになつて居る。民有と云ふものもなければ官有と云ふものもない、即ち率土の濱王臣に在ざるはなく、普天の下王土にあらざるはなしと云ふ主義は、歐羅巴でも亞細亞でも多少の差こそあれ皆其主義で往つて居つたのである。

しかし段々社會が進歩するに隨て王有が減つて官有になり、官有が減つて民有になつて來て居ると云ふことは、財政史上國の進歩の標準となつて居る。歐洲中最も未開な露國では人民の物は政府の物、政府の物はザーの物であるから、露西亞帝國の物悉くザーの一手に握つて居る、殊に全國の森林の如きものは悉く帝室財産である。又酒も政府で賣らう、茶も政府の官業にしやうと云ふやうな事になつて居るから、露西亞の百姓が自分の家を建てるに材木は王林即官林の材木を買つて來る、百姓が酒を飲む、即ち官の酒を買つて飲む、茶を飲む、即ち官の茶を飲んで居る、官から材木を買つて來て家を建て、官から酒を買つて飲み、茶を買つて飲むと云ふ、最も未開な有樣である。獨逸は之に比して餘程進んで居るが、矢張り官業と云ふことが行はれて居る時代である。役人のみが名譽勲爵を持つて居つて、其上政府が種々の商賣をして國の經濟をやつて往くと云ふのは、餘程幼稚な未開な時代である。日本は幸にして此の如き幼稚なる野蠻なる制度は、

此藩制と共に廢して、王政一新を斷行した。其王政一新こそ眞實文明の主義で出來た政府である。しかし其政府が段々年を經るに隨つて、獨逸露西亞に殘つて居る幼稚な野蠻制度を襲用して、種々の官業專賣を始め出し、財政困難の上塗をするに至ては實に驚入る次第である。要するにこれも政府の權力過大にして、所謂官僚主義が社會を專制して居ると云ふ現象の一である。專制の害は非常なものであつて、其害の最も著しいものは、箇人の發動力を衰弱せしむると云ふことが一番恐ろしい。即ち日本は政府主義である。政府が何でもやつて往かうと云ふが、政府と云ふも未だ國を代表したものとも云へぬ、假令國を代表した政府の時代に至ても、萬能主義が個人の元氣を消衰せしめて、遂に國家を衰亡させる事は明かである。此の如き例を云へば殆ど限りはないが、即ち宗教、社交、學問、政治等、一つの思想一つの勢力が全權を握つて、他の者を悉く閉息せしめてしまふのは、萬害を生ずるの基であると云ふ事は、明かな事實と思ふ。世間で

は戰後の經營とか或は戰後の發展とか大にやかましく言ふが、其の發展は如何にすべきか、その經營は如何にすべきかと云ふに、立法上行政上の處分を以てすると云ふが、それ計りで出來やう譯はない。戰後の經營と云て別段外にはない、只皆働くと云ふことである。佛蘭西が千八百七十年の戰爭に大敗を取り、五十億法の罰金を拂つたが、總ての入費を計算すると百五十億ぐらゐの損失になつて居る。あれ位の大損失を受けたが、兎に角數年ならずして經濟の力を恢復したと云ふのも、佛蘭西人が一生懸命に働いた結果である。戰敗後に於ける佛蘭西人相互の挨拶は何と言つた。アラトラヴァイユ、々、々、即ち働け、働け、と云ふたさうだ。結り働くより外に戰後經營はない。然るに働くべきことは官業として皆政府が取つてしまはんとし、內國で仕事が減るから、海外に行かうとすれば容易に旅行券を渡さぬと云ふ始末、內からも外からも責めて置いて、而して此人間を働かせやうと云つても、それは出來ぬ。國民は國內を旅行するが如く國外にも

旅行し得るのは、面々持つて居る權利である、それを保護するが爲に政府は旅行券を作つて渡すのである。此人間が外國に行つても外國政府が此人間を保護すること猶我國の如くしてくれと云ふのが旅行券の目的であるのに、外國に行くのを止める爲に旅行券を曲用して居ると云ふやうな間違つた事はない。是は何しても改めなければならぬ。是も本題から起るべき主要の事柄である。

二三　病的成功謬的政策

商業と云ふても必らずしも金さへ作ればそれでよいと云ふ譯に行かぬが、金を儲けぬ商業ない筈であるから、商人となるからは苟くも不正でない以上、金の爲めには如何なる手段、如何なる方法も厭はぬと云ふ度胸を極めなければならぬ。明治の大富豪であつた某家の先人は中々の豪傑であつたが、之と事業を共にしたる第二の豪傑で副將軍とも云はれたる某氏は圭角があり

て兎角人と衝突する。商賈用の爲めに役人の家や荷主の家へ行けば頭を下げなければならぬ、勉めて遣つては見たが何うも面白くない。ソコで第一の親方に向つて云ふに、何うも僕には商賈は出來ないから止めやうと思ふ。それは何う云ふ譯か、イヤ何うも、ア、云ふ俗吏や素町人に向つて、ヘタヘタ御辭儀をしたり御世辭を言つて、善くもないことを譽め、面白くもないことを笑ふなんてとても馬鹿〳〵しくつて出來ぬ、何うしても止めやうと思ふ。ウム爾うか、ソレなら其れもよからうと言つた。大將は其後十日夷の祭に參詣した歸りがけに、大判や小判の書いてある扇子を一本買つて來た、而して第二の先生に向つて言ふには、此扇子を君にやるから此後役人や華客の所へ行く時には此れを持つて行け、夫れは又何う云ふ譯か、イヤお前が辭儀をいやがるのは馬鹿な役人や下らない荷主を目的にするからである、此扇子について居る大判小判に辭儀をすると思つて無暗に頭を下げて居れば、夫れで宜い。成程と大に悟つて、それからと云ふものはペ

タペタやつたのが成功の基だと言ふ話である。夫れは兎に角、有力なる親分の手下になつて立身すれば、親分が倒れると自分も倒れ、親分が倒れなくつても御機嫌を損ずれば夫れ切りである、故に自力で金を作つて金を親分と頼めと云ふ某君の御說ではまだ〳〵安心は出來ぬ、何故と云ふに決して金さへあればそれで大磐石と言ふ譯には行かぬ、曾て予が英國に滯在中ペルナトーと云ふ男があつた。ペルナトーは倫敦貧民街の青年であつたが、小學校の舊先生から一二圓ばかりの金を借り、夫れを持つて船のボーイに住込んで、亞弗利加のトランスバールの方へ出掛けて行つて、何か甘い事もがなとホテルの軒下に彷徨いて居つた所が、後ろから自分の肩をたゝく人がある。見ると胸にピカ〳〵と大きなダイヤモンドを付けた恐ろしい肥つた男が立て居る。其男は自ら胸を指しつゝ、コレ青年よ、汝も定めて之を握りに來たのであらうが、夫は駄目だ、早く歸る方が宜からう、ダイヤモンドは大抵乃公等の手で握り盡してしまつたから、今からそれで金を儲

けやうとは駄目な事だ、歸れ〳〵と云つて愚弄した、ペルナトーは之れは怪しからぬ、失敬なことを云ふ、見せしめの爲めに、己が一つ大に働いて金持になつて見せやうと、夫れからダイヤモンドの鑛山の地方へ出掛けて、一生懸命に働いた結果非常なものになつて、彼の肥滿つた男に再會したが、是が有名なる彼のドクトル、ゼムソンであつた。夫れからゼムソンやロードセシールと共に、ダイヤモンド採掘會社を設立するに至つた。此の如く大財産家となりて、ペルナトーは倫敦ハードバークの横のバークレーンと云ふ處に、壯大な邸宅を新築した。元來其邊の地所は、ウエストミンスター公爵といふ大華族の所有であるから、彼のペルナトーは公爵家へ行つて、邸宅新築の爲めに地面を借りたいと申込んだが、公爵は當家にては三萬磅以下の家を建てる人には、地面を貸さぬと云ふ。ペルナトーは拙者は厩舍だけに三萬磅(三十萬圓)掛ける計畫であると云ふたので、借地を許され家が立派に出來上つたのが丁度女皇卽位六十年祭の頃で、ペルナトーも此盛典

を見んが爲め、亞弗利加から歸つて來た。其前から何うかして上流の交際場裡へ這入りたいと云ふので、カールトン倶樂部へ入會を申込み再三はねられたが、とう〳〵入會を許され又最初金を借りた小學校の先生へも面會して厚く酬ひ、商業界の評判も追々と高まつて來て、ペルナトー先生得意の絶頂に達した。元來保守的の英國では成金黨は交際社會に入れぬは勿論、商業社會に於ても容易に認られないのである。然るに倶樂部に這入り、市の取引所でも大分知られて來たので、大得意になつて其頃から少し調子が變になり、又々亞弗利加へ出掛けたが、その航海中に海へ飛込んで死んで了まつた。其時の倫敦市場の騷ぎは非常なもので株式市場に大變動を來した。夫れも其の筈で凡そ七億圓の財産を持つて居つたと云ふ。ソコデ予は或學者に向つてペルナトーは金を持つたが爲めに精神錯亂して生命を失つた、多く金を持つもよしあしであると云つた。しかし其の人の云ふには、金を持つのは惡くない、成る丈け金を持たなくてはならぬ、只ペルナトー

の人物が大財産に相當しないからである、詰り相當する丈けの人格を備へて居らぬ爲めであると云はれた。此れは如何にも、尤な話で人格が備はらずして金丈出來たのでは、所謂小人玉を抱て罪あり、害あつて益なしである。人間を親分にして居ては不安心であるから、金を親分と頼めとは名論であるが、金を親分に頼むよりも、自己の人格、自己の才能を親分と頼むがよい。先づ意志を强固にし、人格を健全にすることが大切である、然らずんば如何に多くの金を儲けても何にもならぬ、果して然らば先づ各自の人格、各自の膽力、各自の才藝、各自の信用と云ふものが、一番確かな親分でなからうか。而して各自の方針は種々であらうが、今後の青年は大に海外に向はなければならぬから、大志ある者は海の上に眼を着くべしである。夫れと同時に全體の日本國の方針、即ち國是を海上の發展と云ふ點に定めなければならぬのである。何うしても日本は陸のみに固着して居つては駄目である。今日の官吏國會議員などが農本主義とか云つて只日本は米

の出來高を多くすればエラクなる。人間は米喰ふ蟲であるから米さへ多ければよいと云ふが、抑〻五穀豐熟國家安穩抔と云ふとは陳腐である。又滿韓經營などゝ云つても、朝鮮や滿洲へ行つて何が企つる者には、政府が力を貸すと云ふ位が關の山らしいが、何うしても國家は其大本たる所の事を遣らなければならぬ。其れは何であるかと云ふに、即ち航海を盛んにするのである。これが本當の國本培養ではあるまいか。又能く政府は外國へ輸出品を奬勵し、又は之を取締らうとする。例へばマッチが何うも粗製濫造に流れて不可ぬから、これを保護する、又羽二重が粗製濫造になつて好くないから取締りを加へる、斯く個々の品物に就いて干渉したからとて、決して旨く行くものでない。例へば人間の身體に就て言つても、頭痛がするから頭に膏藥を貼つて見やう、成る程其時は氣分が一寸快いやうだが、直ぐに惡くなる。何うも腰が痛いから按摩に揉ませて見やう、是も其時丈けの事である。併し其の頭痛とか、腰痛とかの大本源は、何であるかと言へ

ば、胃が惡いのである。則ち胃を快くすると云ふことが大切で、胃さへよくすれば、頭痛も疝氣も同時に癒ゆる。即ち航海上の便利を圖り、航海上の故障を除くのが、全體の健康を進むるのである。

日本の地位から言ふときは、先づ太平洋、支那海、印度洋に向つて貿易の大發展をなすことが肝要である。明の末に和寇と云ふものが大に暴ばれたと云ふが。是は和寇よりも和商であつて、日本品を持つて行つては唐物を持つて歸るので、常に日本の船が支那海岸に群集する、ソコデ重もに支那の海賊が、日本の旗を立てゝ支那海岸で泥棒をするので、和寇々々と云ふのであつたと云ふ。今の日本もこの和商をもつと盛んに遣るは勿論、南清交址の如き案外に商賣がふるはぬ。夫れには先づ航海上の故障を除くことが必要である。現行の航海條例は極く窮屈に出來て居る。爲に大いに商業の發展を害する結果になつて居る。例へば何百哩以外に出る船は何百噸以上の船でなくてはならぬ、即ち香港以西に行くものは遠洋航海である、其

船は何百噸以下ではならぬ。斯の規則の爲めに日本は甚だしい損をして居る。獨逸人などは小さな船で、メーコン河を溯つて、ドシ〳〵交易をやる。河を溯つて、交易をするには小さな船でなければ出來ぬ。然るに日本の航海規則は小さな船では彼の邊の遠方まで行くことの出來ぬ樣になつて居るが、香港迄行く船が何故に暹羅迄行けぬか、香港を根據地として暹羅交址邊に出沒するに何の危險があるか。只單に日本本土からの哩數を以て是等の事を定むるのは、杓子定木の甚だしきものである。而して日本では戰爭が止んでも商賣する譯に行かぬのである。現今船の噸數が非常に餘つて居る、殊に小さな船が多く遊んで居る、世界各國共に船舶過剩で困つて居ると云ふが、戰後の日本は最も甚しいのである。但し過剩の結果段々出掛けることに成つて來たが、何分杓子定木の爲めに困ると云ふ事情がある。之を顧みずして單に或る種類の輸出品を保護する如き事は恰かも胃腸をよくし又血液の循環をよくする方には氣が付かずに、肩が痛むから按摩をしや

うと云ふ位のものである、實に甚しき藪醫者と云はねばならぬ。尤も此規則の改正のみを云ふのではないが、先づ航海發達の邪魔物から除いて行くのが、何よりの急務であらうと思はれる。滿韓經營の聲も喧ましいが、是も事々物々に就いて、個々の保護干渉を試るのでは、何の益なくて害のみを生ずる。要は只渡航の便利を增して人間の渡り易いやうにするに在る。早い話は移民ならば彼地へ行く船賃は無賃にして、歸る船賃は倍にする、事實其通りに行かぬにしても、其の大方針を定むるに、行くに安く、歸るに高くする仕掛にすれば、人間の移住は必らず非常な速力を以て增すに違ひない。爾して行つた以上は歸て來ない人が多いのである。又彼の朝鮮で亂暴をした者は退韓を命ずると云ふのも、如何にも尤もな處置であるが、實は甚だ人情に通じない話であつて、實際其目的を達する事は六ヶしからう。これは日本人に限らぬ、何れの國民にも多少免れぬ弊である。何んな柔順な人間でも劣等國へ連れて行けば多少は亂暴をする。此男は蟲も殺さ

ぬ樣だから大概は大丈夫だらうと云ふて、連れて行くと矢張暴れる。それはどう云ふ譯かと云ふに、人間と云ふものはすべて、自分の自由が利ければ必らず威張る、英人も印度へ行けば威張り散らして印度人を苦しめるものが多かつた。歐羅巴人が印度、埃及等へ行けば、威張つて〳〵仕方がない所謂優勝人種の跋扈は何國も同樣て、日本人てもこの缺點を免れぬ。之は何とかせぬては仕方がない。例へば世間へ出て人から苛められ、口も利かずに默つて居るやうな男が、家に歸ると中々女房や子供に當り散らして威張る。之は子供や女房は自分よりも弱くつて閉口するからてある。人によりて敎育のある者は幾らか勘辨もあるが、下等の人間になると仕方がない、併しそれを片端から退去を命じて居ては、日本人の植付かる時はない、最も取締る事は必要てある。又目に餘る亂暴者は其まゝに捨て置けぬ、朝鮮滿洲に限らず、船の往復を盛んにして、定期航海を要所々々に開き、何月何日の何時には、必らず船が出ると云ふことが極まつて居れば、日本人は

ドン〳〵行くに違ない。又商賣をするにも、運賃が廉くて荷物を早く送ることが出來れば、製造品其物に保護がなくとも輸出は盛んになる。詰り予は海上の便利を增すと云ふことは、最も大切な事と思ふ。又それより他には此國力發展の術が無い、どうしても日本人は海の事を打擲つて置いてはいけぬ。又是さへ盛になれば、日本の國土は面積は狹くとも、四方の海水を以て日本の領分と見れば非常に廣い、況んや向河岸の勢力は之れに伴隨するに於てをやてある。

東洋の英國たらん爲めには、此方針を以て海上の勢力を伸す覺悟がなくてはならぬ。詰り歐羅巴の發展は海から起つた、是は中古時代から遺つて居る事て、千六百年代から歐羅巴各國が爭つたのは、海上權てあると云ふ事は、歷史の證明する所てある。然るに日本では兎角海よりも陸の方を重く見るやうな傾きがあつて。例へば陸軍と海軍との權衡を考へて見ても分る、海陸軍と云へば口調のよいのに、態々陸海軍と云ふ樣な流義て、手紙にも

「海陸故障なく到着致候」とは書くが「陸海安全到着」とは書かぬ。何時迄も滿洲の原野を戰場と考へて陸軍の擴張のみをやつて居ては堪らぬ。勉めて海の方に力を盡して商業の發達を圖らん事を希望する。

二四　絶對と相對

今を去る事約そ二百年前、佛蘭西にレオン公と云ふ宰相があつた。此人は餘程尊大な人であつたと見えて、なか〳〵人に面謁を許さぬ。そこで巴里の京童は之を評して、世の中に三つの難かしいことがある、其一は圓を方にすると云ふこと、其二は哲學奇石を發見すること、其三は大宰相に謁見の榮を得ること、是が世の中の最大困難事であると云ふた。これは大宰相の倨傲にして城壁を設くるの甚しきを諷した語ではあるが、それは兎に角として抑も圓を方にすると云ふことは、是は難しいのではなくして數理上に於て恐らく出來ぬ事である。圓形の面積を直ぐに方形にして算出するは

不可能の事で、唯それに近きものを見出すまでは行くかも知らぬが、絶對に同じものを見出すと云ふことは數理上に於て不可能である。又哲學者の奇石を見付けようと云ふ事が古代希臘で流行つた。此石を以てすれば何物をも黄金に化せしむることが出來る。金が要る時に此哲人石を以てこつ〳〵やれば直ぐに黄金が出來るので在から、是程結構のものはない。そこで大に探檢に勉めたけれども、何百年經つても何千年經つても見付からぬ。是は難しいと云ふのではなく、出來ない相談と云ふことである。さうして見ると此宰相レオン公の謁見を得ると云ふことも出來ない相談であつたかも知れぬ。今日の世の中では如何なる專制主義の宰相でも、人に會ふと云ふ位のことは、洵に容易いどころではなく、場合に依ると茶屋の二階で妥協をすると云ふやうな誠に洒々落々たるものである。第三の事は別として第一第二の事は是は空想とも夢想とも云ふものであらう。然るに古來人類の思想に於て到底解すべからざる事を解せんとして、種々の哲學問題宗教問題が

起つたのである。

例へば彼の唯物唯心の兩論の如き、又無心無物の虛無論の如き、古代印度の昔から今に至て尙議論を鬪はして居るが、今日まで一向に結着が付かぬ。是から先き三千年四千年やつて見た所が、矢張り解決が付かぬであらう、先づ骨折損である。全體人間の思考も是はどうしても出來ないこと、是は出來ることゝ云ふ區別を付けて考へぬと、折角考へても全く無效に歸して了ふことが昔から幾らもある。尤も偶まには出來ないことを考へて、それは見付からなかつたけれども、それからして他のことを見付けたと云ふやうなことはある。恰かも古代希臘の哲人石探見の事が一變して、中古歐羅巴にはオルケミーと云ふものが盛んに行はれ、支那の練金術と同じく、他の金屬を黃金に化せしむると云ふ說を唱へて、一時はなか〳〵流行したものであるが、是も出來ないことである。しかし此オルケミイの爲に終に今日の化學と云ふものが起つて來た。化學にしても勿論黃金でないものを

黃金にすることは出來ぬが、若し其黃金と云ふことを、物を買ふ力のある金と云ふ意味に見たならば、それは凡ての物が金になると言つても宜い。今日の文明の半分は化學の賜である。近來獨逸が非常な大發展をしたと云ふのも、大に此應用化學の力に依つたのである。此應用化學が益々勢力を得、殊に電氣學の發展から電氣化學の力に依つて空中から窒素も取れる、土地からアルミニームも取れると云ふ如く、化學の力に依つて、無價物中より有價物を收得することが出來る。是は取も直さず練金術とも哲人石とも云ふべき者であらう、否夫れ以上の大仙術と云てもよい、何となれば若し練金術が成功して、萬物盡く黃金化し得るに至たらば、黃金の價値はなくなつてしまふ。古代の神話にある通り、手の觸るゝ所盡く黃金化せしめる仙術を得たるが爲めに、衣食盡く黃金化して遂に餓へ凍へて死ぬより外に仕方がなくなつては大變だ。そこで近世の化學なるものは彼の古代や中世の空想に附帶して出來たことがいろ〳〵に變轉して來て、遂にこの有要な

る化學と云ふやうなものになつたのである。又矢張り中世に起つた所の者で星を見て吉凶をトする、人の將來を占ふと云ふアストロヂーと云ふものであるが、是も無論、出來ないことであるが、併しそれから次第に變轉し進歩し來つて、今日のアストロノミイ、即ち天文學と云ふものになつて、日月星辰の運行を初め、其他種々の重要なことを知るやうになつて來た。是等は先づ出來ないことから偶然にも出來ることを發見する導きになつたのである。或る利益を目的として考へ、其考へたこと其ものには何等の效を奏しなかつたが、それと連續して偶〻效を奏するやうになつて來たのである、併し是は眞の偶然と云はねばならぬ。

然るに之に反して少しも實益を目的とせず、唯ゞ考に耽るが爲めに考へたことで非常な效を奏したものが多くある。其最も著しい例を擧げて見ると、古代埃及に於てユークリッドが幾何學を考へたことなどは、之を以てどう云ふ目的を達しやうとか、或は何か實益に供しやうと云ふやうなことから考へ

たのではない。又コニックセションを考へて、遂に今日の航海術を發見するに至つた。此航海術を以て今世紀の文明は大に發展することが出來たのであるが、此航海術は何から起つて來たかと云へば、トーレミーの純然たる空想が、或は娯樂の爲て在たか、或は思考力を滿足せしめる爲て在たか知らないが、座上の空想に耽けて形象上の事を暇に飽かして考へた、其考が圖らずも後世に至つて大變な效を奏するに至つたのである。併し此ユークリッドの考へた幾何學は、さうなるべき筈のことを考へたのである、實効を奏すべき性質のことを考へて居つたから其事が出來たので、哲人石や練金術とは性質が違ふ。印度とか埃及とか云ふ國は非常に天惠の多い國て、樹には麵包が生り。或は酒が生ると云ふ位の土地で、殆ど働かずして生活が出來る、それが爲に又働くことも嫌つて居るが、暇がある爲に昔の印度或は埃及などに於ては、僧侶其他の優れた頭腦を有つて居つた人は、頗る高尚の哲理を考へたのである

が、此時は暇に飽かして唯〻考へることと夫れ自身が目的で考へたので、決して是に依つて實地の效果を收めやうとか、金を儲けやうとか云ふのが目的でない。殊に社會に於て一番高等なりとして居つた僧侶なるものは神聖侵すべからずであつて、縱令戰爭があつても、內亂が起つても、僧侶と云ふ階級だけは神聖としても毫も侵さぬ。侵されぬ爲に考へたことが其國の傳說とか口碑とか又は文書となつて、遺り遺つて後世それが又歐羅巴人の如き秩序的國民の手に掛ると、次第に發展して種々の有要なる學藝、有要なる技術となりたのである。

此の如き有要なる實結果を生ずるものと、唯〻空想に終つて、何時まで經つても解決を見るに至らないものとは、何に依つて區別が出來るかと云ふに、卽ち是は絕對と相對の別である。絕對のことは出來ない、又解らないが。相對のことならば解りもする。故に人若し其思想の限界を明かにして唯相對のことを考へて行けば、それは段々發展して實効を奏することが出來

る。併し絕對のことであれば何時まで考へても考の付くものでない。卽ち彼の圓と方とか全く緣の無いもの、其緣の無いものを幾ら互に變換しやうとしても出來やう筈がない。無より有を生ぜしめやうとしても、どうしても出來ぬ、又有を變じて無にすることも出來ぬ。總て絕對のことを考へたならば、如何に年月を積んでも效を奏することは出來ぬが、苟も相對のことであるならば、是は必ず何かになるのである。飛行機に就て云へば、若し空中を卽ち眞空の中飛行することを考へたならば、何千年經つても出來ぬ、眞空の中を飛行すると云ふことの出來やう筈づはない。空氣中であればそれは出來る。光線が太陽から地球へ來るのでも、眞空では決して來ることは出來ない、或る媒介物を經てゞなければならぬ、是れエーテルを假定する所以である。故に空氣中飛行機と云ふものならば是は慥かに出來る、其考も亦た昔から人間にあつたので、唯々其事柄は素より難しいには相違ないが、圓を方にするとか、或は哲人石を發見するとか如き不可能事ではな

い工夫に依て出來得べきことである。空氣は比較的人體より輕いものであるから、之を航行するの工夫が困難と云ふだけである。既に人間は海の上を航行することが出來る、勿論直接には行かぬが、或る工風に依り水の上を行くことが出來る。鐵の球を水の中へ投込めば直ぐに沈んで了ふが、之を平たくすれば水上に浮ぶ、鐵を平たく延ばして船を造つて其上に人間が乘りさへすれば、水の上を歩行することが出來る。人は陸上を歩行して居る、人は海を歩行して居る。然らば空氣の中を人が歩行し得られない道理はない、只比重の問題である。素より空氣には種々の運動を生じ時には暴風となり颶風となる、併し海水の潮流波動と何ぞ異ならん。同じく理學的工風を凝して空氣中にも一定の方向を定めて飛行することは出來るに定つて居る。此試驗は幼稚ながらも昔から隨分多くの人がやつて居る。セントポール殿堂の屋根から傘を翳して飛下り、腰を拔かしたと云ふやうなことをした者もあれば、又石川五右衞門が金鯱の鱗を盗まうとして紙鳶に乘つて揚つたのも其一例かも知れぬ。兎に角子供が紙鳶を揚げると云ふ考の起る以上は、空中飛行と云ふことは、どうしても起つて來なければならぬ。人は水を泳ぐことが出來るから空氣も泳げないことはない、それは水を泳ぐよりは困難であるが出來ぬことはない。圓を方にしたり哲人石を發見するのとは違ひ。理に於て出來得べきことである。唯其事のより困難なるが爲に遲れて居るだけである。佛者の語に緣無き衆生は度し難しとあるが、是は非常に面白いことと思ふ。圓と方とは數理に於て全く緣の無いものであるから、どうしても之を相變換することは出來ぬ。又不斷運動の機械を工夫するとか、又自己の身體を自己の力で持上げよう抔は、何萬年考へても駄目と云ふはねばならぬ。又馬と羊とを接いで混血兒を得やうとしても出來ぬ。併しながらダーヴキンの實驗の如く、種々の鳩を交尾せしめ、種々なる變生鳩を造るとか、又は均しく馬の族なれば互に交尾して驢となり騾となり、種々の變生を生ぜしむることは出來るが、犬と猿との混血兒や、人間と獸類の

間の子を生むと云ふやうなことは全然不可能事であると同じく、若し緣のあるものならばどんな難しいことでも年月を經、相當の工夫を凝したならば、必ず成功し得るが故に、科學哲學の研究に於て相對的のことは之を研究して知ることを得べく、又爲すことは得べしと云ふのである。

此等は學理上の絕對相對の論であるが爰に餘談として云ひたいのは、斯る學問的の六ケしい事でなく、唯社會日常のことに就ても、出來る事と出來ない事の區別を識別するの常識は頗る大切である。然るに人に依ッて所謂出來ない相談に向て無暗にあせつて運動を試むる人がある。而して失敗の爲めに失望落膽自暴自棄に陷るは實に笑止の至りであるのみか甚しきは天を怨み人を咎むるに至つては、殆と沙汰の限と云ふ外はない。

二五　盛衰論の眞相

人は常に榮枯盛衰を以て自然の數とし、生者必滅會者定離を以て應報の理

なりと言ふて居る。これに依て歷史家は古今の成敗を論じ、政治家は國家の盛衰興亡に鑑む、素より大體に於て斯る理屈もよいが、餘り直接に之を濫用して立論するのは弊ありはせぬかと思はれる。予は戯に彼等に對して盛になれば必ず衰へるものと定つて居るならば、寧ろ始から盛にならない方が宜いではないかと質問したい。今云ふが如く大觀すれば萬物皆常に變遷進退して所謂律動的作用の定則を脫する事は出來ぬ、例へば進化論者の說に從ふと、森羅萬象悉く進化の作用に依つて成立つものであるが、進化の極は平均點（エクイバレエション）に達し、それから又退化の作用を生ずと說いて居る。例へば吾々の身體に就ても、生れてから段々生長する、唯身體の量が增大するばかりでなく、總ての機關が發達して來る、俗に所謂男は二十五の春までと云ふが如く、大きくなりきつて了ふと夫れからは或時期の間は、暫く平均して居る、出るのと入るのと平均して居る間は平均狀態に止けれども、此狀態はさう永く續くものではない、次は段々退化する、即ち次第に老衰し

て終に死亡する尤も此三大狀態の中にも自ら小變化は常に往來す、是れ宇宙萬物共通の現象である。

乃ち天體に就て云へば天の一方に顯るゝ彼の慧星の如き、何故に大きな尾を曳て居るかと云ふに、其の大部分が未だ氣狀態にある爲であらうと云ふ。彼のネビュラ説に從へば總ての天體は最初は氣狀態にある、それが運動するに從つて自然に運動の中心が出來、それが本となつて廻轉する、廻轉すればする程熱が散じて行く、恰かも白熱にされた鐵塊でも、之を振り廻せば早く冷却するが如く、氣體が次第に熱を失つて液體となる。此液體が尙廻轉して居ると、益々熱を失つて終に固體となる。斯の如き作用に依て惑星も出來、恆星も出來て總ての天體も出來るのである。彼の太陽は尙多くの熱を有つて居るが、又常に熱を散じ光を放て之を失ひつゝある。慧星の如き者も恐らく尙熱が强いが爲めに氣狀態のまゝで、其の尾を引いて居る。其熱が漸次散ずるに從つて液體となり、固體となるのであらう。併し又今

日の固體狀に在る天體も其運動を妨ぐるの作用が反對に働いて、其廻轉を鈍らし遂に滯止するに至らば、再び甚だしき强度の熱を回復して氣體に還る外はない。又人間社會に於ける一個人一家族一國家に就てもやはり斯の如き作用はある。先づ卑近なる例を取つて云へば賣家を唐樣で書く三代目と云ふことがある。初代の人は天秤棒一本から財產を作上げる二代目は親の苦心を能く知つて居るから餘り馬鹿なことはしない、しかし三代目となると祖父の苦心などは少しも知らぬ、幼い時から極く安樂に育ち、相當な敎育を受け、字も唐樣で書く位まで洒落て來て居るが、其代りに金の貴さと云ふことは更に知らぬ、金の勘定も知らずに馬鹿な金を使ひ、祖父が千辛萬苦の末作り上げた所の身代を蕩盡して、遂には其敎育された所の唐樣の字で、賣家の札を書かなければならぬ。斯う云ふことになるのが普通の順序である。

故に世人はよく三代目が大切であると云ふ。例へば家康公は苦辛慘憺天下

を取つた。二代將軍は謹愼之を守つても、若し三代目が暗君であつたらば、徳川の天下も唐樣で賣家を貼らなければならぬ。然るに異數にも此家光が明君であつたが爲めに、三百年の泰平の基が定まつた、すると是は例の理窟と合はなくなるやうであるが、決してさうではない、大數に於ては最もよく之を證明する。何となれば則ち此時には既に他の大名が皆唐樣で書く時代になつて居つたからである。例へば伊達、前田、毛利、島津の如きも二代三代は最早豪邁なる先人の如くではない。從來諸侯は總て賓客の禮を以て迎へて居つたが、三代將軍に至つて、始めて君臣の分を正すべきことに決心し、諸侯待遇の法を一變した。乃ち德川に臣事するの意なくば各其所領に就て籠城の用意するも隨意なりと申渡したが、一人の異議もない。更に將軍の私室に一人づゝ召して茶を賜はり、又刀劍一口を賜つて、直ちに之を拔いて見よと言つたが、誰一人として之を拔いた者はなく、皆震上つて了つたと云ふ位の有樣である。要するに三代家光は生來俊秀なる上に、

師傅を選んで智仁勇の三德を具備すべく敎育せられた。今日の所謂智德體の三育に依て此三代目の危機を巧みに通過すべき明君を製造したのである。然るに多數の諸侯は泰平の續くと共に惰弱となりつゝあつたが爲めに、此の芝居が都合よく行はれた。然し此唐樣で書くと云ふことも一方から善意に言ふと文明に進んだのである。先祖の荒武者は、戰には强いが目に一丁字もない、或は產を起した老翁は天秤棒を擔くことは知つて居たが、いろはも書けぬ。之に比して其子孫の方は確に文化(レフィンメント)の進んだものと言ふことが出來る。之を一國民に就て云へば古來の文明國たる、支那、印度、埃及、希臘、羅馬其他の國に於ても、其盛時は永續せず、或る時期を經過すると漸次衰頽或は滅亡する。是は即ち何代目にか國民が唐樣で賣家を書くようになるのであつて、之を名けて文弱に流れ惰弱に陷つたと云ふのである。文弱に流れ惰弱に陷り贅澤になつたが爲に國家が衰亡するのである。有名なるギボン羅馬衰亡史に、羅馬の滅亡は滅亡の時に滅亡せるにあらず遠く

其由來する所あり、其極盛の時代に既に羅馬帝國の體内に毒(ポイソン)が注入せられてあつた、其毒が數百年の間に知らず識らず培養せられ、弱はりに弱つた所へ北方蠻族の蹂躙を加へられ亡ぼされたのである。其毒は即ち贅澤である、贅澤と云ふ毒の素とは何であるか富力の増大であると言つて居る。是はギボンの如き大史家の説としては、餘り平凡である。併し平凡な丈けに事實である。

國の文化が進み、國の富が殖えて來れば、どうしても贅澤になる。文化が進み富が増しても尙相變はらず、粗衣粗食水を飲み肱を曲げて枕とするは只特種の個人にのみ望み得るも、一般の國民に望むことは出來ぬ。若し又之を望み得べしとすれば、果して何の爲に文化を圖らなければならぬのであるか一向分らぬ。此が歴史家たるものゝ能く研究すべき點であらう。唯夢中に國が進歩し、文運が進んだ爲に、それと同時に文弱に流れ、富が殖えたが爲に贅澤が進んで其國が亡びる、今後も同一の歴史が繰返さるるであ

ろうと云ふ風に、千遍一律に興亡盛衰の理由を附するならば、是は如何にも皮相の俗論であるが、古來の歴史に鑑みて、國が盛になつても油斷するな、文弱に流れるな、富が殖えても贅澤するなと、政治家も言へば學者も皆其筆法で説いて居る。此頃頻りに行はれて居る勤儉貯蓄論の根據も同じ事で、どうも國民が贅澤になり、奢侈に流れては困る、文弱に陷つてはいけぬと云ふ所から、質實勤勉の風を鼓吹するは誠に結構な事である。併し國に文學が興り、遊藝が興り、美術が發達し、音樂が興り、演劇が盛になり、能樂が行はれると、是れ亡國の兆であると言ふ、長歌も亡國の兆である、謠曲も亡國の韵であると言ふ。併ながら總て此音樂美術文學工藝と云ふやうなものは、其國の文明を代表して居るもので、恰も花の如きものである。先づ草木は其根に培ひ其幹を養ふ、其結果立派な花が咲くのである。然るに其爛熟たる花其ものが亡國の兆でありとするならば、何の爲に其根に培ひ其幹を養ひ、自ら其衰亡を速かにするのであるか、是は自家撞

着の甚しきものである。併し是は古來の歴史を見ると、事實が全くさうであるから仕方がない。

是に於てか何れか一つ解決をしなければならぬ。そこで予は此古代文明なるものは、唯今日のレファインメントのみに止つて居るから、斯う云ふことになつて來ると思ふ。羅馬はなぜ其通りになつた、希臘はなぜ其通りになつた、支那はなぜ其通りになつたかと云ふに、其所謂文明と云ふものは野蠻と何等異つたことはない、唯雅美と云ふことが國の進歩、國の文明と云ふことになつて居つたに過ぎぬ。羅馬人は何を以て明りを取つたかと云ふと、カンテラに燈心を通して、火を點けて居つたに過ぎぬ。又何に依て交通して居つたかと言へば、馬又は人間の挽く車で交通して居つた。埃及羅馬希臘は文明國であると言つた所が、野蠻人とさう大した違ひはない、野蠻人も歩いて居れば、羅馬人も歩いて居る、野蠻人も燈心で明りを取つて居れば、羅馬人も其通りてあるのだから、大した違ひはない。併ながら

其人の容貌を見ても、其人の住家を見ても、其人の衣服を見ても、又美術工藝品等を見ても、野蠻人よりは確に都雅上品になつて居る、即ち所謂文化と云ふことは出來る。昔雅典の公民は三萬人で而して奴隷は四十萬人もあつた。此十三分の一しか無い公民が遊んで贅澤をする爲に、他の四十萬の人間は朝から晩までコツ〳〵稼ぎ、羊を飼ひ畑を耕して居るのである。又羅馬人は其の最も甚しきものである、彼の羅馬の浴堂抔の形跡を見ても、當時の狀態が想像される、又大劇場コロシウムの遺跡を見ても同樣である。其贅澤費はどうかと云ふに、外國を征服して分捕し奴隷の辛苦に成つたものを食たり飲んだり着たりする。それから働く人間は、戰爭に降服した者を奴隷として畑を耕させて居る。是が昔の文明國富强國と云ふものであつた。例ば蟻の研究家として有名なるサー、ジョン、ホックの研究に依ると、蟻の中にコンケラーと云ふ種類のものは、他の蟻が降服をすると之を奴隷となし、自分達は何もせずに遊んで居つて、降參蟻に向つて總ての用事を

命じ、仕事をさせて安逸に耽けると云ふことである。恰度羅馬人も是と同じである、希臘人も是と同じである。戰に負けた方が者がいろ〳〵の食物などを戰勝者に供給するのが恰度是と同じである。今日の世の中でも多少之に類したことが無いではない。少數の資本主が樂をして、多數の勞働者が苦むやうなことはある、これが今日社會主義なるものゝ起る所以であるが、盛なる者必ず衰ふと云ふ此原則で行くならば、どうしても文化は何時までも續き得られるものでない。先づ有形上のことに就て言ふも、贅澤の資本が增さずして贅澤の方が妄りに進むから、多數の人間が益々苦むことになる。羅馬の市民が贅澤をすれば、多數の奴隷が苦む。奴隷が食ふものも食はず、着るものも着ずして働いた結果羅馬人が贅澤するのである。是は日本に於ても維新前の有樣を見るに、大名士族は耕さずして食ひ、織らずして着る、他の三民が勞働をし、三千萬の人民が働いた結果、二百萬の大名士族を素餐させると云ふ狀態であつた。併ながら此の如き狀態は永く

續くことは出來ぬ、唯食つて居るばかりならば宜いが、生活の程度が上るに從つて、好尙も益々すゝみ、音樂を好み、美術を喜ぶと云ふやうになつて來る。一年も掛つて拵へたやうな硯箱や、十年も掛つて拵へた机を一人の貴人が弄んで居るとか、或は一人の耳目を喜ばす爲に、多數の人が唯働くと云ふことがあつた。之が爲めに美術工藝も進んだのであるが、昔の文明と云ふものは實に此の如きものであつたのである。

此の如き文化（レフアインメント）と云ふものは長く續くであらうか、昔から在り來りの田地に、昔から在來りの肥料を掛けて穀物を作り、或は海を渡るに櫓や櫂で漕ぐ所の小舟を使ひ、物を運搬するに人肩、馬背に依ると云ふやうなことでは、生產力は增さない、生產力が增さないで贅澤をしやう、洒落たことをしやう、文學を進めやう美術を進めやうとすると、總ての力が其方に吸收されるから、國の基礎は弱くなる。乃ち支那に於ても文學的唐の天下の亡びたのも全く是が爲である。哲學的宋の亡びたのも之が爲である。實力が增さ

ずして、單に文化が進んだ國は何年かの後には必ず亡ぶるのである。然るに歴史家は古今の相違を考へず、今日も尙ほ同一の筆法を以て古に鑑みて今を論じ、某國は極盛に達したからもう大抵衰へる時分である、某國は盛運に向ひつゝあるが其中に衰へるであらう、某國は今に覺醒して衰運を挽回するであらうと云て居るが、これは非常な見當違ひである。尤もそれは何萬年も續くか分らぬが、併し近代式文明なるものは、根據ある基礎の上にある。即ち科學が基になつて、其結果電氣を使ひ蒸氣を使ひ、古人が十五日も掛つて歩いた東海道を、僅か一日の中に行く、古人が十日掛つて織つた反物も、今日は一時間に織ると云ふことになつて來ると、是までの如く、文化が進んだが爲に亡びると云ふやうなことは決して無い。此の如く根が張り幹も太つて來た結果、其木に花が咲いたとすれば、其花は一度咲いただけて、それきり根までも腐つて了ふと云ふものではない。學問の法則に依り、天然の勢力を利用して人類の幸福を圖ると云ふのが今

日の主義である。此主義に依て打立られた所の帝國、此原則に依て進歩した所の國家は、昔の希臘羅馬支那印度などのやうに一たび盛になつて、又直ぐに衰へると云ふやうなものでないとは斷言する。なぜかと云ふに、勿論未だ十分なりと云ふことは出來ぬが、科學の力に依つて發展し、科學の力に依つて進んだ社會は、奴隷制度の時代よりも、多數の人間が飢寒を忍んで少數の人間に奉ずると云ふことが減じて居る。尤も今日でも勞働者の割合は隨分惡い、又資本家或は社會の上流者は、働かずして贅澤をして居る。之は大に戒むべきであるが、人民全體の生計の程度が高くなるのは大慶事である。紡績機械が出來たが爲に全體の織物が廉くなつて、寒村僻地の者と雖も、相當のものを着ることが出來、又肥料を改良して米麥の收穫が多くなつた爲に、今まで稗を食つた者も、麥を喰ひ麥を喰つたもの米を喰ふことが出來るやうになる。或は茅屋に窟居して居た者も人間らしい家屋に住むと云ふやうになる。之を一般的生計程度の向上と言ふ。若し之を

稱して贅澤と言ふならば、此の贅澤は永續の出來るものであると斷言し得られる。何となれば從來よりもより少き時と、より少き勞働を以て、より多くのものを造り得ることになつて來れば人間全體にそれだけの餘裕が出來て來る。其餘力を以て學問、美術、音樂等の發達が出來る。斯る社會に於ては、必ずしもそれが亡國の兆ではない。古代の社會に於てはこれが興り得る位まで進歩して來ると、一方に之を支へる丈の力が屆かなくなる。或る一方なばかり力が吸收され、他方にそれ丈の缺陷が出來て、それから亡びるのである。故に一方に文化が進んでも、一方に生産力が多くなれば、其文化の爲に衰へることの無いのは明白なことである。

故に眞意義の勤儉貯蓄其ものは甚だ宜いが、此理窟を知らずして彼の少數者の部分的不健全なる奢侈と、健全なる一般的生計程度の向上とを混同したる消極の勤儉貯蓄主義は、甚だ事情に適せぬ。昔の國家の興亡、昔の帝國の盛衰と云ふものは、今日でも其通りに繰返し得るものであるか、否、

此點に於て歴史は繰返さぬものである。此二十世紀の文明も、古代の文明と同じとすれば、それは大に憂慮すべきことであるが、事實は決してさうではない。單に貴族、富豪の一類が、金衣玉食して、一般の國民を苦めるの贅澤は最も不健全なる社會現象であるが、一般國民生活程度の高まるのは、國の發展で之に伴隨する美的進歩は憂ふるに足らぬのみか寧しろ大に喜ぶべきものと思ふ。

先づ人類全體の文明は、非常に長い生活を有つものである。一國民(ネーション)一人種(レース)が之を爲し遂ぐることは出來ぬ、故に印度支那埃及等交代して文明を助長する。埃及時代には埃及人の長所の許す丈文明の爲に貢獻し、愈手の屆かなくなつた所で其國民が倒れて了ふ　埃及が倒れると次に希臘が興る、希臘人も其及ぶだけを盡して亡び、更に羅馬人が興つてやる、それから近世歐羅巴人がやり、又日本人もやると云ふやうに、各定つた使命を帶びて居る。斯の如く種々歴代の國民が盡力して、數千年後に此非常に高い文明の

大水の上に達するものと見たる學說もある。又ヘーゲル派哲學に依つても、各人種皆夫れ〳〵特種の使命を有つて居る、乃ち今代はチユートン人が當代の文明を管掌すべき使命を有つて居る。此主義を採つた露西亞のスラヴヒル論者は、スラヴ人種が今後大に文明を改良すべき運命を有つて居る、故に西洋文明と異つて露國固有の文明を發展せしめ國粹を保存しようと云ふ、斯の如く各自勝手の議論をして居るので、是も餘り當てにはならぬが畢竟各人種各國民の盛運は、一時的のものであるから、或る時期の間、自分の能力を盡し、恰も蝶が產卵すれば間もなく死んで了ふと同じやうに說く。是等古代の希臘、羅馬、印度、支那などの盛衰興亡の跡に就て考へ、其に少しく理窟を付けて稍高尙の形に於て言つたのであるが、是又同じく例の盛衰論の繰返しに過ぎぬ。勿論科學の基礎の上に立つ所の文明は、何千萬年も續くとも云へぬが、兎に角に事實上に於て盛なるもの、必しも直ちに衰ふるものではないから、古風なる興亡盛衰論の思想は是非之を廢除

しなければならぬ。之れが爲めに、間違つた觀念、間違つた聯想が起り、進步の目的を達する上に大なる障害をなすのである。

二六　福澤先生を追懷す

古來哲學界宗敎界には靈魂滅不滅の兩說がある。その孰れが眞なるかは凡人には分らぬとして、兎に角福澤先生の靈は或る意味に於て不滅である。今や先生逝後十年と共に其靈の勢力が擴張せられ、先生の主義主張は死後益〻廣く行はれ、又その遺業は愈〻隆盛に赴きつゝあるのが正しく其確證である。これは先生の人格崇高にして而かも非凡の才識を具へ、一點の私心なく天下後世の爲めに盡されたその眞相が、死後に至て次第に明かになり、生前の敵も變じて死後の味方となり、反對者も翻て崇拜者となつて來るからであらう。人間の欲望は色々あるが大別すれば先づ四種に分れると思ふ。金錢、名譽、權力、獨立である。素より此四つのものを幷有したい

のは誰しも同樣であるが、しかし人に依て最も强く金錢を愛するものもあり、最も强く名譽を愛する者もあり、又最も强く權力を愛する者もあるが、我々の見る所では此最後の獨立に重きを置かれたのが福澤先生であると信ずる。先生も人並に否、人並以上に金錢權力等を望まれたかも知れぬ、しかし之れは皆此獨立を全ふする爲めの手段としてである、故に此目的たる獨立の爲めには常に此手段たる所の金錢權力名譽をも顧みないと云ふ事は、吾々が久しく先生に親炙して常に感ずる所であッた。是は先生生涯の間の言行を通觀して始て分かる事であつて、時々の擧動言論を以て先生を批評したる者等が、今日に至て其眼識の足らざるを自覺して慚愧に堪へないのも全く之が爲めであらう。

要するに先生の如く圓滿なる發達を遂げて崇高なる人格を發揮したものは古來實に稀である。古來歷史上の偉人に比し、又近く維新前後に輩出した人物に比しても、斯る多角的發達をなしたる人を見ないのである。しかし

無論先生にも短所もあり缺點もあろうが、之を全體より見て誠に偉大なる人物であッた。故に予は日本が二千五百年間に築き上たる三角塔の頂點は即ち福澤先生なりと云ふても決して溢美ではないと信ずる。先生の身を修め世に處したる方法に就て二三述べたいと思ふ。

曾て先生が三田の舊宅を取壞つた時に、床の下に拔穴が設けあつた事は予も目擊した事であるが、一朝不慮の事ある時に忍び出られる間道に作られたものであつた。

何故先生が斯くの如きものを作つて置かれたかといふに、維新前後先生が西洋の文明を唱へて我國の闇黑を照さんとなされた時は、攘夷家連より國賊を以て目せられ、いつ何時凶徒の白刃に斃れるか分らぬといふ有樣であつた。既に其以前から危險な事は度々で、曾て先生の門人等は非常に心配して、今先生を失つては日本は暗闇である、何れ其中時勢も變つて來るから先生に於てもモー少し鋒鋩を收めて頂く事にお願しやうではないかとい

つて、十數名の年長書生は袂を進ねて先生の前に出で、右の次第を申上げて、我々に於ても決心の上斯くお諫め申上げるのであるからどうぞ御聽入を願ひたいといつたさうである。すると先生ははら〳〵と涙を流して一同の好意を深く感謝され、それ程までに自分を思てくれる諸君の好意は實に辱けない。辱けないが併し是だけは止められぬ。私が最初から之をやり出さない中なら兎に角、一旦之を始めたからにはどうあつても已められぬ、苟も西洋文明の主義を日本に輸入しやうと云ふ一念發起した上は止める譯にはいかぬといふ、一同は、それは御尤な御言葉ですが、何も全くお止め下されと申すのでありませぬ。只今の處實に先生の御身の上が危くて堪りませぬから、暫くの間鋒鋩を收めて頂きたいとお願するのですといふと先生は、それはさうであらうが、どうもさういふ譯には往かぬ。縱令生命を取られた所がそれは私の自業自得と云ふものだ。なぜさういふ譯に往きませぬかと一同は更に疊かけて問ひ迫ると、先生は微笑みながら是れは私の

道樂だから止められぬ。世間には隨分つまらぬ道樂の爲に命を失ふ者さへある。私もこの道樂で死んだからと云ふてそれほど不都合のことでもあるまいじやないか、どうか是れだけは遣らして貰ひたいと言はれたので一同は返す言葉もなく、それならばどうぞお考の通り充分におやり下さいといつて引下つたといふ話である。是ば先輩肥田照作氏が予に話された所である、成程其時の世間の有樣を見ると、血腥臭奴が徘徊して居た。隨分危險であつたに違ひ無が、そこが先生の達見で決して唯無暗に空威張をしたのではない、一方には先生の書いた西洋事情等は日に益〻賣れて行く其賣れ擴まる所を見ると天下の人心は何れの方に向つて進みつゝ在かと云ふことが分る。假令どんなに攘夷論者が刀を拔いて迫つて來やうが脅迫しやうが、何にせよ爭ふことの出來ないのは西洋事情の如き、文明主義の書物が非常な勢を以て世間に擴まる、之を見たならば己れの志は遂し得ることが出來ると思ふ、此見識を以て先生は前途に光明を認めたのであらうと考へる。

茲に先生の偉大なる處が見える。生命を取られても自から信ずる所を行はずんば止まずといふ眞の勇氣も先生のえらい所であるが、併し此勇氣は他に類もある。此勇氣の外に尙何人も先生に及ばぬと思はるゝ點は、此場に臨で『是は私の道樂である、やらして貰ひたい』といはれた其大器宇にあると予は信ずるのである。是れが外の人であつたならば、『國家の爲』とか『君國の爲め』とか豪さうな體の宜い事を言ふ所であるが、先生はそんな事は口にも出されぬ。全身總て是れ憂國愛國の精神に充ち滿ちて居られても、それを高慢らしく口へ出して言はぬ、唯『是れは私の道樂である、道樂の爲に生命を取られるのは自業自得だ』と言放つて笑つて居られた處は實に他に類のない偉大な處である。

之に就て一言して置きたい事がある。先生の晩年病後の事或一人の男が先生を訪ねて來て、先生の識見文章には誠に敬服であるが、先生の書かれたものゝ中に忠君とか又皇室とかいふ事が少ない。是は甚だ不思議に思ふ。

之に對するお說を聞きたいといふ質問であつた。先生は病後で談話も不自由であつたが、それは鎌田の處へ往て聽て呉れといはれたといふので、其男は予を尋ねて來た。予曰く其理由は極て簡明である。第一、先生は忠君は口で言ふものでなくて身で行ふものと心得て居られる、先生は忠義を口厚かましく公言して忠義專賣顏する輩は非常に嫌ひであつた樣だ。第二、先生の考を具體して云へば國は身體君は頭腦である。所謂健全なる頭腦は健全なる身體に宿るの道理であると思はれるからであらうそれは先生の帝室論を讀めば眞意の在る所はよく分かりませうと話した事があつた。嘗て先生の話に曾て夜中新錢座の通を歸つて來ると、向ふの方から怪しい武士が肩で風を切て遣つて來た。暗殺の風評專ら高い時であつたから、危きに近よらぬが勝ち、早く逃げやうと思つて、擦れ違ふ途端に先生は疾風の如く駈け出された。すると向ふも吃驚したのか同じく一目散に逃げ出したのは滑稽であつたといふ笑話があつた。千金の子は盜賊の手に死せず、學者

が壯士風情の眞似をして夫死するのは馬鹿の骨頂と思はれたのであらうが、口では又さういふ威張つた事も言はず『私しは怖いから逃げる』といつて居られたのは先生の先生たる所以である。

又戊辰の春幕府が瓦解して新政府の官人たる薩長其他の藩士が江戸に入込んだ時は市中の光景は實に慘憺たるもので、何處を見ても草茫々。帝都を東京に移された早々で或は此儘寂れて遂に昔の武藏野に成果てはしまいかと思はれる程であつた。

隨て美術品などには無論目を晃れる者もない。德川氏の榮華三百年の間には江戸は美術品の中心ともなつて、上流の旗本などは皆立派な建物器具を所藏して居た然るに一朝瓦解の爲に、市中は木枯の吹き荒せし如く誰れも美術品などを顧みる者がなかつた。

薩長其他の官人俄に世に時めく樣になつて昨日の貧乏士族は一朝にして巨額の俸祿を貰ふ事になつたが、元と〳〵皆田舍武士で、美術品を賞玩しや

うなどゝいふ去る優美な考は少しもない。彼等は旗本屋敷の空殼へ住込んだから屋敷だけは大きくて立派であつたが、其生活狀態は誠に殺風景なものであつた何處の家へ往つても主人は小倉の袴を穿いて破れ疊の上に座つて居る。障子も破れて居れば襖も破れて居る、そして衣は骨に至り袖は腕に至るといふ風體の書生が茶を出す。美術品などを玩んで邊幅を飾るなどは大に恥辱とすといふ有樣であつた。

故に貴重なる美術品も買手がないから二束三文、金屏風、金蒔繪の手函などが古道具の樣な値段でも買手がない位、仕方がないから金粉だけ剝で手函は棄て金屏風は燒いて金だけ取るといふ實に無慘なる有樣であつた。

其有樣を先生が見るに付け塾生や知り合の人に向つて斯う云事を言はれたさうだ。彼等は今こそ田舍武士で破れ袴に破れ障子で滿足して居るが、見よ今に是等の田舍武士が段々都會の風に吹かれて追々贅澤になつて來る。衣は骨に垂れ袖は腕に至るの書生では餘りひどいといふので窈窕たる美人

の腰元が立派な衣裳を着飾り、眞白な手で、茶器に茶を注で出す樣になるさうすると破れ襖ではいけない、金屏風も立廻す、蒔繪の文臺も置くといふ樣になるのはもう目に見えて居る。今でこそ彼等は二束三文でも相手にしないがそうなれば價を吝まず買ふに定つて居る。故に若し今茲に幾らかの錢があればあの棄て賣りの書畫骨董を買つて持て居れば何十倍でも何百倍でも儲かる。金儲が苦もなく自然に出來る。諸君の中に金の欲しいものがあるならばそれを一つやつて見たらどうか。私は學者、商賣はせぬ私は自分でそれをやれば儲かることは能く知つて居るけれども私は商賣人でない學者だ學者には商賣は出來ない。誰かそれをやつてはどうかと、いはれたさうである、處が其後になつて果して先生の言はれた通りの傾向になつて來た。

予は此一事を見ても先生の卓見と人格を卜する事が出來やうと思ふ。先生の卓見なる斯く商賣の機微までもよく見拔て居られた。そして人に之を敎へて遣られた。維新の當初商賣は町人のみの爲すべき事と一般世人に思はれて居た頃から先生は貿易を起し商賣を盛にしなければ國は立たずと唱へられ人を勸めて商賣貿易を遣らせられた樣な事も非常な卓見であつたが、此卓見の爲に世俗の中には先生を誤解する者もあつて拜金主義の人の樣に見た者もあつた。若し先生が拜金主義の人であつたなら人の知らぬ間に金儲の出來た機會は澤山あつたであらう。右に陳べた話の如きも其一例である。然るに先生は決して左樣な事をせず、目の前に金の儲かる道が見えて居つても『私は商賣人でない、學者だ、學者には商賣は出來ないといはれて曾て此等の事には指を染めず、どこまでも己れの信ずる天職を守られた處を見ても先生を拜金主義だといつた人の誤解を匡すことが出來やうと思ふ斯く先生は或る一部の人から誤解せらるる程に商賣の呼吸を見拔くだけの卓見を有し、そして自分は少しも商賣をされなかつたといふ處に先生の高大なる人格が見らるるのである。

予が少年の時代であつたが曾て先生の玄關に斯ういふ貼札がしてあるのを見たことがある。

福澤諭吉應接に疲れ候間御用の方は
書面にて御申越被下度候

貼札の眞意は別問題として來客常に門に滿つといふ有樣は此貼札で想像する事が出來る。そして單に來客の多いといふのみでなく、客の種類は有らゆる階級に渉て、學者もあれば、書生もあり、政治家もあれば商人もあり、官吏もあれば農夫もあり。都會の人も田舍の人も、大臣も百姓も有らゆる方面の人が來て先生を尋ねるといふ有樣であつた。

右の如く先生の應接室は社會の縮圖ともいふべき有樣であつた。是れは先生の地位境遇の然らしめた處であらうが、一は先生が喜で客に接し、たとへ身分も智識もない者の話でも能く耳を傾けて聽てやられた故でもあらう。先生は大臣や參議に對しては宛ながら師が弟子に對するごとく、之に臨まれたが其他の者に對しては極て叮寧であつた。殊に地方の人の話には重きを置て能く其言はんと欲する所を言はしめ、又此方より問を出して種々なる事を聽かれて、それで先生はよくわれ〳〵の話を聽て下さるといふので、訪ねて來た者も多かつた樣である。

天分既に不出世の頭腦を有て居られた處へ、斯く有らゆる種類の人の話に注意して、之から種々なる營養分を吸收され遂に大常識を作て新日本の思想的中心となられたのである。

先生の智識は單に書物の上より得られたのみでない。書物は寧ろ先生の智識の一部分であつて、人間、社會、其他天地間の有らゆる森羅萬象に能く注意して微細な事迄も見逃さずに、之れから活きたる智識を取られた樣であつた。恰かも亭々たる大樹が、其絲の如く細い根の先から種々なる肥料や水分を吸收して參天の偉觀を呈する樣な趣があつた。

故に先生は蒭蕘の言と雖之を棄てずつまらない者の世間話でも、よく耳を

留めて聽き、且能く之を記臆し、そしてそれから推理して動かすべからざる議論を立てられた。即百姓の話を聞てそれで我地方人民の智識の程度を測量し、之に依て時勢を看、社會を察し、然る上にて之に適切なる實際の議論を立てられた。先生の言論が健全なる常識の上に立つといふのも、又先生の著書論文が一として其時代に適切ならざるはなく、時人を感動せしめざるはなしといふのも、要するに先生が獨斷の言も之を頭へ入れて、之れから『時代』といふ如き大きなものを推理された故である。

福澤先生、大隈伯爵、それに故陸奥宗光伯などの頭腦は素より天授であつて、所謂一を聞て十を知るといふ思考推理の力があると同時に、有らゆる階級の人から知識を吸收して之を記臆し活用する力がある。殊に福澤先生は自から卅一谷人と稱せられた如く世俗の才と學者の才とを兼備して居られた點に於ては殆んど比類がないが、併し先生と雖若し全く世俗との交際を絶ち書齋にのみ閉籠つて書物ばかり讀で居られたなら、あれだけ大常識

の人となられなかつたであらう。四圍の人事から活きたる知識を吸收するといふ事は我々に取つても實に必要な事である。

先生の如き偉人は生前に於て多くの崇拜者を有すると同時に又多くの誤解者があつた事は事實である。先生は一たび說を立てると中々頑强に之を主張せられたが、さうかと思ふと又ひよい〳〵と說が變つて來る事があつた。例へば攘夷論者に對しては激しく開國論を主張されたが、開國論者に對しては却て攘夷論を吹掛けられた樣な事もある。頻りに西洋の文明を唱へて頑固連を痛罵せられるかと思ふと、又國粹の尊重を說き出して洋癖家を攻擊せられた樣な事もある。其後國粹論が盛になつて來て排外思想となり、又古學復興の風潮などが萠して來ると又猛烈に進步開明の思想を鼓吹するといふ風であつた。故に先生の自說に熱中される所を見た者は先生を以て頑固だといひ、又說を變へらるゝ所を見て輕佻だと思つた者もあつたらしい。併し是れは双方共楯の一面を見たる誤解であると思ふ。先生の見識

は既に維新前からずつと後の後まで大體は一貫して居られた。自分は如何なる主義を以て立つべきかといふ事はチャンと定めて居られた。併し社會は活物である。山の上からは目的地が遠くに見えて居るからといつて一直線に行けるものでない。屈曲せねばならぬ道もある。跡戻りしなければならぬ道もある。先生の多智なる、能く之を承知して居られたものと思ふ。故に社會の狀態、世間の有樣、相手の心得に依て說かれる事も異つて來る、時としては自信と全く反對の言を發せらるゝ樣な事もあつた。

予は常に先生を譬へて文廻しの樣だコンパスの樣だといつて居る。是れは至極面白い譬だと自信するのである。コンパスには二本の脚があつて、甲の脚は一處に固着して動かない。乙の脚はぐる〳〵廻て圓を描く。小さな圓を描かうと思へば此脚を縮める。大なる圓を描かうと思へば此脚を伸ばす、伸縮大小自由自在である。即ち生先の識見と主義は甲の脚の如く一定不動少しも動搖しないが、其說き方は乙の脚の如く、其不動の主義を中心

として或は伸び、或は縮み、前へ順廻行する事もあれば後へ逆廻する事もある。然るに先生を評する人は此兩脚を見ることが出來ずに、各其一のみを見るから、固定の一脚を見た人は、先生は固守して移ることを知らぬといひ、廻轉の一脚を見た人は、先生は屢々變はるといひ、双方共に其眞相を見ることが出來なかつたのである。

先生の見識が、遠く先きまで見通して不動なると磐石の如きものであつたといふ一例として余の感歎措かざる話がある。老先輩某氏の話に戊辰の春官軍が江戸に攻入つた時、慶應義塾は芝の新錢座に在つた。之より天下の大騷亂が始まるといふので江戸市中は上を下への大騷ぎ、皆己れの財產を匿くし、又は之を携へて遠方へ逃げる、房總へ逃げる者もあれば上毛へ逃げる者もある。人心恟々として塾の生徒も多くは歸藩し殘る少數者も落付て讀書する事が出來ない程であつた。

すると先生は塾生に向てこう言はれた。此戰爭はそんなに大騷ぎをする程

のものにならぬ。是は恰かも通り雨の樣なものであるから、少し雨避をして居ればすぐ晴れる。亂暴の傍杖を喰つては馬鹿らしいから諸君は三日分の飯を用意して隣の紀州屋敷(今の芝離宮の在る處)へ行つて海岸へ壘か何か立てかけて、其蔭で本を讀で居れ。お鉢の飯は三日分あれば大丈夫と言はれた。

併し官軍は意外に規律が整つて居て、亂暴もしなかつたから海岸まで避難をする必要もなかつた。其中上野の戰爭が始まる、塾生は先生を信じて敢て騷かず、砲聲を聞きつゝウエランド氏經濟書の輪講をして時々屋根へ上つて砲烟を望むといふ位であつたが、果せる哉、戰爭は半日にして熄んで仕舞つた。

是れは實にエライ見識ではないか、德川三百年の天下が彌々亡ぶるの時に當て天下皆大騷亂を豫期するにも拘らず。是はホンの通り雨である、三日と續かぬと見拔かれた眼力は實に恐ろしいものである。當時斯の如き眼力

を以てあの戰爭を迎へた者は江戸市中先生の外に一人もなかつたであらうと思ふ。

先生は總べて斯の如き見識を以て我日本の將來を見通して居られたのである。故に西洋の文明主義を日本に輸入し、之に依て新日本を造り上げるといふ考は一定不動なるコンパスの內脚となつて決して動かなかつたのであるが、其處まで國民を指導する道行に就ては伸縮自在、餘り右方に偏して居るかと思へば之を左方に矯めやうとし、又左方に偏し來るかと思へば之を右方に矯めやうとし、常に其平均を取て進まじめる爲には、コンパスの外脚を向へ押進つたり、此方へ引屈したりする樣な事をせられたのである。それに就て予等の聽た一節に、近來西洋の學問が非常なる勢を以て進んで來た、併ながら是が爲に國民的精神を失つてはならぬ、國民的精神を失ふの危險は外國の學說に心醉するに胚胎するものである。昔漢學の極盛の時に當て山崎闇齋が門生に向つて、支那が若し孔子を將軍とし、孟子を副

將として日本へ攻めて來た時には諸君は如何にするかと云ふ問を出した所が、門生中答へるものがなかつたと云ふことである。外國崇拜の害毒と云ふものは、それ位酷いものであるから、西洋の學問は大に研究しなければならぬが、國民的精神と云ふものを失はないやうに注意を加へなければならぬと云ふことを始終言はれて居つた。又排外思想が甚くなつて、古學復興の風潮あるを見ては大に進歩開明の思想を鼓吹する、其勢の猛烈なることと驚くべきものである。

又先生は自由民權の急先鋒を以て任し大に國會開設の必要にして急務なるを主張し且つ個人に對しても隨分政治運動を勸めたともあつたが、又彌々其實行の曉に至りて政治運動の或る人々に與ふる其弊害を認めては大に之を戒めたこともある。嘗て或時地方の壯年が國會議員の運動を先生に相談した、其時に先生は直ちに斯う云ふ狂詩を書いて其人に示した、

道樂發端稱有志　阿呆絶頂爲議員

賣飛累代之田畑　買得一年八百圓

之を見て其人は急に議員熱が冷却して止めたことがある。

要するに先生の如き偉人は其生前に於て多くの崇拜者を有するが如く、又多くの敵もあるが其敵なるものも誤解から起るものが多い。古人も人間の價値は棺を蓋ふて後ち定まると云て居るが、實に至言である。彼の米國に於て神として尊敬愛慕せらるゝワシントン翁と雖も、生前は隨分甚しき攻擊を受け、讒誣中傷は其身邊に蝟集したものである。翁が國民の自由獨立を切望するの眞情を知らずして、何か野心を抱くものゝように思はれ、或はステッブフアザー、とか或はジョージ四世とか或はユーザーパーとか或はセカンドデスポット或はアメリカン、シーザル抔と種々の惡名を附したものだと云ふ。是れ皆當時の英國王ジョージ三世の壓制を免れても、ワシントンと云ふ奸雄の餌となるであろうと云ふ猜疑心から發したのであるが、其ワシントンの眞相も晩年に至て次第に解せられ、死後に至て大に明白と

なり、天下萬衆其の公明正大なる心術に敬服したのである。之に依て見ても福澤先生は此後歳月を經るに從て、愈〻益〻世人の渴仰する所となるは疑ひなき所と信ずる。是れ予輩の先生の靈を以て不滅なりとする所以である。

二七　河口師入藏に就ての所感

予は河口師の西藏に入られたのは、日夜感心して居る。實に師の入藏は、佛敎のため、國家のためであつて、畢竟斯る偉業は、殆どその道の爲め生命のある事を忘れ、眞の勇氣より出た働に外ならぬ。古來勇氣と云へば重もに武勇を云ひ、戰爭に命を捨てることの樣であるが、勇氣にも文武の二樣ある。例へばまづ水雷艇に乘つて大なる戰鬪艦に突當る、是はモウ此一瞬間に生命を捨る積りで最初から覺悟して往く、是などは武勇の中の最も激烈なもので、甚だ大切な事であるが、又他の一方に文勇と云ふものがあ

る。則ち其の道のために、主義主張の爲に、衆生濟度のためには。如何なる困難辛苦を冒しても心身の續く限りやる、生命は素より惜まぬが目的の成就する迄は如何に苦しんでもやる、此苦難に比するときは却て水雷艇で一瞬の間に生命を擲つ方が、寧ろ容易い事である。此文勇を持つて居らぬ國民は、如何に武勇の方に富んで居ても文明の高度に適することは出來ぬ、是非此文勇を重ずる氣風を養はなければならぬ。

まづ世界中で彼の土耳古の如きは非常に武勇の國で、古來武を輝かした國である。其武勇だけでは國を永遠に進歩せしめて往くことが出來ぬ。此土耳古人を防て西洋各國人が今日の隆盛に至つたのは、武勇に兼ねて文勇を備へて居うた爲めである。初め宗敎の自由のために、又政治の自由のために、學術發明工夫等の爲に、自分の主義主張を貫徹しやうが爲めには、如何なる苦艱をも犯したる所の勇氣、即ち文勇が其國をして長へに進歩せしめ繁榮ならしむる原素になつて居る。我邦に於ても、人物の方で云へば親鸞上

人日蓮上人又は佐倉宗吾の如き文勇の最も盛なるものてある。是は昔の話てあるが、此后も斯の如き人傑が出るやう文武兩勇の發起する樣な工合に世間の人氣がなつて來ぬとだめてある。

然るに今度河口師入藏の話が世間に廣がると、同時に之に向て世人が稱讃を與ふるには甚だ吝かにして兎角批難の聲が高い、これは大方賣僧坊主が大法螺を吹のてあらうと云ふ推測て、種々の噂を立てるが、予には一も取るに足るものを見止めぬ。今假に其一二の例を擧げると或說には、あれは小說を飜譯して居るんだ、西藏探險に行くと云ふ者は折々西洋人などにもあるが、その國境まて行くと、その西藏旅行の小說を賣つて居て、お前はモウ此先へ行くのは止すが宜い、此本を買つて行て御讀みなさいと云ふ相だ、河口の話も其翻譯か燒直しに相違ないと云ふ人があるが、西藏の國境に小說を賣つて、引合う位に探險者が多く行くてあらうか、如何にも馬鹿な話て取るに足らぬ。

それから第二に斯う云ふ事を言ふ、西藏に行つて自由自在に交際をし、自由自在に說法をし、人を感心させて居ると云ふ事がどうも怪しい。二年や三年西藏語を勉強したとて、なか〳〵さう出來るものではない、是が又疑はしい一つの箇條で、どうもあれは虛言に違ひ無と云ふ。予の信ずる所を言へば、成程英語佛語を學ぶのは隨分むづかしいが、西藏語はさうむづかしくなからうと思ふ。第一語法が日本語と同じい上に社會が未開だ丈け言語も簡單に違ひない、まづ西藏の記事を見た所、何も六かしい入込だとはない、山があり川があり谷がある、其間に天幕が十か二十も張つてあれば其が村てある、犂牛の糞を薪に焚いて麥粉を練つて食て居ると云ふやうな、誠に簡單至極な未開な幼稚な單調な社會てある。此幼稚にして單調なる社會には、決してさう込入つた言葉のあらう譯がない、子供の言葉が簡單なのと同じて、決してむづかしい筈はないと予は思ふ。第一日本ならば茲に橋と云ふ言葉がある。橋があれば渡るといふ言葉もあり、架けると云ふ言

葉もある。然し河口師の旅行紀を讀んで見ると、河があると裸體で歩いて往くと云ふ話だから、橋もなく舟もない。舟がなくば舟と云ふ語もなく又渡場と云ふ言葉もない。又食物と云つても、麥の粉とバタばかり食つて居ると云ふから、金團蒲鉾さしみビーフステッキの如き言葉は一も要りはせぬ。食物にも色々の言葉を覺へる必要はない、麥の粉とバタの二語で用は足りる、決して六ケしい事ではないと云た所が、駁論者もそれはそうかも知れぬが、佛法なぞのむつかしい事を言ふて說法をしたのはどうだ、餘りふら過ぎるてあらうと云たから、予は之に答て、あれは專門語で、佛法語になると日本でも支那でも西藏でも印度でも、南無阿彌陀佛は何處へ往つても南無阿彌陀佛、釋迦牟尼は何處へ往つても釋迦牟尼、涅槃は涅槃、即ち說法の言葉は各國共通の言葉で、恰も科學的術語が羅典語希臘語で出來て居て、歐羅巴各國に通ずるやうなもので、專門の梵語は皆共通であるからそれも不思議な事はない。しかし有難がつて泣いたり何かするのはどう

云ふものだ。それは分らぬ程有難いのである。上國の支那の坊さんが來て、妙な聲でムヂャ〳〵言つてると思ふと、皆なが南無阿彌陀佛〳〵〳〵〳〵と言つて有難がつて居る。日本の說敎でも、坊さんの言ふことが、分らぬ部分になればなる程猶ほ有難がつて居る所を見ると、蓋し河口さんの西藏の說法も、隨分有難がられて居たが、隨分分らなかつたであらうと予は言ふて居た。

それからもう一つ、どうも病氣になつては癒り、癒りするのが不思議である、死際迄往つては又癒る、寒い河を渡つて感冒し、發熱して、遂に息たへ〳〵の處まで往着いて又治る、あゝ云ふ譯は人間の生理に於て無いと言ふ。之に對しては精神上の作用で異常の饑寒困難に耐へる事が出來ると云ふ說もあるが、其れは別として單に有形の方から言つても、必しも死ぬといふ譯のものではなからうと思ふ。譬へば予の手に毒を付けると、段々皮膚が腐り肉が腐つて癒らぬ、夫程痛くないのに段々惡くなる、しかし剃刀

をもつてヒョッと切ると、非常に血が出て痛い、痛いがチョッと之を壓へて居るとぢきに癒着して仕舞ふ。健康なものを唯だ切つたと云ふ傷ならばぢきに癒る、毒をもつて腐らしたものだとなか〳〵癒らぬ。即ち身體の內部に病毒があり、病源があつて、其病毒が發生して來て身體の惡くなつたのだと、それは段々惡いが上に惡くなつて死ぬのであるが、健康な身體が、一時寒い目に遭つたとか云ふのならば、暖めさへすれば癒るに極つて居る。雪のうちに凍えて居つた、羊を抱いて見ると暖いから、それで舊の通り健康を回復した、なにも不思議な事はない、當り前の事であると云ふと、醫者でも其れに對しては別に議論はないやうであつた。

又斯う云ふ疑がある、セラの大學に學生が何萬人あるとか云ふ。日本の大學でも西洋の大學でも、そんなに何萬といふ程學生は居りはせぬ。それにあの小さい貧國で、大學生が何萬人も居るなどゝは是れは怪いと言ふ。しかしあれは即ち坊主の國、宗教の國で、政府もテオクラシー宗教政府であ

る。而して國民の十分の一位は、必ず坊主になる國だから、坊主の數といふものは非常に多い。其坊主が大學と云つた所が、今日日本や西洋でやつて居る科を分けた所の色々な學問をやる大學と云ふものとは違ふ。予は自分に諸方を旅行して知つて居る、譬へば埃及に往くと回々教の大學と云ふものがある、其大學はどんなものかと思つて往つて見ると。廣いことは非常に廣いお寺で其堂一杯に蓆を敷いてある、其蓆の上に坊主が多く寢轉んだり踞をかいて御經を讀んで居るのもあれば、裸體に成つて虱を取つて居るのもある。只汚い奴がウヂャ〳〵居る誠に不規律千萬な者である。是は回々教の大學で、西藏の佛教大學は、幾分かこれよりは、理屈丈は高尙であるかも知れぬが、大學と言つた所で、ケンブリッヂや、オックスフォードや、伯林巴里の大學を聯想するのは大間違で決してそんな物ではない。セラ大學に何萬人居つたといつても決して法螺ではない、一方から言ふと全國の乞食坊主の合宿と言つて宜い位の話である。

それから又河口師が醫者のまねをして、どうもさう巧く病氣が癒るとは不思議だ又大變な名醫として、諸方で勸迎するのも不思議な話、是れも大方法螺であらうと言ふ人がある。しかし是は野蠻國では、外國人が往けば必ず之を醫者と思ふ、朝鮮の田舍へでも住けば、お醫者さん藥を吳れと云つて貰いに來るに極つて居る。それから波斯邊を旅行した西洋人の話を聞くと、土人は皆西洋人に觸れると穢れると云て近寄らぬが、遠方から手を出して藥吳れ〳〵と云ふ。こんな事がよく未開國の旅行記杯にも書いてある、何でも野蠻人は外國人を見れば、すぐに醫者だと思ふ。又寶丹でも萬金丹でも、貰ふと其れが非常に驗く、驗くと云ふのは身體がウブで藥惱みをして居らぬ、藥を飲んだことが少ないから、非常によく驗く。例の草根木皮でも昔は非常によく驗いたに違ない、云はば未開の人間は藥の下戸で直にきゝ目が見へる、そこでセラマムチーは名醫であるとの虛名を取られた—河口先生決して名醫ではない、西藏人の身體が名醫であつたかも知れぬ、

是等の點から見ると、世間の人が疑を懷くのは、畢竟自分の無學無識を表白するもので、慧海上人の西藏旅行の事實の確かなるは無論である。而已ならず實に是は非常に高尚な、非常に有益なる所の偉業を遂げられたのである。佛教界に於て法末の世に此の如き偉人を出したのは其社會の名譽であり、又殊に日本に珍らしき事業で國の名譽であるのを世人の偏狹なる所から之を疑ふのは怪からぬ事である、又一方から云へば一般の僧侶社會の腐敗の爲めに僧侶其物に信用の無いと云ふのが、此人に迄禍を及ぼす譯であろうと思ふ。

西藏は、從來世界の秘密國として稱へられたもので、誰も往つた者はない、往つても拉薩府まで往つた者はない、予も西藏に就てはまるで無識であつた。唯西藏に就いて知つて居る事實は、西藏は世界の最高地海拔一萬五千呎の國で風俗は、一妻多夫である、西藏は喇麻教のはびこつて居て、政治上全く喇麻教の支配を受けて居る、其外奇怪なる風俗の二三を書物で讀ん

だのと、それがらかの倫敦の大英博物館のリード氏が特別の優待で、秘密部を見せて呉れた。これは婦人などには見せぬが、此秘密部には、西藏佛教の佛像の陳列がある。先づ春書を銅像に鑄た様な物である。此位より外に分らなかつた其國の事を、此の如く充分に分明にされた其功勞といふものは非常なものであるのみならず、隨分これが端緒となつて、西藏に對して英露兩國の政策の上にも、どう云ふ影響を及ぼすかも知れぬ、丁度日清戰爭から急に、列國の支那に對する方略が運んで來て、露西亞の如きは今日のやうな甚しい暴慢なる擧動を爲すに至つて居るが、先づ此英露の二國が西藏のテーブルランドに於て爲す所の演劇が始まつたならば、蓋し是れは河口慧海師の探險が大に之を助けたと云つて宜からうと思ふ。兎に角河口師の探險は世界の形勢の上にも影響を及ぼすと云ふやうな大仕事をしたのである。然るに前述の通り、兎角人の爲した事業を成たけ惡さまに言ふて、之に歸すべき所の名譽を歸せぬと云ふことは、如何にも心外に堪えな

い次第である。成程河口師は自ら謂はるゝが如く僧侶の身にして、決して名譽の爲にやつた事業でないに極つて居る。併ながら此國の進歩の上から又國民の名譽の上からして、此事業に向つてどうしても名譽を附けんければならぬと思ふ。之に向つて名譽を附せぬと云ふことは如何にも面白くない。若し此位の事が名譽にならぬならば、獨り佛教のためのみならず、學問の爲に、社會改良のために働く人物は出ない——偉人は必しも名譽の爲に動きはせぬが、併し世間が同情を寄せると寄せぬとは、大に人の運動を進めると妨げるとの差を生ずる、縱し其差が生ぜぬにしても、少くとも遲速の別は起つて來るに相違ない。之を一言に謂ふと、つまり國民が御殿女中の根性をもつて居るか居らぬかと云ふことである。御殿女中と云ふものは何でも人のした事を猜んで、あの人があゝ云ふ事をして殿樣の御氣に入てはならぬ、あの人の顏が綺麗だから殿樣の御氣に入てはたいへんだ、そんな事計り考へて居る。だからどうか人が美人でなければ宜い、成たけ人が馬

鹿であれば宜いと、成たけ人の名譽にならぬ樣に、人の名譽にならぬやうにと云ふことを考へて居る爲に、人を讒訴するとか、人を陷れるとか云ふことが、多く芝居にする御家騷動の根源となつて居る。人の名譽とすべき事を名譽とせず、人の偉業に向つて同情を寄せず、惡さまに言ふなどは、國民全體の氣風の甚だ卑劣陰險なるを證明する者で、又其氣風が國の進歩を大に阻碍するは確かな事實であるから、斷じて此氣風を打破らなければならぬ。則ち予の平生主張する獨立自尊の氣象、男らしく快活なる獨立自尊の氣象を盛にして、此弊風を打破らなければ成らぬと信ずる。

修養

一　肝要なる修養

世の中に學問を以て身を立つる人と、深く學問せずして、早く實際の仕事に就く人とがある、是は雙方共に各々得失のあることゝ考へる。學者になるものは無論、實際の仕事に從事する人も、今日或程度までは學問をしなければならぬ。或程度まで學問をし、腦髓を系統的に練磨し、それに依つて精神上の力を養つて行かなければならぬ。又高等の事業に就くには、無論高等の教育を要する。

抑も人間の頭腦は表現力（プレゼンテーブ）、再現力（リプレゼンテーブ）、再再現力（リプレゼンテーブ）とも云ふべき分類になる。表

現力を以て外界の物を知覺し、再現力を以て之を心裡の概念と化せしめ、再再現力を以て推考的作用を爲す。先づ人類の頭腦の極めて簡單な時には、目に見、耳に聞く如き、表現力が鋭くても、頭の中でそれを抽象する再現力には乏しい。此抽象的感念を聯續して推考する所の再々現力に至ては最も乏しい。極く野蠻の人間になると、數と云ふことが頗る怪しい、一二三位までは數へるてあらう、或は指の數の五位までは覺えるが、其以上は容易に覺えぬ。下等蠻民界に在つては三と言ふ言葉は多いと云ふ意味に使つて居る處さへある。一段進んて五ッ即ち多いと云ふ事に成て居る。今一段進んて兩手の指數即ち十位までは數へられる。それが元となつて文明人も十を超ゆれば、又元へ戻つて十一、十二と呼ぶ。十進法は今日何處の民族にも行はれるが、是は別段根本的數理には關係せぬ、多分指の數から來たものであらう。七進ても八進ても行ける理合である。又下等動物同樣に、足の指も手の指の如くに動く蠻民がある、これは手の指で十まで數へ、更

に進歩して足の指で二十まで數べるのである。

兎に角、數と云ふものは抽象的の觀念で、此數に依つて物を數へるのが再現力てある。野蠻人は牛羊を多く飼つて居つても、彼等は總計何頭あると云ふやうな數の考はない。然し其牛羊の中の幾つを盗まれ、或は幾つ逃げたと云ふやうな場合には、彼等は知らずに居るかと云ふに、決してさうではない、如何なる牛羊が一疋丈け居ないと云ふ事は直に分る、皆牛羊の顔付を覺えて居る。數を以て知る者には、一疋足りないと云ふ丈けてどの牛が盗まれたか、どの羊が逃げたかと云ふとはとても分らん。又亞米利加のホテルボーイの黑ン坊抔に、此力の强い者がある。それは多數の客の入り來り次第に帽子を受取り、別に名札や合札を付けないても、其の多數の客が歸る時には此帽子は此の人のてある、あの帽子は彼の人のてあると云ふ如く、帽子と顔とを見較べて一々渡すのてあるが、決して誤らぬ、其力は實に驚くべきものてある。しかし客が何人來て、帽子が幾つあつたと云ふ

やうな、數の方は却て分らぬかも知れぬ。總て物其物一々に就て覺ゆる力は非常に強い、事に依ると嗅ぎ分けて知るかとも思はれる。其代り勘定するとか、論理を考へるとか云ふやうな力は殆ど皆無である。

此表現力は理屈又は數理などの分らぬものには大抵發達して居る。大人よりも子供、男子よりも婦人に此力が多い。勘定の少しも分らむ昔の殿樣などの中には、多數の家來の名や顏をちやんと覺えて如才なくやるものがある、實に豪い力である。然るに其殿樣の子孫が學問をして、深いことを考へるやうになると、其力は段々薄くなる、此一點に於ては今の華族は昔の殿樣に及ばぬ。而して段々高等の數理物理を推窮し、或は無形の深遠なる哲理を研究する人は、どうも人の名前又は顏付などは更に覺えて居らぬ。其他何事に拘らず目前の事柄にうとくなる。甚しきは自分の細君や子供の名まで知らぬ哲學者があつたと云ふ極端な話さへある。これは最も偉大なる人物にも免れざる所と見えて、ニュートンの如きベーコンの如き大學者

にも隨分面白い逸話がある。或は食事を忘れ、或は衣物を忘れて、裸體で街頭へ駈出して巡査に叱られたと云ふやうなことは度々あつた。昔希臘の哲學者が遠い天文のことを考へながら、足許の水溜に氣がつかず乞食婆さんに嘲けられたと云ふこともある。

そこに至ると拿破翁は非常なる豪傑に違ひない。一方に政治上軍事上又學問上にあの通り豪いことをやつて居りながら、他の一方には人の名前顏付を能く覺えて居つた。拿破翁の驚くべき才能、偉大なる精力に加へて、多數の人の顏名前を覺えて居つて、一兵卒に向つてさへも何某々々と其名を呼んで、褒めたり叱つたりする。勿論一つ知つて居ることも、百も二百も知つて居るやうに利用することもあるであらうが、總てさう云ふ風で部下の者は身命を拋つても盡さうと云ふ心を起すので、是が多くの人心を收攬して、大事業を爲した所以であらうと思ふ。又拿破翁は鐵砲の音を聞いて、直ぐに敵の方向を知るの力があつた。一發の砲聲を聞くと、それは南から

來たか、北から來たかと云ふことを正確に知つたのである。米國土人は地上に耳を當てゝ敵の來襲を知り又敵軍なるか將水牛の群なるかをも聞き分けると云ふが即ち傘破翁は非常に高い所の文明力と、非常に低い野蠻力と、兩方を兼備して居つたから、あれ程の活動が出來たのであらうと思ふ。

英國の政治家は、雄辯家でなければならぬと同時に、人の顏を覺えることが上手でなければならぬ。又其地方自治體のことに就ても同樣の事で大に面白い話がある。庄屋大庄屋村長郡長の如き人又其細君は、どうしても其村中の百姓の名と顏とを覺えて居なければならぬ。例へば途中で、百姓が旦那さんお早う、奥さんお早うと挨拶した時に、此方からも唯グウドモーニングだけではいけない、必ず先方の人の名前を呼んで、グードモーニング、ジョンとか、グードモーニング、メリーとか、一々先方の名を言つて挨拶をすると、名主殿の評判がよろしい。此の如き實は極く野蠻的の下等の能力であるが、人の上に立つものには、今の世の中に於て之れが非常に

必要である。偉大の勢力を有する所の人は、どうも此力に富んで居るやうである。尤も反對の例もある。非常な大人物であつても、斯う云ふことには極めて無頓着で、丸で誰も彼も無差別に見くびつて、人間を一群の動物として支配する所の豪傑もないではない、彼得大帝の如きはこれである。但し其人の一缺點には違ひない。苟も之れのないのが缺點であると云ふ以上は、何人も此力を養ふべき心掛の大切なることは明かである。教育家の所謂五官の教育、即ち視力、聽力、嗅力、味覺力、感觸力の練磨を兒童に加ふるが如きも之れには大なる助となる、勿論、子供は此表現が天然に鋭敏で、其以上の推理力、想像力には乏しいが、大人になつても此單純な能力計りが強くつて、學問上の思想に乏しく、複雜な事の解らない人間は、唯小使に遣ふにはよいが、決して上等の事に當る資格はない。唯高尚な學問を修むる者が、單純なる力を失ふて、學者世事に迂なるの譏を蒙るは、主として此方面の修養を怠る爲めであらう。素より純然たる學者は世事に

拘らず、益〻純理を研究するが其の貴き所以であるが、學問を活用して實務に當らんとする者は、兩力の平均を得なくてはならぬ。但し世間多數の人には此の心配はいらぬ、殊に婦人などは特に此方には著しい力を具へて居る。例へば途中でちよつと出合た人でも、其瞬間に於て頭の上から足の爪先迄も見て、上は髮飾りより下は下駄の鼻緒に至るまで直ぐに見て取る。然るに學生の如きは、隨分むづかしい理窟を研究して居るが、斯樣なる力には乏しい。素より學問至極大切なことで、これを爲さねば世に立つて大なる仕事、高尚なる仕事は出來ぬが、併しそれだけでは未だ大に爲すことは出來ぬ。高尚なる仕事に從事するにも、極く單純なる個々の力をも兼備することが必要と思ふ。要するに人は己れの常に使ふ方に發達して、使はない方は退歩する。學生に近視眼が多くつて、船頭には遠視眼が多い。是は學生は始終近い所をばかり見て居り、船頭は遠い所のみを見て居るから、自然と神經が一方にのみ發達し、使はぬ方は遲純に成て來るのであらうと

思ふ。

是は人間に免かれぬこととしたならば、能力の平均を努むる方法を講じなくてはならぬ。學問を應用して、社會に活動せんとする人の爲めには、極めて大切であつて、怠るべからざる所の修養である。

二　積極的道德

我が修身要領はこれを三つに大別することが出來る。第一は自己に對するの義務、第二は家族に對するの義務、第三は世間即ち家族以外の社會に對する義務の三つとする。自己に對するの責務は古來の敎へでは餘り言はぬ。自分が自分に對する責務は如何なるものであるかと云ふに、先づ我と云ふものを二つに見なければならぬ。即ち主觀的の我と客觀的の我との二つに見なければならぬ。而して人は自己に對して如何なる義務を盡さなければならぬかと云ふことを第一に知らなければならぬ。カントの說も同じく是

から起つて居る。自己生存の義務は誰でも持つて居る。人は自分に對して如何なることをも爲し得ると云ふ譯には行かぬ。他人にさへ關係がなければ、自分に對しては何う云ふことをしても頓着せぬ者がある。成程他人を害することは道德上禁ぜられて居るが、自分に對することは少しも構はぬと云ふ說を持つて居る。ナニ俺の事だから俺の勝手に遣ると云つて一向頓着せぬ人があるが夫れは大なる間違で、自己に對する義務の觀念のない人の言ふことである。先づ人と云ふものは如何なるものかと云へば、二つの性を持つて居ると見なければならぬ、獸性と理性、この二つを持つて居るのが人間である。獸性即ち禽獸と通有するの性、例へば呼吸飲食寢起する等のことは、總ての動物が爲すことで人に限つたことはない。犬でも猫でも物を食ひ又寢る時は寢る、斯れは人間も他の動物も同樣に持つて居る性質であるから之を名けて獸性と云ふのである。併しながら又人には人の特有性と云ふものがある、外の動物と區別する所の性がある。夫れは何である

かと云ふに理性即ち物の道理を考へ得る力である。人は斯くすべき筈のものである、人は斯の如く爲さんければならぬ、又た斯くあるべき筈のものである、或は既往の事を以て將來を類推する等、其他總て道理的に動くと云ふ性は他の動物に無い所であるから之を名けて理性と云ふ。此獸性理性を合せ有するのが人間である。然るときは二つの性を備へたる人と云ふ者は、如何にして禽獸と區別を附けるか、若し動物と共通の性質のみが發達して、動物と相岐るゝ所の特有性即ち理性と云ふのが減退すると云ふことになつて來ると、人は段々下等動物に近づいて來る。しかし其動物の共有性をして獨り働きを逞うせしめず、其上に立つ所の特有性たる理性を發展せしむると云ふのが、即ち人間としての運命を發達せしむる所以の道であつて、自己に對する義務と云ふ事から云へば是れが最も大切なことである。若しも人が天然に有つて居る情慾を自由自在に滿足せしむる爲め、其情慾の赴く所に從つて働くと云ふことては少しも禽獸と變つたとはない。故に

人としては道理を以て情慾を抑制すると云ふ働きがなければならぬ。禽獸と雖も自然の天性があつて、其天性の爲めに此處まで食へば後は食ひたくないと云ふ自然の機能があるから、勝手に食はして置いても或る度までは食へば以上は食はぬ。是は何うして起つたことか、或る進化論者の優勝劣敗の説に從へば、食ふだけ食へば夫れ以上食はぬと云ふ丈けの天性の具はらぬ者は既に消滅して、唯夫れを爲し得る者だけ殘つたのである。所謂適者生存である。又最初から天帝が此如き天賦の性を與へて置いたと解釋する人もある。兎に角下等動物でも自ら此性を備へて居つて、或る度まで食へば己れの生命を害するやうなことをせぬ、即ち生延びるに都合の好い性情が自然に働いて居る。人間と云ふものは夫れだけでは可かぬが中には隨分三杯喰つて宜い所を五杯喰つて腹を痛めて困りながら、喉元過ぐれば熱さを忘れ、又翌日になつて餘計に食ふことがある。要するに人たるものは其獸性と理性を兩つながら働かず筈になつては居る、其理性を働かせずして

獸を働かせる爲めに、往々喰ひ過ぎ飲み過ぎして、身體の健康を損ふことがある。獨り身體のみならず、精神の發達をも妨げて樣々の間違を爲すと云ふのは、要するに道理の働きを鈍らして、唯獸性の働く儘に任じて置くから起つて來るのである。左すれば如何に物が旨いと云つて、無闇に喰ふのは非常に惡い、惡いことは誰も知つて居るが、兎角獸性を逞うして理性を鈍らせる人が多い、又酒を多く飲むが爲に己れの健康を害するも同樣のことである、第一自分の品性と云ふ點から云つても、酒を飲んで管を卷く程下等なことはない。同じ事を三度以上も繰返すやうになると之に向て自然輕蔑の念、此は奴仕樣のない奴であると云ふ念が起つて來る。殊に醉步蹣跚として歩く如きは、既に人間の境を離れて居るので、即ち獸性を逞うして理性が引込んで居る證據である。又淫奔猥褻の行爲を以て品行を亂す者もがある。是は自尊の念慮を失つて樣々の亂行を働く其結果は己れの品位を落し己れの健康を害するのみならず、其の家族其の子孫にまで累を及

ぼすのも、畢竟獸性を逞ふして理性を鈍らすの結果に外ならぬ。

要するに人は唯だ自分の精神自分の身體を有益に發達せしむるのみならず、他人に對し社會に對し有益にして而も長く働くことが人間の自己に對する義務であつて、之を三つに分つことが出來る。身體に對する義務、智能に對する義務、德性に對する義務、即ち智德體の三つを具へて居るのが人間である。自己と云ふものを分解して見れば、此智德體の三つに分れる。故に人として此世の中に生れたならば、先づ己れの身體を强健に發達せしむる必要がある、又智惠を磨き德性を修養して、智德圓滿の人間になるのが即ち己れに對する義務、斯く智德體の三つを發展せしめて、完全の域に達するのが人間の義務である。而して第一の身體に對する義務と云ふのは、理性を以て動物性を押へることを云ふ。これが出來ないと益々禽獸に近づいて、人としての尊い所が無くなつて來る。是れに反して理性に依て獸性を押へると、高尚なる人間になつて自ら尊び人に尊まれる、所謂獨立自尊の

人間としての體面を具足するの初歩が出來るのである。要するに修身の初歩は先づ己れの身體を大切にするのである。之れを爲すの順序として己れの健康を計らんければならぬ、健康を計るには何うするかと云ふに、所謂理性の法則を守つて不養生をせぬやうにし、成たけ身體を達者に成たけ生命を長くするのが最大要義である。何故此の如き義務を生じて來るかと云ふに、人が此世に生れたならば、成たけ充分に發育させて、人としての價値を上げると同時に、他人の利益を計り、社會の公益を計るやうにしなければならぬ。其資本たる自分の健康を害し、自分の生命を害するは最も一層惡いのである。即ち自殺の如き、往々人は此點に就て過つた考を持つて居る、自殺を善い事と思つて、時に嚴頭の感抔を起して、態々華嚴まで行つて瀧に落ちて死ぬ人がある。此の如き心得違の人が此世の中にあるのは、これ其人一人の罪ではない、社會に一種の悲觀的、厭世的氣風があつて此の世の中を悲觀して色々のことを考へ、到頭自分で自分の身を殺すことに

なるのである。故に修身要領にも此事は明に規定してある、「天壽を全うするは人の本分を盡すものなり、原因事情の如何を問はず、自から生命を害するは獨立自尊の旨に反する背理卑怯の行爲にして、最も賤むべき所なり」自分で世を果敢なみ、自殺を企てるのは卑怯未練な者のする事で、決して大膽なる人のする事ではない。然るに古來の教へ、古來の小說淨瑠璃と云ふのは、寧ろ之を禁ぜずして却て奬勵するやうになつて居る。義太夫を聽いても芝居を見ても、自害をする所が這入らぬものにならぬ。兎に角原因が結果となり結果が原因となつて、到頭此氣風を作つて了つたが、無駄な犬死は一番惡い。尤も身を殺して仁を爲し、又國家の爲に生命を賭する眞の忠義眞の勇氣は、是非持つて居らなければならぬ。しかし夫れ以外に自己の生命を害するは卑怯の行爲である。是を以て自殺は犯罪であるや否やと云ふことが、哲學上の問題にもなれば、道德上の問題にもなり、又法律上の問題にもなつて居る。日本でも自殺を犯罪であるとする觀念が起つ、

て來なければいかぬ。現に某々國の法律では自殺未遂の者は禁獄される。人を殺す事も惡ければ自分を殺す事も惡い、人を殺すのは何故惡いかと云ふに、人間が減るから惡い、減るのが惡ければ人が減つても自分が減つても惡いではないか。自分が自分の健康を害して病氣になることが惡いとすれば、自殺を企て身を亡すのは道德上最も忌むべきことである。これは身體に對する義務で、死ねば智慧も德義も無くなるから、即ち己れに對する義務を缺くことになる。何故其義務を缺くのが惡いかと云ふに、是まで人間が進んで來た今の日本の程度に至るにはナカ〳〵容易なことではない、神武天皇より二千六百年と云ふ年限を經て、漸く是だけの程度に日本が進んで來た。先祖代々智德を修養して今日の日本國の程度に進んで來た。故に今代の我々は即ち先代の人に對して義務を拂はねばならぬ。其義務は如何にして拂ひ得るかと云ふに、即ち我々一代の間に大に我々一個人としての智德を發展すると同時に、社會を改良して之を後世子孫に渡して行くの

が我々の義務である。夫れでなければ國が進む譯はない。一の時代が次の時代に渡すには、幾分か程度を進めて渡さなければならぬ。我々が先代から讓られたものよりも、之を上等にして子孫に渡すと云ふやうに爲なければ進むと云ふことはない。其方面は文學に於て實業に於て政治に於て道德に於て總ての方面に於て一段丈け進めて、之を後昆に讓つて行くと云ふので、始めて社會が進歩し人類が進んで行くのである。然るに之れを爲さず、自分が生れて一人前になる迄は、父母の厄介になり、社會からの薫陶を受けて漸く是から社會に向つて是迄の借金を拂ひ得る時になつて、慶頭の感を起して死んで了へば、是は社會の喰逃げと云ふことになる。自分で借金を負ひながら借金を拂ふと云ふ時に彼の世に逃げて了ふのは、是は誠に卑怯未練な事で、此樣なことをする者が多くなると國が滅びる、少くも國を退歩せしむるに違ひない。兎に角此氣風を止めねば、敢爲、活潑と云ふ氣風を進めるのが肝要である。是迄道德の敎へる所は、兎角消極的の事が重も

てあつて、人をして悲觀、厭世に傾かしむる弊がある。所謂進取的の敎へてなく、何事も控へ目にすると云ふ敎へ方である。成程夫も必要であるが、餘り其度が過ぎたから、人間が斯ういふ意氣地無しになつた。何うしても敢爲活潑堅忍不拔の精神を以て、人を導いて往かなければならぬ、修身要領にも、「敢爲活潑堅忍不屈の精神を以てするに非ざれば、獨立自尊の主義を實にするを得ず、人は進取確守の勇氣を缺く可からず」と書いてある。先づ人間は進んで取ると云ふ氣風がなければならぬ。唯單に進んで取る丈でなく、又取つたものは何處迄も自己の忍耐を以て固く守らなければならぬ、例へば戰爭で云ふと突貫して城を取る勇氣がある許りではいかぬ、取つた城を他く迄頑强に守つて、敵を擊退する勇氣がなければならぬ。卽ち不撓不屈の精神は取つた物を守るに必要である。進取確守の勇氣を欠かば、人間は一個人としての己れの發展を遂げることも出來ず、又進歩することも出來ない。故に成たけ人をして進取確守の氣象に富ましむるやうに敎へる

のが道德の義務である。古來道德と云へば、唯人を溫順しくし、唯人を無爲の人間にする。田舍抔へ行くと石地藏尊があるが、眼もなければ耳もなく口もない。彼れは何であるかと云へば、言はざる聞かざる見ざる、口は禍の門である、耳も禍の門である、眼も禍の門である、故に言はざる聞かざる見ざるの三ざるを以て、德義の本義として居ろと云ふ流義の道德ではいかぬ。成べく喋舌らなくてはならぬ、聞かなくてはならぬ、見なくてはならぬ、卽ち見聞を廣くして己れが得た所の知識、自分の考へた思想をば口を以て言ひ現すとは必要である。然るに眼を閉ぢ口を閉ぢ耳を閉ぢろと云ふ消極的の敎へでは、迚も此世の中の進步は出來ぬ。夫れを全く打破るのが修身要領の主旨であつて、人は飽くまで進取確守の氣象を養はねばならぬ。コヽが主動と他動との分るゝ所で、成たけ人間を消極的に養成せず、積極的に養つて行かなければならぬ。主動的の人間を造ることは最も必要である。詰り其の精神を盛にすれば、自殺の如きことは自然に消滅して了

ふ。

身體に對する義務は先づ以上の如きものである。次に自分の智力を如何にして研いて行くか、智力を研いて悧巧になるのは己れに對する義務である。是は自分の智慧を進めて行くのであるから云ふ迄もなく必要なことである。少時は小學の敎育を受け、續いて中學の敎育を受けて、大體の事を知らなければならぬ。地球は何んなものであるか、天體は何う云ふものか、或は我々の住んで居る國は何う云ふ處か、其歷史は何うなつて居るかと云ふことは、是れは一個人として國民として知らなければならぬ。併し歷史を知つて居る、地理を知つて居る、外國の事も知つて居る丈けでは行かぬから、自分で自分の始末をする丈けの素養がなければならぬ。人は自勞自活、自分で自分の一家族を養つて、社會の厄介者にならぬ丈けの素養がなければならぬ。卽ち夫れだけの職業敎育が必要である。自分が名を成し身を立て智慧を磨き又一體及び一家を維持して行く上に於ても、如何なる職業を以

てするかと云ふ丈けの敎へがなければならぬ。夫れだけの智慧を先づ磨かなければならぬ。親から金を貰ふから夫れて食つて行くと云ふ人があるかも知らぬが、是は因循の甚しき意氣地のない話てある。親から貰つて財産の利息て食つて行くと云ふことは、是は男子としても女子としても恥づべきことてある。凡そ財産と云ふものは、今日百萬圓の財産があつても明日無くなるかも知れぬ、其浮沈は實に甚だしい、富貴は　雲の如きものてある。亞米利加の如きは面白からぬ缺點も多いが併し自勞自活の精神は頗る盛な所て、隨分親が數億圓の金を持つて居ても、子供は子供て獨立て食つて行くと云ふ爲めに、小僧奉公ても何ても遣つて、親の厄介にならず、親父が馬車に乘れば己れも他日親父よりもモッと立派な馬車に乘つて遣らうと競爭する風てある。爰に面白い話は、或人が一人の娘を持ッて居ッたが、非常な金持から「何うか貴方の令孃を貰ひたい」と云ふ、しかし其娘の親は餘り金の無い人てあつたが、「成程夫も宜からう併し貴方は何か職業があるか」

「左樣別に職業と云ふものはない、ソンナことを爲ないても親が貯へて呉れた金が澤山あるから、食ふには心配がない」「左樣てすか夫ならばお斷り申さう、假令娘が貴方の處へ行かうと云つても、私が承諾を與へない、貴方の望みは駄目てす」と跳付けた。そこて其若者は如何にも數百萬圓の財産があつた所が、何か職業が無くては娘を呉れぬと云ふのは尤もと思つて、俄に柳の籠を造ることを習ひ半年計り經つて立派な籠を持つて來て「之を貴方に獻上する」「私は半年の修業て此仕事を覺へました」「成程是が出來れば、餓える氣遣ひはない」と云つて、直に承諾を與へたと云ふ先づ職業を修めた以上には如何に深く學問を研究し、如何に深く研究しようと、夫は深ければ深い程益々宜い、其智力を發展せしむると云ふ義務を人は持つて居る。

其次には人の德性を發展せしむることも亦自己に對する義務てある。其德性と云ふ者は、何う云ふ種類のものてあるか、何故に德性を發達させんければならぬかと云ふに、人は智恵だけ出來たのては仕方がない、善いこと

を爲すのも智慧、惡いことをなすもの智慧である。故に其智慧を惡い方に使はぬ丈けの修養をせなければならぬ、即ち己れの心を養ふて、善を好んで善を爲し、惡を憎みて惡を避けると云ふ精神を作らなければならぬ。是が即ち德育と云ふものである。此德育をなすには、即ち獨立自尊の觀念を强くし、自分の品位を高尚にし、自分を尊んで己れは實に立派な者である、己は實に尊い者であると云ふと同時に、自分だけ尊んで他人から輕蔑されては何にもならぬ。自分が自分を尊んで自分の品性を重んずると同時に、人からも亦彼の人は尊敬すべき人であると思はれるやうになるのが、即ち德性の修養である。自ら自分を尊び人に尊まれることを目的として進れば、何うしても其人は善い人にならざるを得ぬ。自ら尊び人からも尊まるゝやうになるには道德を磨く外はないが、其道德を如何に磨けばさう成るかと云へば、先づ勇氣、用心即ち遠く慮るの心、忍耐、謙遜、信實、及び不屈の精神是だけのことは先づ勉めて行かなければならぬ。或は勇氣を德と見

るか見ぬかに就ては、學者に依て議論もあるが、人の心は智情意の三つに分つことが出來る。而して智に關するものは智育、情意に關係するものは德育、情育意育ととと見て行かなければならぬ。即ち情と意とを宜い程度に於て働かせるのは德義である。ソコで勇氣がなければならぬ。勇氣と云ふものは如何なるものかと云へば危險を避けずして自分の義務を盡し、自分の職分の爲めには危難を恐れぬと云ふのが勇氣、其勇氣と云ふのは自分の義務に赴くは、水の低きに就くが如く奮つて進むのが即ち勇氣である。而して勇氣にも種類がある、死を恐れずして進む之を勇氣と云ふことは誰も知つて居る。

三　思想の向上を圖れ

國民思想の向上を圖るは、今日の要務であると云ふことを予は深く感じて居る。尤も今日向上せしめなくてはならぬものは一にして足らず。道德の

向上も圖るべし、美術の向上も圖るべし、智識の向上も圖るべしてあるが、道德にしても、美術にしても、又は智識にしても、其國に存在する程度如何を測る所の尺度標準がなければならぬ。乃ち之等を綜合し國民文化の程度は如何なる邊にあるかと云ふことを見なくてはならぬ。これは餘程むづかしいやうであるが、實は頗る易いことである。能く人は國民道德の程度は分らぬものであると云ふ。見樣に依つて高くも見え低くも見える、甲の國より乙の國の方が時に依ると高いやうにも見え、又時に依ると低いやうにも見えると云ふ者もあるが、予は決してそんな曖昧なもので無いと信ずる先づ其國民の信義が如何なる程度にあるかと云ふことを見んと欲すれば、之を見る甚だ容易である。例へば其發現したる商業道德の程度を測るには手形交換所が唯一の尺度標準である。商業道德が進んで居るか進んで居らぬかと云ふことを見るには、其國の現金取引の商賣と、手形交換との割合とが、どうなつて居るかと云ふことを見さへすれば宜い。帳面上の相殺に

依て行はれたる取引の多寡如何。爲換手形、小切手の流通に依て如何程迄現金の授受を省略して居るかを見れば、之れに依て商業道德が進んで居る國か、進んで居らぬ國かと云ふことが能く分る。つまり泥棒の割合が多いか少いか、反對から言ふと正直の分量が多いか少いかと云ふことを見るのである。社會の人々が悉く正直になつて仕舞へば、現金の授受はなくなる道理、貨幣は人類不　直の產物と云てもよい。斯の如く信用取引と現金取引の割合を以て、其國の商業道德の程度が分かり、商業道德の程度が又一般道德の程度をトするの標準となる。

然らば國民思想の程度が高いか低いかと云ふことを見るには何を以て標準とするか、其國に井戸端會議が多いか少いかと云ふことを見さへすれば宜い。井戸端會議と云ふのは先づ裏店に於て行はれる。裏店の女房連が井戸端に大勢集つて、或は米を磨ぎながら、或は鍋を洗ひながらいろ〳〵のことを言つて居る。其話と云ふものは多くは他人の蔭言である。隣りの婆々

はけちん坊であるとか、向ふの爺父はよい〳〵であるとか云ふやうなことが、重に其會議の議案になる、而して多くは惡口案が可決され、賞贊案は否決される。是は何故であるかと云ふに、裏店國の人民の思想程度が低いからである。勿論裏店も悉くがさうであるとは言へぬ。大學者も、大政治家も。天文學者も居るかも知れぬが、先づ概して思想程度の平均が低い社會である。これ等の社會に起る所の問題と云ふものは、多くは個人的評判である。それからもう一段程度の高い所へ行くと、話が稍々個人的でなくなつて、世間一般の話となり、大分範圍が廣くなつて來る。尙一段進むと學術に關する話或は技藝上の話が行はれる、政談もあれば社會談もある、其他風流を語るとか、詩文を談ずるとか哲理を語るとか云ふやうに、話が益々一般的になつて來る。故に其國の人文の程度を測るには、人々の話柄、又は人々の讀む所の新聞雜誌書物の如きものが、個人的即ちパーソナリチーのことの區域が廣いのであるか、或は一般的、ゼネラチーの區域が廣い

かと云ふことを見れば直ぐ分る。恰も手形交換の割合を見て、其國の商業道德の程度を卜するが如くに、其談ずる所、其讀む所の趣味が、一般的であるか、或は個人的のものであるかと云ふことを見たならば、直ちに判別することが出來るであらう。

又之を歷史的に考へて見ても、社會の發達の順序から言へば、幼稚なる社會に行はれる談柄は、主に個人的の話である。先づ戰爭の話にしても、戰爭全體に關する戰略とか、開戰の理由とか云ふものではなくして、熊谷敦盛義經辨慶とか云ふやうなのが大部分を占めて居る。是は日本ばかりでなく、何れの國でも昔は同一である。ホーマーの詩にしても、有名なるトロイの合戰杯を謠つたものに過ぎぬが、其事柄が多くは個人的武勇談其他總て古代の物語は、巨人の功績を敍するの風がある。勿論是は惡いことではない、否非常に面白いことではあるが、一個人の武勇とか卑怯とか云ふことが主なる談柄になつて居つた。而して稍〻進んで來ると、同じ戰爭の話

をしても、戰爭全體の形勢、戰爭全體の優劣を論ずるやうに傾いて來る。尙戰爭以外の話でも、談柄が社會全般のことに亘るやうになつて來る。然るに近來の文壇の有樣を見るに、全く井戸端會議の議事錄とも云ふべき樣子を有つて居るやうに予は思ふ。新聞雜誌等にはどう云ふ事が書いてあるかと云ふに、主もに人のことが書いてある。社會の各方面のことを書くのだから、無論人のことも書かなければならぬ、併し其割合は多過ぎる、それは決して一般に思想の程度の高い徵では無い。新聞雜誌は恰も指風針のやうなもので、之に依て國民思想を卜する事が出來る。即ち手形交換所に依て其社會の商業道德の程度を見る如くに、讀物に依て讀者社會の品位の程度を卜することが出來る。

近來は學校の敎育も隨分擴まつて來て、世間の人は一般に文字を讀むやうになつた。今日の靑年は殆ど總てが學生である。以前は學生なるものは靑年中の一小部分に過ぎなかつたが、今日は靑年悉くが學生であると言つて

も宜い位になつて、學問をし、文字を讀む區域が廣くなり、讀書界が非常に擴張されて來た。併ながら無形なる思想、趣味と云ふものは、機械的に文字を讀む程に急に向上するものではない。字を見ると云ふ眼は多くなつたが、物を考へると云ふ頭は其の割合に進んで居らぬ、書いたものは讀める、併ながら或る程度以上のことは讀めぬ、讀めても分らぬ、分らぬから面白くないと云ふので、一般の人には或る程度以下のこと、先づ具體的のことが最も頭に入り易いので、之に向つて趣味を感ずる位の所になつて居る。恰度田舍者が鹽鹹いものが好きな爲めに、田舍料理屋はそれ相當に辛い料理を拵へるやうなものである。

又老人達の經歷談と云ふものが非常に流行する。謂ゆる成功談であるが實は自慢話である。俺れは五十錢の金から五十萬圓の財產を造つたとか、二圓五十錢の月給から二萬五千圓になつたとか、給仕から勅任官になつたとか云ふやうなことを言ふ。是れは一方から言へば、人々が年を取つたと云ふ

のであらう、維新前後に頭角を現はして今日地位を得て居る人が、先づ還暦の祝ひでもすると云ふことになると、自分の自慢話がしたくなる、俺の若い時分には斯樣々々であつた、今の學生のやうなものではなかつたと云ふやうなことを無暗に言ひたくなる。是は老人の病氣である、過去を語るやうになれば其人の未來は無いと言つても宜い、願くは人は死ぬる際まても將來を考へてもらいたい。立身成功と云ても實に知れたものである。尤も青年の教訓にでも成る事は必しも惡くないが人各々境遇がある、必しも眞似をして行けるものでない、是も人に就ての話の多い一原因であらうと考へる。

併し是等のことは極く小原因であつて、大部分は國民の思想の程度が低いと云ふ評は免れぬ。是は讀物ばかりではない、今日本では立憲政治が行はれて居ると云ふやうなものゝ、眞の立憲政治、政黨内閣と云ふものが歐羅巴、殊に英國などの如く立派に行はれぬと云ふことも、國民の思想の程度

が低く人に依て黨し主義に依て黨すること能はざりし爲めである。憲法有終の美などゝ能く人は言ふが、英國近來の政治上の騷ぎなどを見ると實に面白い、確に日本などよりは有終の美に近づいて居ることを見ることが出來る。日本では政黨を作るとか言つても、眞に主義を以て立ち、政綱を以て立つと云ふ政黨は未だ嘗て出來ない。由來起る所の政黨に付て其綱領を讀んで見ると大概同じことである。同じ綱領、同じ主義ならば一つの政黨になつたら宜さゝうなものである。然るに其目的が同一であり、主義主張が同じであり、政綱が同一である所の者が、なほ黨派を分けて喧嘩すると云ふことは譯が分らぬ。主義主張を異にして、自分は保護貿易であるが向ふは自由貿易である、彼れは内治改良であるが俺れは外交發展であると云いふやうに、其主義とする所が違へば、如何なる骨肉の間でも、親密の間柄でも爭はなければならぬ。尤も其爭たるや君子の爭で、政局以外には決して爭はぬ。然るに日本の黨派はさうでない、あの男がある黨派へ行つたから自

分は此方へ行く、誰れが何黨に入つたから他れは此黨へ入らうと云ふやうに、所謂人に黨する所の朋黨である、私黨である、決して公黨でない。故に如何に大政黨と云ふも私黨に過ぎぬ。例へば一の村へ行くと、其村の中には白壁の倉のある家が二軒ばかりは大概ある。何か事のある毎に一方が右と言へば他方では左と言ふ、兩雄幷び立たずとても云ふのか、詮ずる所嫉妬心の産物に外ならぬ。それが總ての爭の本となつて、大は國政より小は村治に至るまで互に爭ふのである。即ちパーソナリチーの思想のみで、ゼネラリチーの思想が無い爲に、此の如き結果になる、是は確かに國民の思想の程度の低い證據である。

以上は全體の話であるが、學生間に於て人格を修養し、眞の士君子となりゼントルメンとならんと欲する者が、俗に云ふ金棒を曳いて廻るようでは、到底立派な人格を造ることは出來ぬ。之は文明人士の最も恥づる所であるから、飽くまで愼まなければならぬ。他人の所有權は尊重しなければならぬと云ふが、所有權は有形物のみに止まらないことは勿論の話で、國の文明の程度が進めば進む程、無形の所有權が出來て來る。人に渡すことも出來れば自分の手にも握ることの出來る有形の物に就ては、野蠻人でも人の所有權は認めて居るが、無形の所有品に對する觀念は極めて薄い。頭を使つた人の勞働に向つて報酬する考も極めて薄弱である。人の無形の勞働に向つて報酬すると云ふ考は、日本人にはまだ無い、又人の無形の財産を尊重する觀念が無いから、隨つて他人の名譽を何とも思はぬ。苟も高等の教育を受けて人格を養はうとするならば、先づ此邊のことに注意して、氣品を養ふことが最も大切であらうと思ふ。

論語の中に子貢人を方すと云ふことがある、子貢は孔門の十哲中の賢人であつたが、孔子は此人の缺點を指摘して子貢人を方すと言はれた、即ち人の優劣を比較することである。聖人は三千年の昔に於て之を惡德の一に數へて戒められて居る。

四　禮の說

歷史學の始祖として知られたる希臘の古賢ヘロドタスは、各國巡遊の途に上り、遂に埃及に到つて其風俗を見るに、悉く希臘と反對なるに驚いた。希臘の僧侶は故らに頭髮を長くするに埃及の僧侶は剃髮する。希臘は立つを禮とするに、埃及は座するを禮とする、希臘は靴を穿つを禮とするに、埃及は靴を脫くを禮とする、實に所換れば品換ると云ふ諺の如くである。禮式の如きは國々の習俗で別に理窟はない、どう云ふ理窟でどう云ふ禮式を行ふと云ふこともない、所謂コンベンショナリチーであるが、併し西洋の禮式の書物を讀み、又日本の禮式の書物を讀んで見ると、凡そ其社會に行はれて居る大體の主義が分る。日本の禮式には、貴人の前に在るときは云々せよといふことが多く、西洋の禮式には婦人の前に在る時は云々せよと云ふことが多い。日本の禮式の標的を貴人と立てたのは、則ち日本の社

會が階級制度の嚴重な爲めであつて、上の人に事へると云ふことが殆ど禮儀の唯一の目的になつて居る。士人が諸侯の前に出たときには何うする、大夫の前に出たときは何うすると云ふことが、始終人間の頭を支配して居つて、所謂禮は上下貴賤を分つ所以なりと云ふ主義から、細大の儀容が起つたのである。西洋禮式に云ふ、婦人の前にあるときは云々せよと云ふ事は、西洋の社會に於て婦人を優待し、尊敬すると云ふのが禮式の目的になつて居て、子供の時分から此習慣の中に養はれて居るので、例へば子供が茶を上げやうか珈琲を上げやうかと問はれたときに、茶を貰はう——イヤ珈琲にしやうと云ふやうなことを言ふと、そんな說を變へる如き、貴婦人の前で失禮であると云て叱からられる、話の中に足とか腰とか云ふ辭が交ると云ふことは皆婦人に對して失禮に成る。則ち昔時日本の禮式に於ける貴人と、西洋禮式に於ける婦人と同じ資格をもつて居る。日本では婦人を足弱と侮つて、道中の雲助や車夫が無理を云ひかける。西洋は其反對に男子

計りの連中は却つて粗末に扱はれ、一人でも婦人が其の一行の中にあると
ホテルや馭者なども決して無禮をしないと云ふ風である。これは歴史的因
縁のある事で歐羅巴の中古盛に行はれた、シバルリイ即ち武士道から因襲
して來た。何も日本の武士と違はぬ、弱きを扶け強きを挫くと云ふ任俠の
點も同一であるが、其の弱きを扶けると云ふ中に婦人を扶ける、只扶ける
のみならず大に之を尊敬する、婦人の命ずる所は如何なる危險をも避けぬ
と云ふことが武士の意氣地として賞讃し、之をガランントリーといふ。ガラン
トリーは勇氣といふ字であるが、殆ど勇氣といふ意味を離れて、總て婦人
に盡すことをガランントリーといふ位になつて居る。尤も此時代のことであ
るから只外形丈は婦人を尊敬するが、内實は隨分野蠻な事も多かつたと云
ふ、日本の武士道も同じことで、正直、廉耻、義俠を重んずる一點は同じ
事である。日本にも弱きを助けると云ふことは無論あるが、婦人を優待せ
よ、婦人を尊敬せよと云ふことは、あまり日本武士の教にはなかつたのみ

か、却て女わらべの知る事ならず抔大に輕蔑したものである。何れが宜い
か惡いかそれは別問題として、武士道は必ずしも日本特有のものでない、
西洋でも封建時代には武士道が盛んに行はれたよしである。法律の制裁が
弱く、小社會と小社會とが互に戰爭して居る私鬪時代には、武士道とか任
俠とか云ことは自然起り得る。日本に武士道がある如く歐羅巴にもシバル
リーはあつた。今のゼントルメは其末孫である、武裝を解ける武士である。
併しながら此武士道は、西洋では四百年前に消滅し、日本では四十年前迄
存在した。隨て日本の武士道は充分に發達し其品位も一層高尚の點に達し
た。而して一方は婦人を尊敬し、一方は婦人を輕蔑すると云ふことになつ
て居る、それが先づ今日の禮式に於て相違をなし、其他道德法律等萬般の
事に相違を起して來て居るのである。併しながら今日の文明社會を見るに、
所謂この婦人本位の禮式は、貴人本位の禮式よりは寧ろ都合が好くなつて
來て居る。此の貴人本位の禮式は嚴格な階級制度の時代に適合したが、今

日の平等社會になつて見ると其禮式は通用せぬ。婦人本位の禮式が遙かによく適合してよく行はれる。凡そ男女兩本位の社會に於ては、どう云ふ場合にでも婦人の居らぬと云ふことは少ないから、婦人に對して禮を守ると云ふことになつて居ると、社會全體の秩序を立てゝゆく上に就いて、大に都合が好い。これは偶然のとて、何方がえらいとかえらくないとか云ふ問題にはならぬが、只二者比較の上の議論であつて、決して後者を以て完全なものとは云はれぬ。現に西洋に於ても新主義の婦人等は此形式的婦人尊敬法を排斥して、彼の車中に於て男子に席を讓らしめ、途中に於て履の紐を結ばしむるが如き事を好まず、眞實の同權、即ち政治上、學問上、職業上に男子と同一の權利を得ん事を勉むる者が益々多くなつた。全體此禮式は、最初世の中の開けぬ人類の粗暴なる時、人間が非常な利己主義の自分勝手で、人の事は構はず己の慾を達すれば宜いと云ふ時代には、之を抑へなければならぬ、それを抑へて社會の秩序を保たなければならぬと云ふ必

要から、いろ〳〵やかましい禮法の設けが起つたものである。支那の古聖人の教は禮を以て律し、樂を以て和げ、禮樂を以て天下を治むる主義で、社會の秩序を保つ上に大切な事になつて來た。全く社會を成すには、人間の非社會的性情、即ち利己的動作を抑へるが爲に、禮式の檢束が必要缺くべからざるものとなり、むやみに複雜なる禮式が生じた。所謂禮儀三百威儀三千則ちこれである。禮記にも鸚鵡能言不離飛鳥、猩々能言不離禽獸、今人而無禮雖能言不亦禽獸之心乎と云ふことあがる。萬物の靈長たる人間と禽獸との區別は禮を知ると云ふ一點、殆ど此一點を以て人畜の分岐點と見て居るが、後世の今日から見るとそんなに大したものでもない。これは唯人と人との間の默約で起つたことである。眞の自然から繰出して來た所の道德道義と云ふ程のものではない。併し禮は決して下等動物の社會にはない。如何なる悧巧な猿でも猿社會に禮式と云ふものはない、況して猿以下の動物には無論ありはせぬが、人間に限て或程度に達すれば、必ず禮と云ふこ

とが起つて來る所を見ると、是は人間の如き智德を具へて居る動物に限つて發達し得る所のものに違ひないと云ふことが分る。そこで支那の周の世の如きは、最も禮を重んじて周禮、儀禮の外に、尙禮記に載する所を見れば、禮儀三百威儀三千とある。しかし多くは是れ君主の威嚴を示すが爲に出來たのが多い。周の禮は春秋戰國の間に亂れ、秦の天下になつて全く沒却されてしまつたが、又漢の高祖が天下を取つて、叔孫通といふ人が此禮を制して、始めて天子の尊きを知つた。歷代の天子は禮を作つて天子の尊きを萬民に示すの例であつた。しかし其の禮と云ふものは、非常に混雜なもので、成たけ天子は尊いもので、天に近いものであると云ふことを示すためにやつたから、支那歷代は勿論現に淸帝の如きも、天子は、自分で作つた其禮の爲めに束縛されて、二進も三進もいかぬことになつて居る。此に至ると實に形式的褥禮の害は恐ろしい。それと同時に日本の禮も周代封建の禮式を本として、日本の階級制度に應用されたもので、天子諸侯士庶人の

尊卑を分つ爲めの主意から起つて居る。其の本元たる禮記から一二の例を取ると、執天子之器則上衡國君、則平衡、大夫則絞之、士則提之云々或は又天子死曰崩諸侯曰薨大夫曰卒士曰不祿庶人曰死の類で、貴賤を分つ事が主眼になつて居る。日本に小笠原流だとか何流とか云ふものがある、形式に過ぎて實用に合はぬ。それが爲に時間が費へる、それが爲に數年の練習を積まなければならぬ。本式の婚禮にても呼ばれゝば、ヘタ〳〵になつて二三日は病氣になると云ふやうな事で、これは餘りにコンモンでない、如何にも忙しい文明社會に適合しないのである。女學校などで禮式を敎へるが、摺足をして目八分に御膳を持つて往くとか云ふやうな事は、通常の場合に於て通常の人に適用されぬ、非常な大禮の時にのみ行はれても、平生が殆ど無禮講で、その相違が甚しくつて益々困る。去ればと云て毎日小笠原流で飯を食はせられては、迚も三百六十五日續く者ではない。それから西洋の禮式はどうてあるかと云ふに、是れも隨分厄介な事が多い、なか〳〵や

かましいのであるが、しかし時勢と共に段々進化して來たやうてある。そこて餘り馬鹿々々しい事は段々無くなつて居るから、世の中の進歩と禮式とが、うまく伴つて進んて來て居るだけが、日本や支那の禮式よりも西洋の禮式は宜いやうてある。主として公衆相互の便益と、全體の秩序を維持するの禮式になつて來て居る。只彼の貴人にのみ事へる主意の禮式てない丈が宜い。婦人の前に言行を慎めと命ずる禮式は、恰かも此目的に適合して、然も偶々公德を保つ事になつて居る。理想の禮法は己の欲せざる所、之を人に施す勿れと云ふ教訓を、形式に實現したものと云てよい。日本の禮儀もまづ此主意に從つて段々改正して往かなければならぬ。しかし元來理窟には別に關係のない事てあるから、國々によつて禮式は違つて居る。譬へば頭をさげる禮もあるし、又手を擧げる禮もある。これなどは別に理窟はなく、頭の方から下げても手の方から上げても宜い。それから座るを禮とするのもあり、立つのを禮とするのもある。帽子を脱くのと帽子を着

けると何れも禮になる。又靴を穿くが禮てあるかと思ふと、又足袋を穿くのが失禮だと云ふて、少しも標準はない。勿論其國の家屋にも依れば衣服にも依る。衣服と家屋と禮儀とは、皆互に關聯して居るから、西洋式が直ぐに應用も出來ぬ。方式は何てもよいやうなものてあるが、あまり馬鹿々々しく時間を失ふ事や、あまり人に面倒をかけることは禮てない。日本て最も困るのは、同席の客が部屋に入る時など、まあ貴所からマア貴所から……何時まで經たつて喧嘩が果てぬ、あれは實に困る。それは西洋流てもお後からと云ふことは言ふが、さう執拗く云ふやうな事はない。客に座蒲團を出す時の喧嘩なぞは尚ほ甚しい、サアどうぞお敷き下さい、どう仕りまして、サアどうぞ……、座蒲團こそ迷惑千萬、恰かも春秋の鄭の國の如く大國の間に挾まつて、晋に事へんか、楚に事へんかと云ふやうな有樣てある。そんな事て日本人は大抵時間を費して居る、先づ宴會ならば主人、集會ならば會長の指圖通りにするは勿論の事て、漫りに謙退辭讓するは甚

しき非禮である上に、順序を亂す事になる。西洋も昔は隨分讓合ひもあつた、或時、イスパニア王が、二三の侍從と共に馬車に乘る時、先づ侍從の一人に乘れと云はれた。其侍從は別に辭退もせずに、一揖して直ちに乘車すると、續て王も乘つた事がある。これは能く君命に從たもので、禮の神髓を得たものだと云ふて禮式上の好例とされて居る。又敬稱の如きも、妄に之を濫用するのは禮の眞意を得ないものである。彼の禮儀國たる英國の如きも、近來に至ては、陛下殿下閣下等の如き敬稱は、最初に一回之を用ゐて再び之を繰返ざるを以て辭令の體を得たるものとして居るが、是は大に參考とするの價値あると思はれる。近年我國に流行する、何々閣下々々の連發の如きは、餘り禮意に適つた者とも云はれまい。素より人に遇つてもロクに挨拶もせず、枯木の如く突立つて居るのはわるい事で、相當の挨拶相當の會釋もし、成るべく敬愛の意を表しなければならぬが、又彼の叩頭九拜の如きは、大に禮の主意に外れて居る。人を敬するは誠に大切であ

ると同時に、此敬禮も過るときは諂諛に陷るか、否らざれば愚弄に當る、又人の卑屈な禮を受けて悅ぶのも甚だ獨立の主意に背く、獨立の人を他人をも助けて獨立せしむる義務を持てる以上は、あまり卑屈な禮は受けて滿足する筈はない。言葉の使ひ方、手紙の書き方にも法外に先方をあがめ、自己を卑下するは却て非禮になる。去れど粗暴無禮の惡むべきは勿論の事て、現今の青年の缺點は、寧ろ此に在ると同時に、老人の缺點は前者の方に在る。要するに今の日本は虛禮と無禮、褥禮と粗暴の兩極端に走つて居ると云はねばならぬ。これ全く今の社會に適合すべき禮儀の定まらぬ爲めである。全體此禮式の起源に就て種々の說もあるが、東西共、古代の禮式は皆卑屈な態度であるから、是は或は敵に降參した時の態度が禮式になつたのかも知れぬ。其は兎に角、禮は今日の文明人にも大切で、人間の交際は禮儀の爲に圓滑に往つて居る。お早うとか、お寒うとか言つて見た所が、別に溫くも寒くもなりはせぬが、丁度器械に油をさすやうなもので、自然

に人情を融和し、滑かに交際が行はれるやうになる。國と國との間でも、祝砲を擊つとか、國旗を揚げるとか、云ふやうな事も、誠に子供らしい事であるが、爲に國際上の感情を融和して、戰爭になるべき所も、ならずに濟むと云ふやうな效能を持つて居るに違ひない。尤も此方が二十一發祝砲を擊つたのに、向ふが十九發しか擊たぬ、と云ふやうな事で、戰爭になることもあつたが、此禮式の爲に起るべき戰爭を起さずに、防いで居る數の方が多いに違ひない。修身要領にも、禮儀は敬愛の意を表する人間社會の要具てあるから忽せには出來ぬ、只過不及のなきを要すると云ふてある。過ぎたるは猶及ばざるが如し、及ばざるは粗暴に流れ、過ぎたるは諂諛になる。世の中の進歩につれて、禮儀も成べく普通な事にして、それが爲に時を費し、面倒をかけることのないやうにしたい。――禮儀は元來習慣にして理窟のものではないが、成たけ合理的にして無意味な虛禮を廢し、文明世界に通用すべき禮儀の發達して、個人の公德を表顯し、社交上の秩序を正

しうするは今日の日本に於て、最も急務とする所である。

五　人格を重んずべし

明治三十五年頃英國學務局の年報中に、面白い事が載つておつた、それは外の事でもない。英米獨佛の各國で人物を鑑識するのに、其標準がそれ〳〵違つて居る、こゝに一人の男があるとせば、獨逸では此男は何を知つて居るか？直に其人の知識に眼を付ける、米國では彼の人は何んな事が出來るか、直に仕事の才能を見ようとする。英國では彼れは如何なる人か、其人となり、人格、品性に着眼して學識才能には重きを置かぬ。佛國では彼れは如何なる試驗を通過したかと云ふ、只試驗の及落を目安にして人の値打を極める。斯の如く何も彼も試驗々々と云ふのは如何なる譯か、佛國は元來甚しい中央集權の國家主義で、何も彼も政府の一手に吸收して、民業に干涉する流義であるから、行政官の員數が七十萬人もある。學校の卒

業生も皆官吏になるのが目的て勉强し、試驗に及第して法學士は司法省、工學士は工部省、農學士は農務省、文學士は大學教授と云ふ次第て。誠に韻を履んて詩ても作つた樣に調子が揃つて居る。そこて試驗萬能、詰込專一、工學を學んて工業を營まう、農學を學て農業を勉めようと云ふ目的てはない。只其道々の役人にならう、鑛山學を遣のは鑛山局の役人に爲る目的てある。それが爲めか佛人の名刺にはよく何々學校出身とか卒業とか。又は何々學士何々博士とか必ず肩書を付てをる。決して學問を活用して自營の計を爲す考はない皆役人の稽古をするのてある。是は官僚政治の結果てあつて、試驗の及落は生涯の運を極めるのてある。佛國では奈翁一世以來頻に此流義てやつて、一時は花を咲かしたものゝ、今日では其餘弊に苦んて國運も日々傾きつゝある。教育も商業も美術も政府てやるから民業の區域が狹くなり、人民の企業心は段々減退し、金を溜めても事業をせずに公債を買ふ。自國の公債丈けては溜めた金がはけ切れぬ所から、露國と云

ふ大山師大ペテン師に引掛り利息のよいのにうつゝを拔かして居たが、遂に日露戰爭て大狼狽をした、これも身から出た錆なら仕方もあるまい。今の獨逸の國家主義も元は佛蘭西の風を眞似ねてやつた者て、それに段々自分流を加味したのてある。又獨逸が專ら知識にのみ重きを置て、人物の價値も此一事を以て判斷すると云ふのも、幾分か試驗流義に近い方てある、凡て此等の中央集權的の國家主義を日本に持ち込んて來るのは、前にも云ふ通り頗る素人分りのする、又頗る眞似の出來易い仕組てある上に、只見物し聞きかぢつて大した深い考もなく、只形式丈を見て歸て來ると、さあ之れも政府てやらう彼れも官業にしよう、煙草官業酒造官業藥劑官業から吳服官業迄やつて、序てに服地の色模樣等をも法律て定めて、身代不相應な着物道樂を許さぬ樣にして、稅源の增加と勤儉貯蓄とを一度にやらう、もう一歩進んて文部省の國定教科書の文句を、浴衣地の模樣や友染の形に染めたならば、教科書入らずに教育の普及も出來て、一舉三得の名案では